

預言詩人 賀川豊彦

村島帰之作品

このブログを始める直前(2011年6月)に、標題の村島帰之の名作『預言詩人・賀川豊彦』の「私家版」(A4版、92頁)を仕上げ、神戸の賀川記念館・東京の賀川豊彦記念松沢資料館・徳島の鳴門市賀川豊彦記念館などへメール便として届けていました。

これは、イエスの友会の機関誌「火の柱」において、昭和25年3月5日から27年2月5日まで20回にわたって連載されていたものをコピーして切り貼りして繋いだものです。

神戸の賀川記念館では、賀川ミュージアムの語り部さんたちのために、その一部をコピーして渡され、このコメントを私に求められました。それで、その学習会の準備のために、一度仕上げた上掲の「私家版」を再読してみますと、賀川の詩作品の引用が余りに杜撰なものであることに気づき、ひとつひとつ賀川の本に当たって補正の必要なところをチェックしました。

結局、語り部の皆さんとの学習会(6月10日)では、補正が間に合わず、「作品発見の経緯」「村島の略年譜」「16章構成でなる連載作品の概観」「詩人としての賀川に注目した人々」「地元の詩人・井上増吉」などについてお話をして学び合いました。

村島の賀川の詩作品の引用がなぜ杜撰になったかについては、一つは「火の柱」という機関紙で、字数も極端に限定されていたことと、村島自身が新聞記者という「物書き」で、文学の世界にも通曉していたことから、賀川の本にも敢えて自由に手を加えることも許されるとしたのではないかと、ということなどは一応考えられることです。

いずれにせよ、村島のこの作品は、「詩人としての賀川豊彦」を理解する上でも、大切なものであることは間違いありませんので、改めてこのブログで、引用箇所などの補正をくわえながら、少しずつ連載を見てみたいと思います。

このブログは、日々の気ままなノートを公開する場所ですが、同時並行で進めている別の三つのブログ(「賀川豊彦の魅力」など)も、現在連載中のもので詰まっていますので、しばらくはここで、気ままな日録に、この連載分を交えながら進めて行きます。

預言詩人 賀川豊彦

村島帰之

序章

健康的な近代詩

萩原朔太郎の耳には、時計の点鐘が「じぼ・あん・じあん！ じぼ・あん・じあん！」と聞こえ、犬の吠える声が「のをああるとおあある、やわあ！」と聞こえるという。異常な神経と感覚を持って、詩人の耳は、普通の人間の聞き取れない微妙な音を聞き分けるのである。

朔太郎の、こうした擬音は、そういわれて時計の点鐘なり、犬の吠える声に耳をすまして聞いていると、なるほどそういうふうにも聞こえるような気がしてくる。

ところが、この頃の先端を行く近代印象派の詩人の、ただれた官能によってうたわれる象徴詩などによると、精神分裂症の患者の言葉のようにはか思えないのである。

といて、わたしはボードレールの詩に弾圧を加える輩に賛成するほど無神経ではないつもりだが、少なくともこの頃の「尋常ならぬ詩」だけを詩だとするには同意しかねる。

もちろん、近代人の感覚は、新しくなり鋭くなっている。しかし、その先鋭化が果たして健康なものか、それとも病的なものであるかを見極める必要があると思う。

ゲーテは「新しいものの大半は浪漫的だ。しかし、それは新しいためではなく、弱々しく病的だからである」といっているが、新しいもので、しかも病的でない、健康的な近代詩があってもいいと、わたしは思うのである。

末梢神経にあらざる詩

島崎藤村は、「生命は力なり、力は声なり、声は言葉なり。新しき言葉は、すなわち新しき生涯なり」といって、生命即芸術、芸術即生活を説いたが、病的な末梢神経によらず、健康な生命力から沸き上がる熱情によって歌い上げる詩こそ、真の詩ではないだろうか。

賀川豊彦はすぐれた精神の持ち主である。しかし、異常な神経や感覚の持ち主ではない。彼は健康な生命力から沸き上がる熱情を胸に伝えて、浪漫的でしかも単純・素朴な真実の詩を歌う。わたしは確信を持っている。賀川豊彦は、十分に詩人であると。

素朴な人と感傷詩人

一体、詩的精神は、人間性と共に永遠不滅のものであるが、これの表現には少なくとも二つの行き方がある。一つは、昔の中国の詩人のいったような「咳唾珠をなす」といったふうに、口をついて出る言葉がそのまま詩をなしているもので、シラーはこれを「素朴詩人」と呼んでいる。

もう一つは、一定の理念によって対象を細かく分析し、深く掘り下げ、彫琢の苦心の末、出来上がるもので、シラーはこれを「感傷詩人」と呼んでいる。冒頭の萩原朔太郎はそれである。また、ホーマーやゲーテは、ほとぼしりである感情の精が、そのまま詩になったというから「素朴詩人」の範疇に入るのであろう。

賀川豊彦をホーマーやゲーテに比するには不遜といわれるかも知れない。しかし、その自然流露そのままが詩となる点、すなわち「素朴詩人」たる点においては、同じ系統に属しているといえよう。もちろん、詩情の深さ、詩形措辞の豊かさなどは比較の限りではないが。

彫琢の苦心のない即興詩

賀川を詩人として見るなら、彼は「自然詩人」である。「素朴詩人」である。彼においては、感興の湧くところ、たちまち詩となり、歌となるからである。その間、ほとんど彫琢の苦しみというものを経験しない。いや、あまりにも苦心をしなすぎるといった方がいいのかも知れない。

彼はあだかも昔の俳人が腰折をつくるように、インスピレーションによって、さらさらと無造作に歌いあげる。事前・事後ともに字句の推敲などほとんどしない。

従って、彼の詩には、彼の第一詩集『涙の二等分』の序文で、与謝野晶子が無遠慮に指摘しているように、「語法」や「仮名遣い」の間違ひもかなりもっているのみならず、とんだ言葉の履き違ひをすらすらと、平然とすましているのである。

一例をあげると、彼の歌に「足袋はだし尻切とんぼ頬かぶり地球は実にこの人ぞ廻す」というのがあ
る。

この歌は、労働の貴さをうたった彼の秀歌の一つであるが、「尻切とんぼ」は明らかに「尻ばしょり」の
誤りに違いない。こうした不用意の誤りは、彼の詩歌が大部分、即興を詠み流したもので、彫琢・推敲
の苦を経ていないことを物語るものである。

しかし、彫琢・推敲の苦を経ていないという批難は甘受せねばならぬが、詩的熱情が足りないとは決
してはいえないと思う。むしろ、熱情のほとばしり出るところ、文字の上の技巧を加えている余裕がないの
である。彼にホーマーやゲーテほどの豊かな詞藻はないにせよ、熱情に至っては遜色があるとは思わ
ない。

賀川の詩は、熱情が凝って文字となったもので、多くの詩人のように、文字から熱情を歌いだしたも
のではない。それだけに、彼の詩には、純一無垢のものが見られよう。賀川の詩は、その文字を読む
べきではない。彼の熱血を読むべきである。

繊細な詩情と韻律には乏しい

無造作に、自然流露のままを謳い流す賀川の詩には、心象や感情の豊かさはあっても、繊細な感
情、柔軟な韻律に乏しいのはやむを得ない。優しい心を美しき言葉で歌っていなければ詩ではないと
いうなら、賀川の詩は詩ではない。彼の詩は韻律に乏しく、「丹波栗」などの童謡を除いては、暗誦す
るに適したものはほとんどない。

また、その取材にしても、神や罪悪や病苦や貧苦を採って、恋愛は稀である。（昌子の激賞した、春
子夫人との結婚の歌「魂と魂と」などは、その稀なる例のひとつであろう。）

星菫派の詩集に最も多い「君」や「恋」という語は、賀川の詩集には稀で、その代わりに「神」や「貧」
などの文字が多い。しかし、そうした誌が詩でないとなれば誰がいいえよう。

賀川の詩には、島崎藤村のような優婉なる調べも見られない。韻律性は甚だ稀薄である。また、薄
田泣菫のような巧緻な古語のものない。蒲原有明の象徴も、朔太郎の官能表現もない。

ほとんど散文、というよりは日常語の羅列である。それも、貧民窟で通用するような、荒っぽい言葉
の並べっばなしである。

前記の詩人たちが、一字一句をゆるがせにせず、語法・語韻を尊重したのと比べると、国語の虐待、
言魂の尊厳冒瀆といえるかもしれない。

「言葉の詩人」ではない

賀川は国語を虐待する。その意味の限りにおいて、彼は詩人ではない。賀川が詩人であるのは、熱情のゆえであって、言葉のゆえではない。もし言葉の詩のみが詩なら、もちろん賀川の詩は詩ではないだろう。

詩は言葉で表現されねばならぬが、しかし、言葉だけでとどまるものではない。世の詩人は、言葉の上の詩に専念して、熱情を閑却している。

藤村は「詩を新しくすることは、眠っている言葉を起こすことである」といった。だが眠った言葉を起こす前に、眠った情熱を呼び覚ますことを忘れていいものだろうか。

賀川は眠れる言葉はそのまま眠らせて、熱情を目覚めさせ、内から噴き上がらせて、これを歌うのである。彼にあっては、文字は従、熱情は主である。

運動も事業も論文も詩だ

賀川は熱血詩人である。宗教的には、だから預言者的詩人である。彼は単に文学としての詩の製作者というよりは、もっと広い意味の全人格的詩人である。

預言者的な全人格的詩人である彼は、単に詩を書くだけではなく、詩を実践し、詩を行動する。いや反対に、彼の行動・実践が詩である。否、彼の書く論文さえがリズムのない詩である。彼の名著『貧民心理の研究』のごとき、『主観経済学の原理』のごとき詩である。預言者の詩である。

賀川の詩を、彼の詩の言葉の中にのみ求めてはならない。預言者・賀川の中に詩を読み取らねばならない。彼が「世界のカガワ」として、各民族から尊敬せられ、愛せらるるのも、彼に詩があるからである。

大衆は論理よりもデリカシーを愛する。デリカシーを解せず、詩をもたない社会運動家・社会事業家は、ビタミンの失せた野菜でしかない。賀川は常に新鮮味を失わない。彼は永遠の青年であり、詩人である。

優婉もないが、晦渋もない

さて、もう一度、文字としての詩に帰ろう。では、賀川の詩は、一体どういう詩であるのか。

日本の詩は、西詩のソネットと趣きを異にしているが、その詩形は様々で、明治の新体詩から今日の自由詩に至るまで、およそ大別してまず二つに分けることができよう。明治以降の伝統を踏襲する定律詩と、伝統を打破する不定律詩・自由詩とである。

そして前者の定律詩は、さらに二つに分けて、今様以来の七五の正統調を厳守する純正定律派(藤村、晚翠により代表される)と、詩律ではあるが七五の正統はとらず、五・五・四などの破調を用いる破調定律詩(泣菫、有明により代表される)と、そして文語もしくは口語の不定律を用いる白秋以降、大正・昭和詩人の自由詩があるが、賀川はもちろん、最後の自由詩をとっている。

彼の「肺を病みし頃」の中などに、藤村らの影響と見られる定律詩も二三散見するが、優婉と評し得られるような作品は全くない。有明以後の象徴詩に見る難解なものごときは全く見当たらない。

この点、彼の詩は、韻律には乏しくとも、大衆性を持つといえるであろう。もつとも、大衆といっても、センチメンタルを喜ぶ年若い子女は、彼の影響下にある信仰者を除いては、あるいはこれに含まれないかも知れないが。

ヒューマニズムの体臭

賀川の詩は、すべて自由詩で、定律詩の韻律はないとしても、決して「詩らしいもの」を失ってはいない。それは不定律ながらも、韻律が潜んでいるからである。と同時に、作者の心にひそむ温かいヒューマニズムが、岩間から流れ出る清水のように、外へとにじみ出るからであろう。

近代詩の中でも、キュービズムとか、ダダイズムとか、ヒューチャリズムの如き散文的ポエジーに比べると、彼の詩には明らかに、ほのぼのとした体温が感じられる。

これは、彼の叙事詩たると叙情詩たるを問わず、すべてがヒューマニズムに立脚し、ロマンチズムに彩られ、韻律に乗っているからで、全く賀川の持ち味といっている。

賀川は自分の歌集『銀色の泥濘』に序して、これは「即興的に書いただけに、庭先で書いたもの、出発の際の混乱中に書きなぐったもの等が多く、推敲は全くしていない。だから、また、その日その日の『感情の日記』に成っているかも知れぬ。(中略)私が、全能者の手に守られて来た『歌日記』として云々」といっているが、それはこれらの詩歌が、彼のからだから自然と発散する体臭のような物で、必ずしも、読者の共感を得ようとして作った労作でないことを物語るものであろう。読者は彼の体臭にも似た彼の心の日記、感情の歴史を、この詩歌の中に読み取るのである。

ためらわで言うぞよき

藤村は「思えば言うぞよき、ためらわずして言うぞよき」といい、また「ああ詩歌は我にとりて自ら責むる鞭にてありき」と言っている。そして彼は、時流に媚びず、封建の迷夢さめやらぬ道学者を尻目にみて、古き女の殻を破り、新時代のいぶきの中に、日本女性を解放せんとし、青春のいのちを歌い、恋を賛美し、新時代の曙を呼び覚まそうとした。

与謝野晶子は、後年、彼女が藤村から受けた影響の大きかったことを感謝したが、晶子の大胆なる思想上の行動は、この藤村の態度から示唆されたものかと思われる。

晶子は藤村以上に「ためらわずして言うた」熱情詩人の第一人者であった。自らをきびしく鞭打った良心的詩人であった。

日露戦争中、彼女の弟が出征せんとした時、彼女のはなむけした詩「君死に給ふこと勿れ」が、もし軍閥華やかなる太平洋戦争最中でも発表されたのだったら、昌子は多分銃剣の先で突き殺されたことであろう。それほど大胆率直に、戦争反対を歌ったのであった。

詩は人類のために

太平洋戦争中、果たして昌子の如く、いいや、せめてはその十分の一の率直さをもって、真実を歌い得た詩人があつたらうか。ほとんど無かった。賀川豊彦は、そのわずかない中のひとりであった。

熱血詩人・賀川は、涙を流しながら戦争を呪う歌を歌った。歌わざるを得なかったのである。

私は卑怯者ではない

ただ私は日本を愛し

支那をも愛している

この二人の愛する者に

喧嘩をさせたくない

そのために、私は毎日

苦しんでいるのだ――

軍部はこの詩のかけに潜む戦争反対の思想を見逃さなかった。彼らは、他のもろもろの反戦的証拠資料と共にこれを取り上げ、彼を牢獄の裡に拘禁した。彼の熱涙の詩「涙に告ぐ」にからまる預言詩人・賀川の受難については、いずれ後段において明らかにせらるるであろう。

しかし、「涙に告ぐ」の戦争反対の歌だけに限らない。賀川は人間苦と社会苦、いや宇宙苦までを歌い上げ、臆するところなかった。

彼によって貧民窟の現実が白日の下に曝され、社会組織の欠陥が強く指摘されたツルゲーネフの『獵人日記』がロシアの農奴解放を促し、ストウ夫人の『奴隷トムの小屋』が南部アメリカの奴隷解放を叫んだように、彼の詩集は、社会の不合理を攻撃して、社会改造の雄叫びをあげた。

20世紀の預言詩人

賀川の詩の表現方法は粗笨に過ぎ、韻律に乏しいだろう。しかし、彼の詩の叫びは、決して小さいものではなかった。彼は人類の救いのために、社会の改造のために、世界に向かって訴え叫んだのである。

芸術的詩の創作に専念する詩人は、詩そのものの中に生涯を賭け、生命を注ぎつくして悔いない。萩原朔太郎の如き「誰が宿命強いられずして自由詩など書くか」と悲痛な告白をしているが、賀川は生そのものに自己の宿命を感じて歌うのではない。

彼の宿命は、神から課せられた愛の実践である。彼はその使命のために全詩全霊を賭けている。彼は博徒の口吻を借りて来て「自分はキリストに一切を張った」とさえ言っている。そして現に、十字架を背負うてカルバリへの贖罪愛の道を急いでいる。彼がカルバリへの途上、自然と心から滲み出したのが彼の詩である。

この詩人は、往昔預言詩人の流れをひいている。しかもこの預言詩人は、きびしい20世紀の現実に立ち、使命達成のため命がけて戦っている。世界の耳目が、この勇ましき街頭の熱血詩人の上に注がれているのは当然である。

以下順を追って、彼の詩歌を通じ、『預言詩人・賀川豊彦』の横顔を素描してみようと思う。

第1章 肺を病みし頃の歌

大詩人と結核

結核は、アドルフ・ブラウンの言ったように、癌などとは違って、同じ神戸の衰弱を伴っても、しばしば生活感の上昇を見、従って創作能力の上進を来たすものである。

例えば、楽聖ショパンが結核のため39歳の若さで永眠する直前など、それでなくても繊細な彼のからだが、いっそう痛々しく痩せ細って、まるで透明体のように見えていたが、それでいて、音楽的才能は少しも衰えを見せぬのみか、ますます冴えていたという。

ドイツのゲーテ、シルレル、ノヴァリス、イギリスのパーソンズ、キーツ、ブラウニングのごとき詩人、ロシアのドストエフスキー、チエホフ、ゴリキー、アルツイパシェフ、アンドレーフのごとき文豪、フランスのパスカル、ルッソー、オランダのスピノザ、スイスのペスタロッチといった学者、日本では子規、檜牛、緑雨、一葉、柳浪などの古いところから、島木健作、織田作之助、太宰治のごとき新人まで結核を患い、特に直文、子規、節、御白、啄木、千櫨、莫哀、利玄、葎子、憲吉などの明治・大正の代表歌人はみな結核であったが、みな最後まで創作能力が衰えず、却って上昇していた。

結核詩人・賀川豊彦

賀川豊彦は一個の天才であり、詩人である。そして同時に結核人であった。中学2年の時、はじめて結核の診断をくだされ、17歳、最初の喀血があり、18歳再び喀血して、医師から死の宣告を受けた。以来幾度か死ぬような大患に見舞われたが、その都度不思議に支えられた。

21歳の冬、使命を感じ、長からぬいのちを、貧しき人々のために捧げようと決心して、神戸の貧民窟に住み込んだ。この捨て身の行動が、彼の病気を好転させる因となった。

賀川は、結核征服の秘訣として、恐怖を去り、精神を安静にし、神を信じて使命に生きることの三つを挙げているが、彼自身この三つを実践したことによって、60歳を越える今日まで、世界を家としてむしろ、超人的な活動を続けることができた。

賀川は、結核を征服した。結核は彼の天才的な働きを妨げなかった。いや、妨げないばかりか、結核を病んだことによって信仰を深め、生命芸術の輝きを加え、宗教・芸術両面における彼の天分を、十分に発揮することができた。

表現の稚拙、詩情の純

わたしは序章で、賀川が単なる言葉の詩人ではなく、全人的・預言者的詩人であることを指摘した。しかし、そうだからといって、賀川に言葉の詩がないというのではない。ただ、芸術詩人のような彫琢の苦心の払われた、言葉の美しい、韻律のなごやかな詩が少ないというだけである。

賀川の詩の最も古いものは、明治学院時代の神学生時代、肺を病んで、豊橋や蒲郡に自炊をしながら養生を続けていた頃の作で、二十歳の青年らしい純情が歌われている。

次いで翌41年、東京の明治学院から神戸の神学校に移り、再び病状が悪化して、明石や神戸の病院に病を養っている頃の詩は、ややセンチメンタルに陥っている嫌いはあるが、この頃の彼の心中には、貧民窟への献身行の決意が、次第に決定的となりつつあって、苦しい病状歌でありながら、烈々たる熱情の火照りを感じるのである。

血で書かれた墓碑銘

賀川の第一詩集は、大正8年に刊行された『涙の二等分』である。これに収められた詩は、「肺を病みし頃の歌」以下21篇。与謝野晶子は、その序文の中で「これは、賀川さんが血をもって書かれた墓碑銘だ」と評しているほどあって、後日の彼の詩に見るような軽妙洒脱さはなく、沈痛・深刻のひびきが読者の胸に迫る。

そこには、神の永遠を偲び、自己に課せられた使命を想うて瞑想を続ける、若き賀川の姿が見られる。

まず賀川の処女作「肺を病みし頃の歌」を取り上げて見よう。

「薄命」は、豊橋の伝道先で病に倒れ、高熱に苦しみ、涙を流しつつ紙片に書いた詩の一つである。

薄命

肺を病みて

夢も結ばず、

熱もさめず、

唯思ふ-

わが生命の

夢と浮ぶを。

立ち上がり

筆を求めて書く、

わが身薄命

神何をか

我に求むと。

筆は走らず、

思いは乱れて、

涙のみ せく、

時に 夕陽の

憎く 笑ふ。

五歳の秋

父母に別れ

十六

兄を失って

孤独！

身はイエスと

生きんとすれど、

貧しき者は

天国に遠し

肉は(あゝ)亡びぬ。

他に霊もらん、

器もなし、

眼をすえて、

自滅の最後、

笑んで 待つ

昌子は、この詩を評して「ヘルキュールが自ら猛火に身を焚くような崇高な微笑が示されている」といっている。

限りなき生命へ

しかし賀川は、いつまでも自己の薄命を泣いてばかりいなかった。彼は、このはかなき現世から、伸び上がり、生まれ変わって、キリストによる永生へ飛躍せんとした。

絶滅

死は吾等に動き、生命は汝等に動く

コリント後書四章十二-

晴れて

また降る

友なし

淋しき。

血尽き、

肉 枯れ、

救いなく

亡びん。

ままよ

生命よ

死より

産まん。

愛は、

輪廻よ、

十字架は

救ひ。

絶滅

そこに

生命の

輝く。

こうして、キリストにつける彼は、自らも小さき十字架を背負うて、カリバリーへの道に向かうことを決意した。

十字架

暗き所

祈る言葉つき 悪き我あるのみ、

目を開き 影なき神の影を見る。

(1連略)

庭の彼處

長借屋の薬屋の前に、

飢を知る 人の子 無意味に叫ぶ。

神の国よ

地獄よ、現実は何て之れ、十字架、

呪われたる生命、まだ、生きんとす。

西詩のソネットを模して三行詩のリズムは荘重で、平静な抒情の中に、激しい信仰の稲妻が閃いている。

永劫に繋がる生命の流れ

この頃の賀川は、路傍の野菊を見ても、そこに遠い永劫から永劫につながる生命の流れを觀じ、野菊と自己の間に通じる一筋の香を嗅ぎとるのであった。

野菊

人に捨てられ、

淋しく

打笑む、

野路の秋。

友と

世を忘れて

古寺に

歴史を謳ふ

あゝ 過去よ。

秋よ 過去よ、

野菊よ、

文明の花

肉を飾る、

されど静かに

汝等は

神を楽しむ、

咲き乱れて

自ら足る、

静けく。

暗し

夕陽死して、

されど匂ふ。

野菊よ、

汝は生く。

その香、

我に通ふ。

療養生活の喜び

こうした思索の一面に、死線を越えた後の彼の療養生活には、また楽しい一面もあった。「米とき」の一篇のごとき、自炊生活の楽しさをユーモアを交えて歌っている。

米磨ぎ

-自炊して-

美しい水を汲みあげて

桶に注ぐと むかうごく。

いやいや、手を入れて米をとぐと、

妙だね、だんだん白くなる。

洗い切って水を入れると

米も光るが、水も光る……

お日様が空に白く輝く。

穢ない井戸側が急に可愛くなる

もちろん涙もろい彼である。病餘の生活に、センチメンタルになることもあった。

波の音

-三河湾にて-

波の音たえ 人もたえ、
西窓あけて 海みれば、
月中天(おおそら)に ほほえみぬ。
もやにつつまる 片の原、
夫まつ光か 漁火か、
孤燈漏らすも 淋しきよ。
島影思ひ 世を思ひ、
我過ぎこしを 思ひきて、
神の恩に 袖絞る。
遠く離れし 我「愛」の、
胸を思ひて 西見れば、
波も動かず 月往かず。

語法や措辞に無理とぎこちなさはあり、稚拙の詩であるが、波の音に記して、自然と人生の哀愁を歌い上げる彼の心情は読み取れる。

肺病院の寂寥と孤独

しかし、三河を去って、神戸に帰り、再び病気の悪化を見て、明石の浜の病院に療養していた頃は、寂しがりやの彼は、無聊と寂寥とに苦しんだらしく、閑散をかこち、耐えがたき孤独感を訴えている。

閑散

肺病病院にて

日曜の 日 隠れて

病室に

淋しさ 増す、

何にも 手につかず、

閑散。

野心 燃やして

また消す、

病を忘れて

心を乱る、

何にも 手につかず、

閑散。

閑散、換算！

地獄よ！再び、

天に叫びて泣く、

夢さめて、

閑散。

友を尋ねて驚く、

彼處に動く、我影！

我影は生く、

閑散 何処？

先ず笑はん！

「先ず笑はん」とはいつでも、悲しみを払拭できずに、泣き笑いになってしまう彼であった。淋しさに耐えやらず、一夜、病院を抜け出て、悄然たる姿を寄宿舎にあらわし、友を驚かしたというのも、この頃のことであろう。

火葬場に自らを葬るの歌

賀川が病院を二三転々した後、県立神戸病院に身を横たえた時は、またしても生死の境を行く重態であった。マヤス博士を始め親しき先輩友人は彼の枕頭に集まって、ひそかに訣別の祈禱会を催したほどであった。

が、それでも彼は不思議に支えられた。二度目の「死線」突破であった。

この頃彼は、「火葬場に自らを葬るの歌」と題して、約百八十行にわたる長詩を書いているが、此処には省く。

ただ彼が死をかりカルチュア化して、

アゝ肺の方も大に楽だ

すやすや安眠が出来る。

死も全く捨てたものじゃない。

アゝ心持が善い。

死はまるで恋に酔ふて居る様なものだ。

と歌い放ち、限りなき生命への伏線としていることを説明しておけば足るであろう。

自然が恋しい

その後、病院を出て仮寓に帰った賀川は、病床に自然を思うこと切なるものがあった。

自然が恋しい

炬燵から出て 台所の隅で

ぼんやりしていると、

障子の色、壁の色が強く頭に響く。

身体の具合が好くなった為か

自然の色彩に興味を持ってきた。

近頃、こんなことはあまり感じなかった。

すぐ考えるのは渥美湾の色、

九ヶ月も住んでいると好きでもなかったが

今になると、恋しくてならぬ。

その次は 明石海峡の色、

また 富士山頂の景色、

あの陰気な色彩、

あれが恋しくてならぬ。

それから武蔵野、

粘壁あたりの富士の暮色、

そして、すぐ、いつかの朝、

雲は、やはり、美しいと、

不意に印象せられたことを思ひ出す。

こんなことを考えて、

障子に目をすえと、

障子にも 色彩の調和がある。

隅と真中、旧い所と、貼たした所、

それから破れている處、

手によくさわる處、

皆自然の色 これは私の

哲学の産物じゃない。

急に瞑想の暗闇が いやになる。

厭世も 樂觀も 哲学も

道德も 美人も 偶像もいやだ、

ただ目の前に 輝く自然の色彩！

こいしい---あゝ

自然に抱かれて 死に---たい！

---鼻の手術を受けて病院から出た朝---

自然が恋しいというのは決して、自然の景観を楽しみたいというのではない。

大自然という、美しい衣裳を身にまとう、生命へのあこがれである。彼は、その大自然のふところに抱かれないと慕うのであった。

街のこどもを思う

彼はまた街のこどもの姿を思い浮かべた。

ひとり勝負

町の 風呂屋の

門先で、

外の 小さい

知らない娘が

ひとりで

庭に 筋(すじ)ひいて

両手でジャンケンして居った。

一つが勝てば

筋をひき、

も一つが勝っても

筋ひいて

勝っても自分、

負けても自分、

敗けても勝って、

勝っても敗けて、

布衣(ほい)ない相な 眼付して、

壁土の様な 顔をして、

友達があったならと云う様な聲をして、

ひとりで勝負をして居った。

七五調の正調のうたいぶりである。泣董が試みたと同じような、こどもの天真爛漫な姿が素直に描き出されている。

貧民窟入りを決意

宿痾が漸く癒えたので、賀川は痔瘻の手術を志して京都に滞在し、大学病院に通った。その時読んだウエスレーの伝記は、彼の貧民窟入りを促進させるに役立った。彼はこの手術を終えたら、これまでの足踏み状態をやめた、貧民窟へ挺身しようと決心した。

彼は大学病院を退院して、神戸行きの汽車に乗った時、自分のこれからの旅路を思っ紙片に詩を書きつけた。

旅か夢か

大学病院を退院して汽車中にて

旅より 旅に、

雲と烟(けむり)の生命

弱き身を

鉄の車に載せて、

煩悩の火の車、

一瞬 憩いの安きなく

実有の

空を走る。

山と移り 河と飛びきて、

時と夢も移る。

肉と銭(かね)も失せて

苦き「我」のみ 残る。

夢の旅、

これをし生命と云えば、

醒めん時に醒め、

破れんときに 破れん。

複数の夢

これをし神と云えば

夢長ければ

神も長し。

噫、絶えざる疑問は

絶えざる 神の影ぞ。

神を まどろめば

夢は 絶えじ。

旅よ 安かれ！

夢よ 清かれ！

この旅は、神と共に永遠に続くのだ。そして神と共にある旅は安けく、その夢は浄らかであった。

賀川は病気を忘れ、ただ神の永遠を思い、そしてこの小さき者をも見捨て給わず、あまつさえ、一つの使命を探し給わり、神のみこころを感謝した。彼は目を転じて障子の破れめから外を見た。

烟(けむり)

弱き身体を 支え、
重き頭を あげて、
烟の如き 夢を破り、
生命の 烟るを見る。
緑の庭の 彼處、
哀れなる長借屋に、
五月雨晴れて昔名残
濡れ障子の 破れ目より、
立ち上る
夢の如き烟、
飯を焚くか 紫色して、
立ち上がる生命の烟！

生命の烟！ 彼は自らの心の中に立ち上る生命の烟を思い、生命の燃焼を思うた。病気が癒えたら、少年時代からの宿志である貧民窟の働きを始めよう。生命の燃え尽きるまで働いて、そして死なう！と。

神様に見つけられた

そうだ、使命のために、この病み上がりの一身を捧げよう。使命のある間は、結核菌も自分を死に致すことはできまい。病魔もまた絶対者たる神の婢僕なのだから、神の命は聞くに違いないー。

賀川は一身を貧しき人々の前に捧げる決意をかためた。神は、彼を見つけ給うたのだ。

花？

春が きたとて

花の 咲くのは

おかしいじゃないか！

寂しい胸には

まだ氷が張って

重い衣を まだ着ているに！

まあ！

花の 髓から

神様が 覗く！

私は 冬籠の

煤けた面を

とうとう神様に見付られた。

神は花の中から彼の顔を見つけなされた。もう神から遁れることはできない。ただまっしぐらに行くばかりだ。神のそなえ給う道を――

斯くて二十一歳の賀川豊彦は、病床の枕を蹴って立ち上がったのである。

第2章 貧民窟に慟哭す

貧民窟詩集『涙の二等分』

賀川豊彦は、明治42年12月24日クリスマスの前夜、自身で俵を引いて、神戸山手の神学校の寄宿舎から、葦合新川の貧民窟へ引っ越して行った。

それから10年そこに本拠を据え、ゴロツキや酔っ払いに悩まされながら、よく忍従して、貧しい人々の物心双方の救いに、全身全霊を捧げたのである。

彼が直面したドン底生活の実相はまず、東西にその例もない名著『貧民心理の研究』となって学問的に取り上げられ、また大正出版界のベスト・セラーとなった小説『死線を越えて』に、多少の潤色を加えて文学的に表現された。この二つの労作によって、貧民窟の輪郭と実相は遺憾なきまでに報告せられ、世人を驚かせた。

しかし、作者はこの両作において、出来るだけ自らの詠嘆を避け、沸き上がって来る涙を覆い隠すことに努めたが、多感の詩人賀川は人目のないところへ来て、社会の不合理と人情の冷酷に、自らが涙の壺となるかと思うばかり泣いた。

その熱涙が凝って、真珠のような結晶体が出来た。彼の貧民窟詩集『涙の二等分』がそれである。

これはさきの両作品『貧民心理の研究』及び『死線を越えて』の上にふりかけられた香料であり、あやどられた絵の具であった。

読者はこの詩集を読むことによって、貧民窟の実態のほか、あやどりと匂いとを感得することができた。いや、書かれた事実よりも、書いた作者の胸に脈打つ、血管の鼓動を聞くことができた。

死の影を歩む

賀川自身も『涙の二等分』の「自序」で、「不思議な実在としておかれ、苦悩と絶望と、愛と歓喜と、病軀の中に据えられた私が、死の影に逍遥して生まれたのが、この一篇の詩集である」といい、また貧民窟における自己を省みてこういっている。

「宇宙の苦悩を見たものは死なねばならぬと、私は常に考へて居る。そして贖罪者イエスの弟子として、私もその重荷をくくりつけられ、たじろぐ足に、貧民窟の隅で泣かねばならぬ実在として、私は造られた。

私は何度社会苦に煩悶して自殺しやうとしたか知れぬ。神がもし、私を感受性の人間に作らなかつたら、こんな苦悩は無いであろうが、眼を涙壺のやうにして、貧民窟の路地を嘆きつつ歩ますやうに捕え給ふた神は、自殺したつもりで、私を泥溝の中へ、叩き込みなさるのである。」

こういつて彼はさらに、これからの自分の進むべき道を次の如く言っている。

「私はひこづられて行こう。ただもう贖罪者イエスの十字架を負わせられて、世界の嘲罵と怒号の中を、沈黙のまま、静かにカルヴァリーまで歩まう。

神が、私を見放すまで、私はこの貧民窟に仕えやう。私の涙を笑ってくれるな、人よ。私の捧ぐ可き祈りは、私が人に見せない涙にあるのだ。」

彼の祈りは、彼の人に見せない涙に潜む。賀川を単に冷徹なる哲学者、誠実なる事業家として見てはならない。

彼は暖かい心と、熱い涙をもった人間である。彼はこの心と涙とをもって貧しい人々に対し手をさしのべる。そしてこの両者の接触によって沸き上がる感涙から、小粒ながら燦然と光を放つ砂金のような詩が生まれたのである。

熱き洪水よ、涙よ！

『涙の二等分』の中に「熱き洪水よ、涙よ！」という左の如き詩があるが、この涙があつて、初めて詩人賀川があり、指導者賀川があり得たのである。

涙よ 出でよ 涙よ

流れ出でよ 湧き上れ！

わが哀(うち)なる生命よ 涙として溶け溢れよ、

我はわが神に捧ぐ可き凡てを

何処かに落し来たればなり。

涙よ 悲しき声をあげよ、

最も悲しき声をあげよ、

わが人間を恋せし日より

恋人なるわが神は我を捨てて、

何処にか姿を隠し給ひぬ。

悲しき声を挙げよ、

絶叫もて 泣き叫べ。

沸き上がれ、わが神に会ひたし。

世を浸せ 線路を蔽へ！

神—わが神の逃げ出づる道を押流せ！

汝、熱き洪水よ、

我はわが神にも一度会ふたければなり。

あゝ 涙よ！

汝 涙の洪水よ、

我はわが神が遠く行かざるうちに、

捕え帰らんとす、

あゝ我はも一度わが神の顔を見たきものを。

三丁四方に千五百戸の長屋

賀川の住った葺合新川の貧民窟というのは、神戸の東端生田川の川向うで、その名も悲しい「日暮橋」を渡って行くと、約三丁四方に、約千五百戸の長屋がぎっしりと建ち並び、その長屋の裏、そのまた横の路地の裏と縦横に陋巷が錯綜し、過群と不潔と叫喚の一面を作ってそこは全く、外とは違った特別の世界であった。

長屋住ひ

光線の

強い

町を 歩いていると

ひよっと

汚じみた着物の

袖口に 眼がつく。

疲れて ひよっくり

夕方 がらんとした

淋しい家に 帰ると

火の気も

障子も 人気もない。

どっさり

鬨(しきい)に腰を下ろして

ぼんやり 外を見ると

日一も

暮れて 行くやうだ

頸の廻らぬ

病人が

また粥を

炊いて 持ってきてくれる。

日に 日に

遊んで いる

男も帰ってくる。

梅干に お粥

梅干の色が

特別に 赤い！

もう

暮れた

寝よう！

寝よう！

暴漢とペストの来襲

賀川は孤独ではなかった。貧民窟に移り住んだその夜から、押しかけて来た寄食者があって、彼はその男と一緒に一つ蒲団を引っぱりあって寝た。

男はひぜん患者だったので、すぐそれに感染した。貧民窟の最初の収穫はこの皮膚病であった。その翌日には、病身の縄拾いが同様押しかけて来て、寄食者第二号となった。こんな風で、彼はすぐ大家族の家長となった。

賀川の借りた家は、北本町6丁目の路地裏にあって、前年、十銭の祝儀の事から喧嘩となり、人殺しのあった家。

幽霊が出るといわれていたが、幽霊も大家族に恐れをなしてか、ついに出るのを差し控えた。

寄食者の増加は、賀川にとってはむしろ歓迎するところであった。

が、毎日のように押しかけて来る無頼漢や酔漢の脅迫には、覚悟していたとはいえ、当惑した。出獄したばかりの不良青年は、ピストルで彼を脅迫し、また或る酔漢は、暴れて火の入った火鉢を、彼に向かって投げた。

その上に、ペストが貧民窟に入って来て、彼の家の近くに住む一人の娼婦が死んだ。いつ彼に伝染せぬとは限らない。

彼は貧民窟に来て一ヶ月目に、その驚きと困惑を、次の如く歌っているが、それは考えれば考えるほど恐ろしい地獄の絵巻で、そこに住む自分の身の上を思うと、物怪しくさえなるのであった。

狂(くるい)

思うて 狂ひ

祈って 狂ひ

ただ 魔にさされた

ようです。

二重人格と 云うものは

こんなものですかねー

あゝ

思ったやうな 勉強もできず

思ったやうな 伝道もできず、

奇跡も 起らず

半鐘も 鳴らず

平凡で ..平凡で

それに 不潔な 貧民窟の一

壁の色、鯨の肉の色、年中乾いたことのない、

道--いやだ--臭い！--便所--道側の

室と云えば 破れ障子--

庭--裏口の戸は開きませんよ！

奥の土間に床机をすえるとあかなくなるのです。

でも、仕方がないのです

奥が狭いものですから。

天上の埃.. 雨戸の埃

思ってもいやですよ。

生活に慣れないとつらい、

それでも 一月は

早や貧民窟の生活をしたのですよ。

アゝ 恐ろしい ペスト！

おとめが 死んだ

淫売のおとめが..二十二の馬鹿..

おしろいを壁のやうに ぬった..

背中に女性の生殖器を刺青にした

おとめが ペストで 死んだ！

死んだ！ 死んだのですよ！

そのお父さんも 発熱して居るのですって。

恐ろしいですね

わかりましたか、

おとめが ペストで死んだのですと、

アゝ 恐ろしい、

あなたにも 伝染(うつり)ますよ。

さあ、お逃げなさい

貧民窟はうるさいでしやう。

泥溝

鯨の腐肉

便所――

おゝ私の心は全く

狂っちゃった。

この恐ろしい

人間の墮落を

どうなさいますか？

私の友人――労働と悔改を

約束した人さへ、

わたくしを 賣ました。

花柳病患者、足なし、心臓病、足の腐った男、

妻を淫売に出す男、高利貸、木賃宿、

ただ、とりとめもなく 頭の中を走る、

いや 眼の前を走る。

私は神経過敏性の衰弱に陥る。

あゝ 恐ろしい。

人間は貧民窟に 住んで、

何の役に立つ？

心に とうとう狂ひがきた。

あゝ 夢が・・・

醒めたやうだ。

『こら おどれ』子供の喚叫(わななき)一疋聲

また あの子じゃないか--お父さんに

脇腹をけられて 寢床から 裸体で

逃げだす あの十一二の男の児！

あゝ 醒めた、醒めました

何か知らぬが 何故か知らぬが 醒めた。

今は何時だ！

午後七時半！

雫が 軒にぼちぼち落ちている。

七輪の火は消えた。

近所の 貧民共は ざわざわ騒ぐ

また思ふと また狂ふ

貧民窟を救ふに 道はないものか？

—明治43年1月26日

誰でも、普通の神経を持った人間なら、狂わんばかりの心の混乱を感ずるのが当然である。彼は、神に向かって「この人間の墮落をどうしますか！」と訴えたのであった。

貰い子殺しの葬式

明治42年の暮れは不景気のドン底で、貧民窟には「貰い子殺し」が流行した。貧民窟には、いわゆる「歓迎せられざる出生児」を貰う商売がある。もちろん、子どもを愛するから貰うのではなく、養育料や子につけて来る衣類を目当ての営業で、金品を手に入れてしまえば嬰兒はもう荷厄介である。そこで目立たないように慢性的に死なすのである。

賀川はこの貰い子殺しの手密殺されたあわれな嬰兒の葬式の幾つかを引き受けた。通称おいたべろうと呼ぶ葬式人夫を頼み、亡き骸を蜜柑箱につめて、おいたべろうに背負わせ、賀川はその後から涙ぐみつつ火葬場へ出かけて行った。この葬式が続いてその費用のため、彼は自分のあわせを質屋に入れた。

そうこうしているうち、或る日、警察に彼の近所の貰い子屋の老婆が拘引されていると聞いて、事情を聞きに署へ顔を出した。ところが、老婆の手許にはもう一人、現に、慢性的に死なせつつある貰い子が居て、警察ではこの子の処置に迷っているのである。

瀕死の嬰兒を貰う

賀川はその子の行く末を考え、思い切って自分の手で育てて見たいと申し出た。彼はまだ神学校に通
学中の学生で、試験最中だったが、そんなことを考える余地はなかった。彼はその夜から、その子ども
の「母」となった。

涙の二等分

おいしが泣いて、

目が醒めて、

お襦袢(むつ)を更へて、

乳溶いて、

椅子にもたれて、

涙くる。

男に飽いて、

女になって、

お石を拾ふて、

今夜で三晩、

夜昼なしに働いて、

一時(ひととき)ねると、

おいしが起す。

それでも、お母さんの、

気になって、

寢床蹴立てて、

とんで出て、

穢多の子抱いて、

笑顔する。

貰い子殺しの、

残しもの、

干し損ねられた、

この梅干の実(さね)

腸カタルで、

四十五度の熱、

夏の夜短(よみぢか)

世は静か、

近所の時計が、

一時なる、

そろそろ、

壁が、

しわたきをする――

殺人犯の

有った家――

天井がもの云ひ

柱がわめき

血を嘲って、

床板が吠ゆ。

寂しいね、寂しいね。

『あゝどうして、かうまあ

世は不人情なんだろう

私や、お石からみたら

地球はまるで、

氷玉のやうなものだね・・・』

『ええ おいしも、

可哀相じゃが、

私も可哀相じゃ、

力もないに、こんなものを、

助けなくちゃならぬと、

教えられた、

私——私も、

可哀相じゃね』

『こら こら

おいし、干(ひ)ぬけた人形よ、

お前も 女の屑じゃぞよ、

こんなに 男が弱っていらしにやあ、

女が男を慰めるのが、

あたりまへだぞ』

あ？ おいしが啞になった、

泣かなくなった、

眼があかぬ、

死んだのじゃ、

おい、おい、未だ死ぬのは早いぜ、

わしは葬式料がないんだぜ、

南京虫が——

脛噛んだ——あ痒い！

おい、おいし！

おきんか？

自分のためばかりじゃなくて

ちっと私のためにも、

泣いてくれんか？

泣けない？

よし……

泣かしてやろう！

お石を抱いて、

キッスして、

顔と顔を打合せ、

私の眼から涙汲み、

おいしの眼になすくって……

『あれ、おいしも泣いているよ

あれ神様

おいしも泣いています！』

——警察署から貰い子殺しの連れて

居た子をもらって来て

榛の国

与へる 金も、力も

無くなった。

今は もう

田舎が 恋しい。

北の国 榛の国

病気の無い 蚊のをらぬ国

そこへ 行きたい。

他人(ひと)を 助けて

自らを 救はないと

昔の人は罵られた。

あゝ 都の

貧民窟には飽いた。

都に 生息し

生存を保続するが
第一間違っているのだに
都の生活を与へて
彼等を 救ふと思ふのは
大なる誤では無いか？
都より
埃及より
畑より
ピラミッドより
出埃及！
EXODUS
深く考えを
榛の国の事に めぐらさう――
向ふの方に
山が見える
こちらに岡――
榛の木が
づうと 繁って居る。
頃は 春だ、
若芽が出かけて、
風はまだ 寒い！

理想の 萱小屋の窓から

首つき出すと、

朝から、友は

労(はたら)いている 自分も

野に出る。

日が出る

霞が 深くなる

それが また 消える。

ふと 小溝の春に

気がつく。

一番、私のすきな

流の音

ちよろん ちよろん ちよろん。

麦の畝を

よせているのだが

土の色

手鋤の先の色

銀光(ぎんびかり) ぎんびかり

よせる度に

ぴかぴかと美しい。

柄は櫛、

心地のよい色！

「神は凡てに充ち給ふ」

一畝すむと

むかうの方の 景色をみる

榛の木は 矢張 美しい

紫色に見える山！

淡ひ水色に流れる川！

こちらの一軒家 わが家、

わが萱小屋は 理想の家！

国木田独歩の『牛肉と馬鈴薯』の中で、北海道の未開拓地を憧れ、そこに建てられる理想のわが家とわが生活とを空想していたのに刺激されたのかと思う。

薬瓶にさした三銭の菊

貧民窟の悲惨さと不合理の現実を見せつけられた賀川の心には、こうして時折、太陽の光をかすめる雲のように、大自然の生活への憧れが、影を落とすのであった。

しかし、そうだからといって、賀川は貧民窟を逃避しようとはしなかった。彼は直ぐ、現実に戻って、天より課せられた自己の使命に就くのであった。

彼は三銭の菊を買って帰って、含嗽薬の空瓶に挿して、貧民窟の長屋の、煤だらけの障子越しに、黄ばんで輝く秋の陽が、その菊の上に光るのを眺めて、それで満足した。

そして彼は、まひ立って行って、乞食の子を抱き上げて愛撫した。

神は 愛だ、

深い 愛だ、

乞食の子を 抱きしめて

私は云う

神は愛だ！

彼は「愛」の詩の中にそう唄った。

寂しいのは銭(かね)の無い時

賀川は時々寂しくなった。

それは、足りないがちの生活をしている貧民窟の人々を見るにつけ、ああもしてやりたい、こうもしてやりたいと思うのだが、その方法がないからであった。大概の場合、それは金がないということに帰着した。金のない時は、夕暮れのように寂しかった。

「銭の無い時」という詩を見よう。

銭のない時 寂しいね

食えないからじゃ、ないけれど

与えることが 出来ぬから

銭がない時 苦しいね

裸体(はだか)でいたって かまわぬが

うちの子供が なくからね。

かまわしないよ かわない

神さまどうにか しなさるよ、

雨は屋根まで 降っているよ。

理論からいえば「濫救」はもちろんいけない。物質での救いは、川原に石を積むに等しいからだ。そんなことは、象牙の塔の中の学者から教えられずとも判りすぎるほど判っている。

だが、そうだからといって、放って置けない現実なのである。また放って置くに忍びない彼の心なのである。

貧しい子どもたち

貧民窟の生活は、賀川にとって苦しみと悩みだけであったか。そうではなかった。彼にはもちろん、天からの慰めはあったし、親切な友人たちの助けもあって、彼を喜ばせてくれたが、それにもまして彼を喜ばせるものがあった。

貧民窟の恋人—それは子どもたちであった。よしんば、この恋人が青湊をたらしめていようと、白雲頭をしていようと、鼻先が真っ黒くなった哺乳動物であろうと、それは彼の意に関するところではない。

自分の父を「チャン」とまだ呼べない幼な児も、「テンテイ」といって彼を呼びかけることができた。父母は素より、誰一人、相手になってくれ手のないスラムの子は、みな賀川を世界中で一番慕わしい存在として、父母以上に親しんだ。

或る子どもは、彼が便所へ行く時も、後ろからついてきて、彼がそこから出てくるまで、戸口にじっと待っていた。

この信頼と、この親愛に、多感の青年賀川は、恋人以上の情感を感じたとて、あながち無理とはいえないであろう。

彼が外から疲れて貧民窟へ戻ってきた時、この汚い恋人たちから笑顔で歓迎されると、一日の疲れもたちまちにして消えた。

肉体よりも心が、打ちのめされたようになっている時も、格子の外から「先生！ 遊ぼう」と声を掛けられると、一瞬にして元気が回復した。

そして彼はすぐ戸外へ飛び出して行って、これらの恋人たちの手を取り、頭を撫でて、共に遊戯するのであった。

硝子窓の向ふの世界

硝子窓の向ふに

声の出る実在がある。

「先生 先生」と呼ぶ、

三畳敷の哲学者、

一枚の着物の使徒が、

おもむろに 頭をあげて、

障子越しに 三つ四つの

実在を検閲するに、

時計の様な顔した哺乳動物、

鼻先の黒い 似人猿類、

障子の屈折で伸び縮みする、

カイゼル髯の 女の子。

踊って居る アカンポー

ベルグソンの哲学にさえ

書いていない……実在が……

飛んで居る、跳ねて居る…

路地の小便臭い

黒土と 下駄と 草履が

合奏をやって居る、

コト、コト、カタ、カタ、

「バタ、バタ、ゾロ、ゾロ、

アゝ実在じゃ、実在じゃ、

踊じゃ 踊じゃ、

それ障子を お日様が、

お太鼓にしよう と 強くさしなさる！

窓先の雛っ子も鳴くわ、

ピヨ、ピヨ、ピヨ、ピヨ！

犬の鈴もなる！

もうもう私は哲学者は止めじゃ…

之から窓の向ふの

「実在」と 踊るのじゃ、

鼻先の黒い動物よ 来い、

カイザル髯の娘よ 来い、

犬もこい、黒土もこい、鶏の糞もこい、

踊らう！ 踊らう！

耶蘇のお加持と米びつ信者

賀川は氷玉のように冷たい人情を思い、いよいよ熱心に貧しい人々に働きかけた。

彼は物質的な救済よりも、さまよえる魂の救いに重点を置いて、夜になると、貧民窟の路地に立って説教をしたり、日曜日には自宅でささやかな祈禱会を催した。

長屋の人たちは初めは好奇心と、何かしらおためを彼から受けたいという下心から接近して来たが、そのうち幾人かは、信者というよりは常連になった。

或る老人は、基督よりも賀川その人を信仰して、持病の神経痛が起ると、彼に加持祈禱を頼んで来た。彼が出掛けて、祈りをし気合をかけると、神経痛はケロリと癒った。

そうしたことから、「耶蘇のお加持はよく効く」という評判が立って、賀川を苦笑させたこともあった。

また15歳の時、放火をして9年間、獄にいた植木という不良少年は、在監中にいろはを覚え、聖書の話聞いたことがあるとあって、路傍説教をしていた賀川に近づいて来て、信仰というよりは、彼から小遣いをせびり取るために、時々集会にも顔を出した。

こうした偽装信者を、賀川は「米びつ信者」といつていた。

植木は根が不良でも、純な性格の持ち主なので、賀川も目をかけて、米びつの面倒を見てやりながら、太陽のような不断の温情をもって、彼を導いて行った。

貧民窟の生んだ傑作！

米びつ信者は気まぐれだった。むしんが聞かれている間は信者であるが、一朝むしんが聞かれなくなると、たちまち豹変して、地金に還り、ふところの短刀をひらめかしたりして脅迫した。

かと思うと、賀川の前に泣いてひれ伏すこともあった。或る夜半、植木が賀川を驚かせた事件があった。説明に代えて、詩をそのまま記そう。

月と「路地」

酒に狂ふた男は、戸口で

狂ふた 体操をした

おいちにおいちに

廻れ右 前へ おい！

狂った足並は 狭い「路地」に

凄く反響する。

しわがれた罪人(つみびと)の声は

狂った 大きな号令を真似る。

『廻れ右 前へ おい！

善に 立ち帰れ おい！』

この声に 呼び醒されて 私は

ランプをつけて 床の上に 立つと、

唯 意味もなく 足が震ふ

『狂ふた人は どう私にするだらう？

刃物を持っているかも知れぬ・・・』

『云うてくれたら いゝでしやう

天のお父さんは 私を見捨てましたか

天のお父さんは 私を救ふてくれますか、

あなたが 救ふてやると 云ふて下さい、

天のお父さんは あなたに 力を授けたでしやう』

酒に狂ふた男は、戸口で

狂ふた 体操をした

おいちにおいちに

廻れ右 前へ おい！

狂った足並は 狭い「路地」に

凄く反響する。

しわがれた罪人(つみびと)の声は

狂った 大きな号令を真似る。

『廻れ右 前へ おい！

善に 立ち帰れ おい！』

この声に 呼び醒されて 私は

ランプをつけて 床の上に 立つと、

唯 意味もなく 足が震ふ

『狂ふた人は どう私にするだらう？

刃物を持っているかも知れぬ・・・』

『云うてくれたら いゝでしやう

天のお父さんは 私を見捨てましたか

天のお父さんは 私を救ふてくれますか、

あなたが 救ふてやると 云ふて下さい、

天のお父さんは あなたに 力を授けたでしやう』

『あれからない、六銭の酒を呑んで、

蓮ヶ島に五銭貸してくれと云ふたが、

貸してくれないので、

石田さんの所で借って のみました。

そして あなたの 行っていらつしやる

講義所へ 行ったらうと思ふて

「中道」まで行きましたん

然しおいでなさらんので

福音教会に行きましたが

生田教会だと教へられて

何処か わからぬので

「安」の所で 一杯呑みました』

『あなたは 新川へ 何しに きました

我々 どうどうしや(労働者)を

救って くないのですか』

私は蒲団の上に座って

困っている 現場を述べ、

彼を 愛していることを話した。

狂った人は沈黙(だま)つた。

蓮ヶ島は ほよつくり 起き上がった、…

尿をして また帰ってきた。

座り込んで 説き出した…

丁寧な、…親切な円い頭の男が、

東京弁で、繰返し、繰返し、同じことを。

狂った人は

泣き出した。

あゝ 思へば

哀れな 動物、

放火犯

明治三十一年十月十一日入監

明治四十年十月十一日出獄

満九ヶ年を務めた 彼植木虎太郎！

思へば 可哀相な

不憫な 神の子よ

破れ戸より 青い 強い光の

二月の淋しい月が のぞく。

植木が寄りかかっている うしろの壁の色・・・

肉食、煤色、鳶色・・・下の壊れた所

此家、此穢い家、貧民窟 貧民窟！

此放浪者！

生まれて十五日目に

「死んでしまへ」と 砂地に捨てられた、

虎一虎太郎！

『産みの母より 育ての母』と

いつも 産みの母を

淫売と罵り 博徒と罵る、

薄命児！

五円の金が借れぬとて

刃で 人をおびやかす 彼！ 薄倅児！

盗むために 八幡通に放火した

十五の悪少年

あゝ これ 新川の傑作！

この月、この家、この人！

『私が 悪かった

私が悪うございました、

私が 酒をのんだり、煙草を喫(すふ)たのは、

悪うございました

あやまります！』

『彼は泣いた、彼は泣き出した』

私は それを 待っていた。

監獄で 教育された彼は、

他人を愛し、敬することを知らない、

キリストに来る道は ただ涙である、

待っていた！

聞け、

衣を裂く者、

「虎」は悔の表示に

衣を裂いているではないか！

私は、

祈った。

「虎」は 悔い改めて、

今夜は あなたと寝ると云ひだした。

私は 戸を開いて

月を見た、

空は晴れに 晴れて

月は ただ独り

暗の中を 狂ふているやうに、

泣いているやうに 迷ふていた。

また 私は 土に跪いて祈った。

「蓮ヶ島」も祈った。

十二時が なる。

私は外に出た。

月は 貧民窟の 一軒一軒を照らしている。

「虎」は裸体(はだか)になって、泣き乍ら

酒をさますために

水道側(ばた)へ走って行った。

—明治四十三年二月二十一日

貧民窟脱走の幻想

貧民窟の仕事は決して楽なものではなかった。自分の病身のため、体力的に負担の重いということもあつたろうが、それよりも、周囲の悲惨な実相が、彼の心を締めつけるのであつた。

せめて、金でもあって、彼らのために手伝いできればよいのであるが、貧しい学生の身として、それもできない。彼は心から、ため息をついた。

前にあげた「榛の国」と題する詩をみると、貧民窟に居て、「榛の国」を憧れる多感の青年賀川の心が読み取れるようだ。

子らと共にあらしめよ

賀川は、子どもたちの相手となると共に、子どもたちからも、この上もない慰めを受けた。

彼は子どもたちのために遊んでやっているのではなく、賀川自身のために遊んでいる心持ちになっていた。

子どもらのためにはなく、子どもらと共に遊ぶのだった。

フレーベルは「われをして子らと共にあらしめよ」といったが、賀川は、そのフレーベルの言葉通り、子どもと共にあつた。それだけで彼は、他の貧民窟での苦悩を忘れて、十分に幸福であつた。

『涙の二等分』の中には、多くの子どもの顔が収められているが、それがいずれも、彼の作品では佳品である。

私の御弟子

—貧民窟にて—

私のお弟子は

三人、四人、

鼻垂れ小僧の

蛸(たこ)坊に

疝高聲の甚公は

私の一と二の弟子で、

便所の口まで

追(つ)いて来て

私が出るのを

待っている。

乞食の「長(ちやう)」は

三の弟子、

クリスマスの前の晩

出口さんの御馳走に、

お辞儀は知らぬが

鯨(しや)ちよこ立ちしたよ。

お父さんとは云えぬが、

「テンテイ」(先生)と云える、

親は呼べぬが

私は呼べる、

鍋島のお凸(でこ)は

四の弟子。

賣られて 行くのが

悲しさに、

うちの戸口で

半日泣いた、

今年十二の清ちやんは、

私の可愛い女弟子！

可憐なる女弟子の行方

これらの男弟子、女弟子に囲まれて、賀川は満ち足りた思いで働くことができた。彼は暇があるとこれらの弟子を引具して、路地を出、付近の広場で一緒に遊んだ。

こうして彼らの相手をしていることによって、男の子は、チンピラの群れに引き入れられることから免れ、女の子は、早熟な年上の子らから、性教育を受けずにすんだ。

しかしそれだけで、これらの子が完全に救われるわけではなかった。

彼らの家の生活の困窮は、子らを駆って早くから工場へ働きに出し、また前記の「私の御弟子」の中の女弟子清ちゃんのように、十二歳にして早くも、煮賣屋奉公に賣られて行く子さえあった。

これらの子どものために、賀川は出来るだけの手をつくしたが、もとより、十分に行き届くわけはなかった。

賀川の詩の中に、それらの薄倅の子等らを歌ったものがあって、読者の胸を打つ。

雪の朝

一月十七日の雪の朝 六時

酒屋の横の

荷車のそばで

よし子は 泣いてゐた。

よし子は 今年あけて十四

マッチ工場に出てゐる。

お母(カア)は 昨夜(ゆうべ)

よし子の 仕事衣を 持ち出して、

何処かへ かくした。

よし子は 今日 ぼろのまま、

工場へ 出ようと 弁当も持たず、

出かけたが、此処まで、きて、

急に 工場へ行くのが、

恥ずかしくなって 立ち止まった。

立ち止まると 自然 涙がでる

雪が ふるので 猶泣ける。

よし子の母は多分、今日の米代のために彼女の仕事着を質屋へ入れたのであろう。そして十四の娘は、仕事着なしに工場へ出かけることが悲しくて、途中まで来て、雪の降る中を、路傍にたたずんで泣いていたのであろう。

詩人は童心を失わず

子どもと共にある生活を喜ぶ賀川の心は、いつも童心をたたえていた。

童心を持たず、ただしかめつらしい顔をして、子どもに臨むこわい先生、恐れられている先生は消えてなくなれ！である。

童心の持ち主の詩を、もう少し拾って見よう。

あ、私もお玩具(もちや)が欲しい

学校からの帰りに

生田の裏門にかゝると

猿舞しが お玩具屋(もちや)の門に立って、

標本箱(サンプルボックス)を凝(じつ)とのぞきこんでいる。

顔の赤黒い、丸顔の馬鹿でもなさそうな、

十六七の男の児、

股(ぱつち)、脚絆に 草鞋掛で

左から右へ かばんを垂らし

黒い風呂敷に 長い箱のやうなものを

包んで背負ってゐる――

此上に猿がゐる、

猿も主人と同じく、

じっとお玩具(もちや)をみてゐる。

「この人と猿の真似がしたい――

どれだけ安気なことだろう」と思ひながら、

またじつと、その児の横顔を見つめた。

一分--二分--三分--

私はじつと見詰めた。

然し猿舞者(さるまわし)は そこを去らうともしない、

瞬(またたき)もせず 見つめてゐる、

背中の猿も おとなしくして見てゐる、

四分--五分--も、たったであらう。

まだ飽かないやうだ！

この田舎者と猿は何に感じてゐるのだ！

一寸と機械を応用した

あのお玩具(もちや)に感心してゐるのだな、

猿舞しの小僧と猿が・・・

何にか感じてゐる--

玩具に--あ、私もお玩具(もちや)が欲しい！

無心にショーウインドーの中のおもちゃを見つめる少年猿廻しと猿の姿が、ほゞえましく眼の前に浮かんで来る。

詩の冒頭に「学校から帰りに」とあるのから見ると、彼がまだ貧民窟に住みながら神戸神学校へ通っている頃、貧民窟へ来て一年とはたゞない、彼の二十二歳の作であろう。

「生田の裏門」というのは、えびら梅で名高い生田神社裏門の事である。

おしろいぬった壮士

ある春の夕、
神戸でも 一ばん 繁華な、
三角帳場の角 料理屋の門で、
おしろい ぬった八雲壮士が、
女の子二人に 赤い袴はかして、
琴を ながしていた。
琴の音は 谷底の 水のやうに流れ
壮士の歌は 消え入るやうに 冴えた。
大勢の人は 唯、
壮士の 顔を 凝(じつ)と みた
私も 凝とみた。
そして そこを通りすぎて
顔を かくして私は泣いた
それは 春の 夕であった。

八雲琴を弾く壮士よりも、赤い袴をはいた二人の女の子に、彼は泣いたのであろう。

至醇な実感の恋愛詩

貧民窟詩集はやがて閉じられる時が来たが、最後に、わたしたちは彼と夫人との結婚の詩をよんで見よう。晶子は序文の中で、この詩を次の如く評しているのである。

「明治大正の詩壇に恋を題目とする詩篇は多いのですが、至醇な相愛の実感を端的に打出した此作の如きものは甚だ稀ではないかと思ひます。私は賀川さんが貧民詩人、労働詩人であると共に恋愛詩人であり、それが悉く作者自身の体験に本づいて居ることを有難く思ひます。」

賀川は大正2年5月27日、神戸日本基督教会で、芝春子と結婚式を挙げた。春子は以前から貧民窟に来て、賀川の尊い事業を助けていたのである。ペスタロッチにおけるアンナの如く、最良、最善の妻であった。

魂と魂

—妻に—

魂と魂と

春の朝に

結ばれぬ、

荒板削の

小家の蔭に。

魂と魂と

土より生えし

青芽のやうに、

朝の太陽に

背のびして、

互によりぬ

いつまでも。

海べに近く

青空仰ぎ、

魂と魂は

相抱きつゝ

空とびぬ、

肉を思はぬ

ちぎりとて。

魂と魂と

相抱きつゝ

落ちゆきぬ

貧しき友のその中に。

魂と魂よ

ほどへて、なれらは

世に撃たれ

肉落ち 骨折れ血もつきて

魂ばかりに 跡とどめ、

天上さして 帰り行かん。

鐵と血潮の恋人よ

魂ばかりの恋人よ

天上までも

さちあれや！

み空は広し、

星多し、

この世に飽かば

かの世に移れ！

魂と魂よ

相抱きつゝ

空飛べよ

春の朝日の昇ること。

明治四十五年四月三十日

涙を二等分する夫妻

結婚式場から俥に乗ったが、俥夫は行先を「新川」といわれて「冗談いわんと」といって本気にしなかったという。

賀川夫妻には新婚旅行とともなく、花嫁が貧民窟のスイートホームへ帰りつくと夫妻を迎えた第一声は、おみつという女乞食が待ちかねていて、「おまる！」といって便器を請求する叫びであった。

花嫁はいやな顔一つしないで甲斐甲斐しくおまるの世話をやいてやった。

その日まで賀川が一人でやって来た仕事は、今宵からは、二人で力をあわせてすつこととなったのである。

仕事も二人で分かちあったが、同時に、涙も二人で均分することとなった。『涙の二等分』は、貰い子殺しの生き残り、おいしと賀川の涙の二等分であるよりは、春子二人との二等分であった。

涙の二等分は同時に、犠牲の二等分を意味した。

賀川は後には、貧しい子どもたちのトラホームを感染して、悪性の眼疾を得、今日もなおそれに悩まされているが、春子夫人もまた、子どもに眼薬を点眼してやっているうちに、同じようにトラホームに感染して、ついに左眼の視力を失って今日におよんでいるのである。

涙の二等分は、二人の上に生涯つづくのである。わたしたちは夫妻の前に、恭しく帽子をぬがねばならない。

第3章 労働運動の歌

宗教家のドグマ

賀川は基督の福音を、神秘のとばりの中に閉じ込めて置くことに同意しない。彼は福音を街頭にまで押し広げて行って、経済生活や社会生活を宗教生活に直結する。

巷に、飢えと寒さに震えている者のある時、会堂内でぬくぬくと懐ろ手して、神の福音を説いていることは、とうてい耐えられないのである。彼は、だから、バルトの神学を尊ばず、ウエスレーの実践を尊重する。彼は十字架の行者、贖罪愛の実践者なのだから。

心の底の凡てを

神に押し付けて

苦しめる者に

手を一つ貸そうとせぬ

多くの宗教家に

あいそがつきたよ

民衆は嘆き

難民は飢えているのに

ただドグマにのみ

時を費やす

彼はこう歌って、現実の生活から遊離して、自らを高しとする世の一部の宗教家を軽蔑し、自身は率先して十字架の道を進んだ。

賀川は大正6年アメリカから帰朝した足で、そのまま再び貧民窟に住んだが、その頃から彼は従来の救霊と救済事業とだけではあきならず、真の無産者の救いのためには、無産者自身に自覚を与え、組織を持たさしめねばならぬとして、労働運動の中に挺身し、自ら友愛会(今の労働総同盟)のリーダーとして、運動の陣頭に立った。

暴力革命派と戦ふ

大正7・8年頃の関西の労働者たちが、各種の示威運動の折りに歌った「労働歌」は賀川の作るところであった。

目覚めよ、日本の労働者！

過去の因襲 ひり落とし、

世界改造 遂ぐるまで、

克己勉励 努力せよ！

今日から見れば低調なものであるが、当時は誰もこれを低調だとはしなかった。しかし、漸次先鋭化するにつれ、労働組合員たちはいつかこの歌をうたわなくなった。そして「あゝ革命は近づけり」をうたい「どんらん飽くなき資本家の」を唄う者が増えていった。

だが、賀川は階級闘争と暴力に反対し、革命を急ぐ左翼のリーダーに対抗して、あくまで非暴力、合法の道を進んだ。賀川は「労働者崇拜論」(発禁)の中でこう言っている。

「世に労働運動は必ず暴動と革命を齎すものであるかの如く信ずる人がある。しかし、私はその教理と實際を笑うものである。凡そ世界の進化発展というものは革命と暴動で来るものではない。もし或種の革命が可能なりとせば、それは知的革命のほか何でもない。知的革命の外の革命は凡て虚偽である。それは人類を野獣に導く。暴動はその成果であり、略奪はその花である。」

こうって、賀川は工場民主を叫び、組合主義の推進を強く要求した。そしてサンジカリズムの流入によって直接行動のみが唱導せられ、暴動を伴う争議が頻発した日には、彼だけは飽くまで暴動と罷業とを区別すべきを唱えると共に間接行動、議会政策への道を傘下の労働者に指示した。

普通選挙の歌

組織労働者の普通選挙実施の要求運動は賀川の提唱になるといっても過言ではない。現に普選要求運動に、労働者の歌った普選の歌もまた彼の作るところであった。

普通選挙の歌

--敵は幾万の譜に合わせて--

聞かずや、君よ、民衆の

闇に嘆ける その声を！

金権世界を 圧倒し、

正義人道 地を払ひ、

貧しき者に 自由なく、

民は悲しく 影うすし！

--コーラス--

金もて自由を 縛らざる、

公義の天地 みんなために、

我は叫ばん 平等の、

選挙の権利 あたへよと！

選挙の権利 あたへよと！

君よ教へよ 三圓の、

貨幣の自由の 差違あるか？

自由の金の 多寡あるか？

正義は黄金に 劣れるか？

金は人より まされるか？

自由を蔑する 国立つか？

労働階級の、議会進出後の社会党の政権獲得も、みな彼を中心とした運動の賜物だといっても言い過ぎではない。しかし、彼は当然なるを得た社会党の総裁にも大臣にもならず、また今日も国会のいずこにも賀川の姿はない。

彼は労働者の権利伸張には努めたけれど、自ら政治に関与することは欲しなかったのである。此処にも詩人らしい賀川の本領が仄見えるではないか。

留置場の歌

-神戸三ノ宮警察署の留置場にて-

—

獄屋の屋根に

日は暮れる、

独居を喜ぶ私は

瞑想と祈禱に 執筆に

獄屋であることを忘れて

日を送る。

そして

いつとはなしに

日は暮れてゆく。

二

朝の四時半から

晩の十二時一時まで

通りつづきの電車は-

この獄屋は電車道に沿ふてゐる-

獄屋を震はせて、一分おき位に走る

土塀の向ふは

綺羅を飾る乙女等の乗る

電車が走って居るのだ-

そして私は労働者の煽動者として

罪もないのに

囹圄の身となった。

今更あらだてて

資本主義を呪ふまでも無いが

監房の裡に

久し振りに取り返した

独居のよろこびを感謝する。

三

百度監獄に繋がれようが

百年の長き間監禁されようが

私の意志は動か無い！

自由の日が来るまで

私は 今の道を取って

動か無い！

四

監房に旭照り輝く—神よ

窓に 屋根に 板塀に

鉄柵に 腰掛に、

神よ

私の監房は

みめぐみの御園です

神に居るものを

捕へようと云ふのは

無理です。

私の魂は

旭日の光と共に

東より 西へ 南へ 北へ

全世界に飛んで居ます。

私は 祈っては

監房を忘れ 忘れては

忘れて居る身の幸福を感謝して居ります。

五

私はどんな時も

騒ぐ心は持って居りませぬ。

数万の労働者が赤旗黒旗で

示威行列を行(や)って居る時でも

一万五千の職工が

韋太天走りに

突撃する時でも

私の心は平静です。

私の心の平静を

何人が破り得ませう

わが神—

八十五人の最高部を

搦へるために

隣りの齒医者^の壁を

打破って

十手や捕縄で襲撃に来て

私の身邊に五人の刑事が

立ち囲む時も

私の心は平静でした。

私は謀反人じゃあるまいし

強盗じゃあるまいし

弱者、貧者の解放の為に

身を粉にして働いて居るのだ

私を捕へたければ

搦へるが善い—

私は生れ付き暴力とそりが合は無い—

十手にも 捕縄にも

ピストルにも ドスにも

反抗するような人間では無い。

私の霊は自由を知る。

私が善いと思ふたことは

たとひそれが私を牢獄に導くものであろうとも

絶叫せしめる

私は行動する—

それが善いことだと思ふたことは

死地に陥入れられても決行する。

六

私は友なる三万の労働者を捨てて

一人安居することは出来ない

彼等の悪、彼等の失敗と躓き—

それらに対しても 私はその責任を

全部帯びる

私は 今になって

三万の労働者を捨て去ることが出来ない。

七

これ程までに虐げられ

これ程までに踏みつけられた

三万の友等が

今になって怒り出して

何ものの云ふことも

聞かずに

手傷ひ猪(じし)のよう

慕進する時

その時でも

私は 彼等を振り切る

勇氣は無い。

八

死ぬなら 彼等と共に

罰せられるなら 彼等と共に

ただ 私は 解放の日のために

強く 生きて居りたい！

(1921・7・30)

貧民窟生活十年、幾度もゴロツキの白刃の下に立つ彼でも、争議団の責任者として心の大きく激動するを禁じ得なかったのであろう。詩に慷慨悲歌の調べのあるのは、今日見てほほえましいものがある。

デリカシーを解する社会運動家

賀川は普選運動のみならず、労働組合公認運動や治安維持法第十七条撤廃運動の如き団結権獲得のために常に陣頭に立った。これらの運動に際し、彼の執筆した宣言書は、散文と言うよりは詩であった。

また彼が壇上でも、火を吐く雄弁も、詩人らしい情熱がこもっていた。与謝野晶子は嘗て『涙の二等分』の序において賀川を評して斯ういった。

「忌憚なく云ふと、最近の社会問題に触れて指導者となり実行家となって居る人達には、概して芸術思想の教養が稀薄でるやうに見受けられます。云ひ換れば、その人達の熱情が根柢を世界人類の愛に置いて居ると思はれる所が少なく、その人達の言動が粗硬な野性に留まって、芸術思想からにじみ出る香味とデリカシーとを欠いて居るやうに見受けられます。かう云う事を以て社会改造家の資格に望むのは余りに十全を求める嫌ひがあるかも知れませんが・・・」

と言って、晶子は河上肇と堺利彦とそして賀川に、その資格の適格者を見出しているのであった。

然りだ。晶子の言った通りである。社会運動家や労働運動家は数少なしとしないが、賀川がその中でも特に大きく評価せられる所以は、この詩人的要素に存したことは争えない事実である。

煽動詩人カガワ

詩人労働運動家はその詩のような言論を通じて多感の若き労働者を引きつけ、これを指導した。井筒節三は賀川を「煽動詩人」と評したが、評し得て面白いと思う。

賀川が大正十年夏に至って、神戸の大争議のリーダーに推され指導に任じたが、一敗地にまみれた。これにはいろいろ原因もあるが、賀川が堅く暴動化を戒めたことがその一因だったと言われている。或いは然うであったろう。しかし、破れたとはいえ、堂々たる結束と、意気の高揚は、煽動詩人賀川の力にまつところ大だったと言えると思う。

この争議は、参加人員三万五千、三菱・川崎造船所の全職工がこれに加わり、罷業四十五日、わが国空前の大労資戦であった。殊に罷業団本部は工場占領を宣言し、知事は出兵を請求して姫路師団から一個大隊が派遣されて来た。

そして七月二十九日、罷業団の示威行列と警官隊とが衝突を惹起し流血の惨事を出し、さらに暴動化の怖れさえあったのを、賀川はあくまでもこれを阻止した。もし彼の制止がなく、暴動におよんでいたとしたら、軍隊及び警官隊を向うに廻して、どんな惨事が起こっていたか知れない。争議は四旬の後、惨敗宣言となったが、この争議は、わが労働運動に多くの教訓を与えた。

賀川は七月三十日、八十五人の幹部と共に三宮署へ留置せられ、次で収監された。その時の彼の詩がある。

女囚監の十三日

三宮警察署から移されて神戸橋分監の女囚監に収容された賀川はそこで、一緒に収容された同志の一人の慟哭する有様を見て胸をうたれ、また監房の鉄柵の中から両手を差出して彼を歓迎する年若き同志の姿に勇気づけられ、彼らのために心静かに祈った。

また監房の窓から見える雲の去来をあかず眺め入り、房内に巢食う蜘蛛を懐かしみ、石の塀の外に聞こえる近所の民家の子どもの聲に耳を済ませた。

一聯二十首の短歌は後年、憲兵隊に拉致された際の作と共に、最も特色ある歌といえるが、感情に溺れず、さればとて、前記三宮署における詩の如く慷慨悲憤もせず、冷静沈着な歌いぶりはさすがである。

未決監にて

—大正十年—

猿のよう両手をのばし柵いだき外見る子らの心悲しや

右を向き左に廻りあちこちと獄屋の中を我は歩めり

わが友は監房の戸口に額あてよとぞ泣きぬ眼もあてられぬほど

監房に一杯の水うくるとき人のなさけのありがたくもあるかな
瞑想のその折々の身のたるみ疲れ果てたるこのみぞ憎き
朝夕に数度居直りわが神よ千歳の磬よと強く祈りぬ
南なる窓よりもるゝ太陽はその輝きをかくさざりけり
ただ一人獄屋の内に友を得ぬ蠅とり蜘蛛はそのひとりにぞある
いつまでもいつまでもたつも尽きざるは監房の窓をよぎる夏雲
折々は雑巾しぼり床をふく我を顧みひとりほほゑむ
僧房のその生活に似たるかな我とみ神と二人にしあれば
薄明のそれにも似たるわが心祈れる時の白日の空
三年も五年も此処に置かれても神捨てざればうきことはなし
電燈の光は鈍し本はなし閉じたる目には灯の用もなし
監獄のみかげの垣の夏日うけきらめく時の美しいこと
一坪五勺ひろくもあらぬ独房をぐるぐる廻る室内の旅
獄屋までもれくる響ハンマーと川崎の笛の憎くもあるかな
夕まぐれ牢の高壁打ち越えてうれしげにきく子らの呼ぶ聲
「だれのとなりにだれが居る」聲打ち揃え呼ぶ聲に我は牢屋を忘れてありぬ
雑巾を硝子にあてゝ顔みればわが口髭はものになりけり
暑ければ差入れの扇ばたつかせ風を送りぬ夜の目もせずに

—神戸橋分監にて 神戸労働総罷業の時 大正十年八月

賀川はまた監房の中で静かに長詩を作る余裕をも持った。

大水は聲を擧ぐ

—八月五日橘分監にて—

大水は聲を挙げた！

大水は聲を挙げた！

山は里に海に大水は聲を挙げた！

空は四十日四十夜閉されて夫の水口が切れたかの様に大水は注がれた。

一滴、一滴、雨は降る。

雨垂れは美しくやさしい！

虹もその間に交って居た。

然し一滴、一滴降る雨は野山を蔽ひ大海にまで翼をのべた。

降るよ、降るよ！ 雨は降るよ！

やさしき雨が堤を破った！

静かに落ちる滴が聲を出し初めた！

百万滴の水は大水となった！

大水は聲をあげた！

大水は聲を挙げた！

柔和にして愛らしく透明にして美しき凡てを養ひ凡てを包み凡てを恵み

凡てを祝する点滴は、今大声をあげて、地平線の上に吠え猛る。

大水は聲をあげた！

十万方哩は水に浸った！

地上は 凡て 水の征する所となった。

何者も水に勝つことは出来ない！

無力なりし水は、今、鬨(とき)の聲をあぐ！

上に水あり、水は川を逆に上り川床を動かし小山も岡もみな崩してしまっ
た…

アララツトの山頂も、今は水底に沈むだ！

静かに澄める生産者の心には、常に柔和にして、常に透明なる人類の祝福が
秘められてゐる。

彼は水の如く親切であつて、水の如く愛らしい。

彼は春日雨であり、彼は暑気を消す時雨である。

彼は虹もて人類を導き、蜃気楼もて砂漠に等しき人の世を色づける。

彼は永遠に生命の水であり、永遠に凡てを包含する海洋である。

世界の隅隅になさるる最小の労働も、時のよると地軸を傾けるアトラスの楫
にも劣らざることがある。

生産者は実に地球の廻転そのものをも司どつてゐるのである。

然し、いと小さき生産者は嘗て訴へることをしなかつた。

彼はピラミッドを作り万里の長城を築いたがそれでもまだ不平を云うことを知
らなかつた。

彼はパナマの運河を掘り、沈没することを知らぬと云はれたルスタニア号を
建造した。

それでも生産者は聲を挙げなかつた。

然し一滴一滴垂れ重なつた労働者の汗は天地を蔽ふ水気と相通じた！

悪虐に泣く無産者の涙も資本主義の搾取に枯れた裏長屋の幼年工の血も
世界賑々(みやくみやく)の水気と相通じた！

水準は高まった！

水は堤を切って流れた！

大水は声を上げた！

大水は声をなくして聲を放った！

解放せられたるものには常に聲がある！

大水の聲は大きかった。

地軸も振り上げるほどその聲は大きかった。

地球が水の上に浮び上ったのではないかと思はれたほど、その聲は大きかった！

海嘯(つなみ)も、海潮(うしほ)も、洪水も、瀑布(ばくふ)も、凡て聲をもつ！

然し静かに注がれる無産者の血と涙も海嘯と洪水に劣らざる大聲をもつ！

大水は声をあげた！

実に大水は声をあげた！

社会問題の象徴詩

一人一人の労働者を一滴一滴の水にたとえて、無産大衆が今や大水となって声をあげていることを歌ったものである。

象徴詩は多いが、深刻な社会問題を象徴したこの詩の如きは珍しいといわねばならない。そしてそれが、獄内での作であるところに一層珍重すべきものではないか。

賀川は未決監に在ること十三日にして無罪釈放となった。しかし野倉萬治ら労働者は有罪となって服役したが、その留守宅の世話など、賀川はその一切を引き受けた。

この罷業事件—収監によって賀川の名は天下に轟いた。それには『死線を越えて』の刊行があづかって力があるが、単に争議のリーダー、或は小説の作者としてよりも、彼は詩人的要素がこれらの上に添っていたればこそと思う。

或る労働争議—これは神戸の争議ではなく、大阪の電灯争議であるが、その翌日、流れを下る笹の葉を見て、弱き者の運命を思う左記の詩は、彼ならではと思われる。

争議の翌日

雨ふる日、

さみだれの、

小溝の流、

渦巻きし、

濁れる水に、

小笹おち、

吸はれるやうに、

流され行くを、

じっと 眺めゐる

自分の心。

激動の

同盟罷工の翌日—

何とはなしに

涙ぐまるよ、

おゝ 小笹の運命よ！

小笹の運命よ！

(近江八幡にて大電争議の翌日)

農民組合の創始

神戸の争議がすんで、鐘淵紡績の争議が始まった頃から、労働運動も従来の人道主義的な行き方が斥けられ、サンディカリズムの影響を受けて、暴動に近い争議が続発すると共に、金一封の授受が争議の蔭において行われる風が生じたりして、純情の彼は次第に労働運動から遠ざかり、それに代って、農民のため日本農民運動を創始するに至った。

大正十一年四月、日本農民組合創立大会が開かれ、賀川をはじめ本文の筆者らが理事となり、組合長には賀川の推薦で杉山元治郎が就任した。

当日の創立宣言は賀川が執筆したが、詩人らしい、むしろ宗教的の響きのある文章である。

「…農民は互助と友愛の精神を以て解放の途上に立つ。我等は飽迄暴力を否定す。我等は思想の自由と社会公認の大道に従い、真理を愛し、…我等は公義の支配する世界を創造せんがために、此処に犠牲と熱愛とを捧げて窮乏せる農民の解放を期す。」

労働運動を去っても、農民運動はついに離れることなく、三十年後の今日もなおこれを続けている彼である。

布哇(ハワイ)の労働争議を歌う

賀川は神戸争議から三年後、大正十三年十一月、アメリカ各大学の招聘に応じ渡米したが、その途中、布哇で砂糖農業労働者の争議に関与した。その時の詩がある。

まどろみ得ぬ月夜

あゝ私は見た 桃色のベールに包まれた、

フィリピノの娘等が 階段の片隅に

米の配給を待ってゐるのを。

私はすぐ思ひ出した 過ぎし日、

五萬の労働者と 共に泣いたことを……

女等は座板の上に蹲って、

ものうく膝頭を見詰めてゐる、でも、

子供だけは小薩張(こざっぱり)と 着物をきて

廊下をあちこち あるき廻る。

『ヒロには野天に 何千人位 寝てゐるのですか？』

『サア、四五千人も寝てゐますかな、

そこでは、もう子供が三十六人死にました そして大人は十八人

今日明日の内に

病院から住人位抛(はふ)り出されるのです。

資本家は一年に一億五千満弗の

砂糖を収穫し、

四割の配当をしてゐるに、

我等は一日一弗の生活をしてゐます。

罷工は八ヶ月十日続きました。

然し戦いは之からです』

さう眼に涙をたたえて

マンラピットは云ふた。

あゝ私は見た 南の国の娘等が

飢え疲れたる瘦軀を運び、

洗足(はだし)の儘――

砂糖の都ホノルルに

米の配給を待ちつつある光景を。

あゝ私は見た、私はみた！

太平洋の真中に

血の噴火山のあることを！

私の夢は破れ、

骨はうづく、

まどろみ得ぬ、

月夜の真夜中に。

丘の上から 私は

晴れ渡る銀色の港をながめ、

白きベットに懊悩しつつ、

愛らしき比島の娘等の、

今宵、固き路上の

結ばざる夢を思ふ。

涙が祈を誘ふ。

寂しき月が

私の顔を覗く――

(1924・12・9 ホノルルにて)

預言詩人カガワ

労働詩人、煽動詩人と彼を評する者もあるが、筆者はむしろ預言詩人といいたい。彼は労働運動に関与しても、現実の賃金の多寡や労働条件の末節のみを見ないで、常に人間性を見、理想の王国を見ていたからである。

恋愛のみを歌う詩人とは異って、この預言詩人は常に神の国の地上実現を夢み、これが実践を期して、自ら率先、いばらの道をかきわけつつ、まっしぐらに前進を続けている彼である。

第4章 こども愛の歌

恵まれた一男二女

賀川は結婚して九年目、長男を恵まれ、次で三年を経て長女を、さらに四年置いて次女を与えられ、現に一男二女の父である。また一孫の善きお爺さんでもある。

長男は大学を終えて宗教音楽(特にバッハ)の研究に従い、長女は医学を修め、無産者診療を志し、次女は基督教伝道のため神学を修行中である。三子が賀川の芸術、科学、宗教の三方面をそれぞれ分担して継承としているわけである。

賀川は子煩悩である。彼は「子供はそれ自身、或る偉大さを持っている」とし、世間の母親の神経質過ぎる子への干渉と保護とを斥けているが、しかし、そうだからといって、彼自身は一部の知識人に見るように、わが子の生育に対して無関心ではなかった。

ただそのまま自然に育てれば、清純な感情と、強靱な意志をもって伸びて行く子を、親の盲目愛によってゆがめることを、彼は敢えてしなかつただけである。

赤ん坊が漂着した

大正十一年末、はじめて長男(純基)を与えられた時の彼の喜びは非常なものだった。その時の散文詩「赤ん坊の漂着」の冒頭に、彼は父となった歓喜を次のように歌っている。

赤ん坊が漂着した。地球の岸に天空から打ち上げられた。

珍しいものが、天から降って来た。...

絹のやうな皮膚、蠟石のやうな色艶、堇の花の形をした唇、弓形の小さい顎、握りしめた

指、幻を見てゐるやうな眼、...

或人は煙突から白鷺が落ちて行ったのだとも云ふ。また或人は天の煤を掃いて廻る鷺鳥に乗った阿婆(おばあ)さんが星の世界から掃き落したのだと、マザー・グースのやうな話をした。…

赤ん坊は眼を閉じた儘凝乎(じつ)としてゐる。…

他の世界で見て来た事が思ひ出されるのか、漂流の思ひ出が悲しいのか、見苦しい地球に漂流したことが悲しいのか、微(かす)かに眼を見張って、何処で覚えた言葉であるか『オアー オアー』と発音して泣く。…

赤ん坊は、天地の創造の前を知って居るやうな顔をしてゐる。それは天の使が羽根を切り落されたやうな形をしてゐる。一寸前まで飛んでいゐたのじゃ無いか？ 何処か、背中の上方に羽根の着いてゐた跡形でも無いか？…

私は地球の一角に立って、この天来の珍客を受け取った。私はこの漂着者が、何を語り出すかを、今楽しみにして待つてゐる。

(1923・5・26)

父親としての心配

愛児を与えられた歓喜でもあるが、愛児を育てて行く上での心配もまた大きかった。

当時賀川はまた神戸新川の貧民窟に住んでいたが、わが子が付近の長屋の子と同じように悪化の一路を辿ったらどうでしょう—と心配した。もともと、出産に先立ち、一家は貧民窟の真っ直中の家から、やや離れた表筋の祖母の家へ移ってはいしたが、そこもやはり密集地帯のつづきであった。

それに、今までたびたび賀川夫妻に暴力を加えて来たMというアル中の凶暴性の狂人が、つきまとうて離れず、殊に夫人を付け狙うているので、夫人も神経質になっていた。この点でも賀川は人知れず心配した。

「こんなところで子供を育てることは、如何なる教育論文を書くよりも六ヶしい」と、彼はわたしに述懐していたこともあった。

幸いにして長男は無事に生まれた。誕生から三十日目に、喜びの赤飯がたかれたが、その時、彼は「坊やの赤飯(あかまま)」と題し、

坊やが 生れて

三十日

今朝はうれしや

赤飯(あかまま)たいて

近處九軒に くばりましよ

と父親の喜びを歌い出したが、すぐ後から「子を育てる父の心配」が頭をもたげるのだった。

坊やの赤飯(あかまま)

...

パパアの

一つの心配は

坊やが

貧乏なこの町で

育つかどうかの

問題だ。

パパアは

坊やも知るまいが

日本の貧しい人々に

一生仕へて

死にたいの

それで

おまえが生まれても

村にも山にも

引っ越さず

貧民窟の表筋

三軒長屋の

その端に

ママアの

善い善い母ちゃんの

---つまりおまへの祖母(ばあ)ちゃんの---

お家に暫時(しばらく)

引越して

南京虫の巣の中で

おまへを

神への牲(いけにへ)に

捧げつつもりで

育てます。

(3連略)

坊やが

大きくなったとき

近所の子供を

真似ないで

善い 善い

子供に

なりなさい。

パパアは

十五の

その日まで

村 随一の

悪太郎

癩癩持の威張りやで

手にもおへない

ものでした。

坊やが

パパの血をうけて

癩癩持で 威張りやで

貧民窟の チンピラと

仲間になって

騒いだら

パパアはどんなに

悲しかろ？

(5連略)

パパアは

おまへの 無二の友

おまへの

寝顔を のぞきこみ

『聖者』とおまへを呼びました。

おまへは

独逸のデューレルが

画いたマルチン・ルーテルの

それにも似たる顔をして

パパアの跪拝を待っている。

坊やよ 坊やよ

ねんねしな

おまへが大きくなったとき

パパアは おまへに

友を得て

プロレタリアの戦ひに

二人で一緒に行きませう。

坊やが 生まれて 三十日

今日は うれしや

赤飯(あかま)炊いて

近處九軒にくばりましょ。

(1923・1・25)

わが子は恋人、恋人以上

賀川にとって、わが子は恋人であった。

わが児による陶醉

汽車の窓に倚(よ)つて

眼を閉じると

小さい 丸い棺桶が

眼の前に見える

それは 今迄 私が多くの

貧しい子供等を葬った

棺桶である。

私の 可愛い 坊やは
消化不良と 口腔の病氣と
結核の為に 倒れた
私が 貧民生活をした 犠牲のために
--すまない--
こんな幻は見たくないと
眼をぱっと開くと
三等客車の室内は
タバコの煙がもうもうと立上ってゐる
その 煙の中に 猶
坊やの顔が偲ばれる
旅に出で 夜寝る時
恋人の如く 吾児の顔が現れる
立つ時に 悲しみの中に立ち出で
再び出る時は 坊やと一緒にならでは
旅に出るまいと 思ふたことなど
旅枕--うとうとをする中に
坊やが いつもするように
鼻と鼻と相接し
耳朶(たぶ)にふれ 眼の上をなで
ニコニコする姿が 眼の前に浮ぶ

父は彼の顔の上にひかれた

いと小さい擦り傷の歴史まで覚えてゐる

小さい咳、眼にたまる眼やに

産まれてから三月目位から

善くならぬ顔色――

それらがみな一々心配になる――

性欲よりも 女よりも

更に面白き わが児の生ひ立ち

恋以上に 我を恍惚(うっとり)とさせてくれる

生の表現の陶醉――

私はたとひ

わが児を失ふことがあっても

この陶醉を与えてくれた 瞬間に対して不平も何も無い。

児を持たぬ中(うち)に

児に対する愛など考へたことも有ったが今は生れ変わったものの

如く

新しき世界に 自らが

足を踏み込んだことを思ふ。

わが子は彼の幻であった。彼は真夜中、八燭光の暗い電燈の下で、一人瞑想に浸っている時、隣室から聞こえて来る妻の子守唄に、自らもまたみどり児となって母のふところにある思ひがするのだった。

魂の分泌物

—

真夜中に、私は

静かに 歩み、

広小路の上に 瞬く星と

親しく 語る、

その時—

ひとり あるき、

その ありがたさ！

人に飽き

静寂を取り返す

そのうれしさ…

二

二階座敷の

八燭の電燈の

ほの暗き影に、

一人考へ入る夜の

如何に 甘きことよ！

瞑想の 甘きしたり

呑みほして、

闇に住む

うれしき日の

幾日か続く。

何にも考へず、

凡てを忘れた その奥に、

み姿 忍ぶ、

み神の尊さ！

三

一刻でも 多く

坊やの顔を眺めて居りたい。

それが 吾子であることを忘れ、

それが性の産物であることを忘れ、ただ尊く

その前に跪拝する――

四

吾が子が

もの云はぬことの

如何に 荘厳に見ゆることよ――

『坊や！』と呼ばば、

答へらしい 句調で、

ただ

『オー、オー』と小さく呟く。

その聲の奥ゆかしさ！

凡ての神秘は

語り得ぬところにある。

五

わが子に 睡を与えよ、

その額に玉を結べ！

天の使も

彼の顔を見入るよ！

六

母の ねんねこ歌の

愛らしき響よ！

私のために

繰り返してくれ！

妻よ、も一度、

私も おまへの子でありたい、

そんな美しいおまへの歌がきけるなら

そんなに ねんねこ歌の節が

美しく響くものなら――

天使の置き忘れた人形

賀川は長男出生後二年、大正十四年四月二十三日ロンドンの客舎で、長女千代子の出生の報を受け取り、遥かに故国のわが家に、むつきに包まれて呱呱の聲をあげているまだ見ぬわが子を偲んでうたっている。

置忘れた生人形

赤ん坊は 産まれたのですか？

生えたのですか？

鶏小屋の 側で

市松人形の やうに泣くのは

天の使が置忘れて行った

人形じゃありませんか？

何しろ 目出度いことです？

パパアが 欧州に行って

留守の間に

天の使が まだ もう一人

小さい人間の芽生を

天窓から 一寸と 投げ込んで

行って くれたものですから

うれしいことです。

おむつが 森の間に

満艦飾のように 輝いて

ゐるじや ありませんか？

鶏も パピも、みな

喜んでゐるじや ありませんか？

コカツコツココツコ ピヤウピヤウ

軒の雀も 喜んでゐますよ

「武蔵野の 北澤の小屋に

赤ン坊が 一匹 天から落ちて来た」

と云って 大騒ぎをしてゐるのが

私の耳の聞えます。

坊やは 妙な顔をして

赤ン坊の顔を見てゐませう

おかしい奴が？

何処から 来たのか 知ら？

私の乳を盗る奴は

おかしな奴だと

ねたましくも 思つてゐませう。

然し何しろ、目出たいことです

その日は 武蔵野の空も

特別に 晴れたことせう

天の使が 天から落ちて来たのだから

それ位のことはありますよ。

遠見の富士も 今日

にたにた微笑んで くれませう

ロンドンにゐるパパも

うれしいので ニタニタ笑ひました。

私は どうしても

産れたとは 思へません

生えたのです！

生えたのです！

如何にも 自然に

鶏頭畑に 鶏頭が

生えるように

生え上ったのです。

新しい 赤ン坊は

大地から 生えたのです

春の日に

武蔵野の 椋と樺の下に

生えたのです。

まア 何しろ 目出たいことです。

私は 土地から

赤ん坊を 突出してくれた、

大地の精に お禮を云ひませう。

(1925・4・27、ロンドンにて)

愛児たちが成長すると、忙しい彼ではあるが寸暇をぬすんで、児らと共に、小川へ目高とりにも出掛けて行った。

子供をつれて

今日は

小川の

めだかとり

めだかとりのが

能ではなくて

めだかの精に

つかまりたいのだ。

人間がいやになった

めだかになって 小川の下

浮草の

流の下に 隠れたい。

幼時を徳島の田園に育った彼としては、目高が幼な友達であった。

だが、こうした歌は少ない。社会がそうさせないのだ。彼の差出す手を、多くの社会の子が待っているのだから――。

深められた子ども愛

父となって後、賀川は従来通り長屋の子を歌っているが、これが彼の詩であるかと訝しく思えるほど、繊細な詩情のあふれ出ているのを見るのである。「涙の二等分」の「おいし」の詩などに比べて、こども愛は、それだけ深められて来ていることを物語るものであろう。

ふーちゃんの訪問

『チャーチャン！』

『チャーチャン！』

隣の桶屋の

ふーちゃんが

ひき戸の

隙から 首出して

私の妻を呼んでゐる

ふーちゃん

今年 二つはん

頭の髪は

蓬(よもぎ)のやうに

生えたら生えたで

生えながし

きものは汚(あか)で

キンピカリ

桶屋の隣の活動の

中売りさんの

チンコロは

その名をS(エス)と

申します

Sと

ふーちゃん

なかよしで

なんでも二人で

たべまする

二人は妙に

連れ立って

私のうちに

きてくれる

私の家の

軒先で

Sと

ふーちゃん

つくなんで

二人でキャラメル

食ってゐる

ちよつと

ねぶつて

Sにやり

Sのねぶつたその後を

ふーちゃん

うまそうに

しやぶります

Sも人間になりすまし

桶屋の娘の

顔みあげ

もすこしくれよと

まつてゐる

ふーちゃん

首をSにむけて

また またすこし

なめたのち

のこりのキャラメル

Sにやる

みんなやるのは

まだおいしい

右手にしかと

つかまへて

少し残ったその端を

手先でSに

なめさせる

Sはそれが

きにいらぬ

すべてをくれと

かみついた

ふーちゃん

あはてて

手をはなす

Sは得意な身振して

キャラメルひとりでなめました

布衣(ほい)ない

ふーちゃん

うらめしい

半分涙を

眼に湛え

また また

ひき戸の

隙間から

『チャーチヤン！』

『チャーチヤン！』

呼んでいる

あん焼きの阿爺さん

まちのはづれの 四辻に

貧乏な白髪の ぢいちゃんが、

臺つき車に 店出して

餡焼一つ 一銭で

まちの子供に賣ってゐた。

こんろの炭火は あかく燃え

鐵の鑄型は ぬくもった。

油を塗って こなこねて

黒い鑄型に 粉こめて

よくよく焼けるを 待ってゐた

街の子供も 待ってゐた。

踏切番の子供

ピーピー ゴーゴー

汽車走れ！

赤旗 白旗 信号旗

あぶない あぶない みなとまれ

ここは踏切 みなとまれ

ここはふみきり（1字漢字不明）おろせ

ひとも くるまも みなとまれ

のぼりくだりの ゆきちがひ

踏切ぎはの 番小舎に

大勢お客が のぞきます

ばんざい ばんざい 汽車はしれ

ピーピー ゴーゴー

汽車走れ

きしやにのりたいたい どこまでも

のせてくれない いつまでも

くるひも くるひも あつけない

うごかぬいへに うごくしや

きしやのうしろに はこつけて

走つてみたいな どこまでも

ピーピー ゴーゴー

汽車走れ！

ここはふみきり 旗を出せ

くるまも ひとも みなとまれ

のぼりくだりの ゆきちがひ

きしやがはしつた そのあとは

にはとりお家で コカコツコー

うさぎは おはこに ピョンピョンピョン

世界的第指導者の賀川ではあるが、また、童心を失わない詩人賀川である。

童謡としての秀歌

なお、賀川は沢山の童謡を作っているが、その中での秀作を挙げると、次の如きがある。

丹波栗

丹波栗！

くり、くり、くり、くり

丹波栗。

かば色、とび色、

丹波栗！

色艶すぐれ、

実のみちて、

炭火で焼いて、

湯で ゆでて、

お口に ほゝばる、

丹波栗！

猿蟹戦争の

そのむかし、

パチンとはじけた、

丹波栗！

丹波の山の

山奥で、

鬼が拾うた、

丹波栗！

秋の木の葉が

散つたのち、

ポツリと落ちた、

丹波栗！

今年 みのり

よいしるし

山より出て来た、

丹波栗！

山から出てきた、

丹波栗！

第5章 アメリカ苦学

プリンストン大学へ

貧民窟に住み込んでから四年九ヶ月たって、大正三年八月、賀川はプリンストン大学へ遊学のためアメリカに渡った。お蠶棚のような三等船室の客としてである。アメリカと彼との生涯にわたるつながりはこの時に始まった。

賀川はプリンストンの神学校寄宿舎に入り、そこから神学校の講義に出たが、神学の講義よりも、大学の実験心理学や生物学の講義に心をひかされて、その方の勉強に力を入れたので、二年後、神学校を卒えてバチェラー・オブ・デビニティーの称号を貰うに先立ち、大学からマスター・アーツのクレジットを受けた。

そんなわけでプリンストン在学中は勉強に日も足らず、作詩も「曙」その他二三篇あるにすぎない。「曙」は七五調の定律の平凡作。それよりもプリンストンへ来て、二ヶ月して異邦で迎えた最初の冬のわびしさは、彼の詩情を刺激したらしく、「雪」と題した短詩がある。

貧民窟の騎士とは別人のような、繊細な神経で歌われている。

雪

広い 大陸(せかい)に

雪 つもり

私の靴が

隠れます。

白い夜が

深くふけ、

風もねむいか

音たてぬ。

大陸憧れて、

地平線追ふて、

榛の木の下で

死にたい私。

今日に限って

元気つく

雪と語つて、

独語(ひとりごと)云ふて

子狗(こいぬ)のやうに、

はねくつて、

私と 雪と

夕闇と、

三人揃ふて

芝居する。

疲れて

そこに打倒れ

柔(やわ)いゝ雪に

身を埋め、
『雪がこんなに
可愛がつて、
くれるんですよ！』

「雪」につづいて「折々は豆むき」というのがある。アルバイトの詩でもあろうか。

折々は豆むき

林檎の蔭の
草むしろ、
むしろの上の
豆むきや
ぱちつと 弾いて
打ちとばせ。
小豆が飛んだ、
草むらに
あれ 小豆が
おちた 草の中。
拾ひ撮(つま)んで
微笑んで
空とお日様に

愛憎する！

怪物ニューヨーク

賀川は余裕のある学生ではなかったから、夏季休暇には学資稼ぎの労働に出た。最初の夏はニューヨークへ出て仕事を探したが、折柄、欧州戦乱による不景気のため仕事口が見つからなかった。

給仕人の仕事でもないかと彼はマンハッタンまでさまよい歩いたが、その時、イーストリバーに架かったクインス・バラの虹のような大橋は彼を驚かせ、またこどものように喜ばせた。

クインス・バラの橋の上より

十分走って

まだ半ば

虹の橋とはことのことが、

異郷の土地の驚きに

右向き、左見、

橋下みれば、

イースト・リバーの青い水、

貨車を乗せた舟が行く。

三百尺の煙筒が、

箸を立てた様に見えますよ。

紐育の夢の橋、

バベルの塔を横にして、

神の国まで 橋渡す、

まア人間と云うものは、

豪いもの。

欄杆から首出して、

子供のやうによろこんで、

『あれ、汽船(ふね)が行く

汽船が行く』

後年、幾度かニューヨークを訪れて、幾度もこの橋を目撃した彼であるが、就職口を探し歩いて道すがら見た橋は二度と見られなかった。その後彼がそこを訪れる度ごとに、彼は豪くなっていたからである。

一苦学生賀川の見たニューヨークと、世界的名士賀川の見たそれとの隔たりを知るために、二十年後の彼の詩を、此処に並べて見ることにしよう。

次の詩は、1936年(昭和11年)、協同組合指導のため第四回の渡米の折りの作である。

太陽に接吻する

ニューヨークは青鬼だ

日曜の朝だ

二十八丁目の

プリンス・ジョージ・ホテルの十一階

北窓からのぞくと

エンパイア・ステート・ビルディングが

左寄に見える

その手前に 大きなつくしの

形した鳶色の建築物が朝日に輝く

日曜の朝だ

自動車の音もなく

屋根は雪に蔽はれ

硝子窓は黒ずむ

筍が生え出したやうに

つくしが萌え出たやうに

石の衣をきた

不思議な怪物が

地上に頸をのばす

ニューヨークは美しき怪物だ

二十世紀の不思議だ

朝日が深い影を

深い谷におとす

人造の深山

人造のキャニオン

鐘が鳴る

怪物の囁きだ

高塔の言葉だ

屋上屋を重ね

高塔塔を重ね

ニューヨークは

太陽に接吻する為に

背伸びする

うたわれるニューヨークは変わらなくても、うたう詩人の心境が変われば詩もおのづから変化せざるを得ない。

二十年前の賀川は、このメトロポリスの壮大さに驚きの声を放ったが、二十年後の彼は、驚かないばかりか冷静に批判を下している。

さびしい給仕人の生活

さて、話を再び学資稼ぎの労働の事に返そう。

プリンストン神学校を卒業して、此度はシカゴ大学で勉強をつづけようと考え、その学資稼ぎのため、大正四年から五年へかけて、あちらこちで給仕人生活を続けたが、最後にはナイヤガラナイアガラの瀧に近い、或る富豪の家の二番給仕人(セコンド・バトラー)に雇われ、一番給仕人の無頼漢に叱られ乍ら、四十日を過ごした。その時の詩がある。

ナイヤガラ四十日

本を開かざる、四十日――

眉を開かざる、四十日――

心を隅にむけ

くらがりに たたずむ、

霊を 目醒せど、
蚕の霊も起きて来ず、
油虫も立たず、
ただ自己の霊が、
胸中悲鳴をあげて、
自由に泣きつつあるを聞く。
虐げも、憎しみも、
機械視も 奴隷生活も
みな一瞬の中に
過去として 過ぎ行く
あゝ去れよ 生命よ 汝も！
運命の波よ、
汝の行く潮と共に急げ
我は欠伸(あくび)もなく
汝を守らん。

—セコンド・バトラーに雇われて。

こうして、学資を稼いで博士号をとるために、大正五年九月からシカゴ大学で勉強しようとしていると、
久しく忘れていた胸部疾患がまた、そろそろ活動し始めたらしい。健康を犠牲にしてまでとらねばなら
ない学位ではない。

それに、残して来た貧民窟の仕事のことも、気にかかり出して来た。そこで、勉強は思い止まり、帰国
の途につく事にした。

といっても、帰りの旅費が足りないので、すぐには帰れない。旅費調達のため、十月からユタ州のオグデンに移って、日本人会書記を勤めた。

その冬、街を行く女を見て、「震ふる夜」および「冬夜の一人歩き」の詩がある。

震(みぞれ)ふる夜

震ふる夜に、

街ゆく女、

裾着短く、

網靴長く、

何にをそんなに

すてすてと。

芝居の はねの

気の沈み

ちりりとしんだ

師走風

コートにとまる、

みぞれ灰、

深く思はず、

身のゆくへ。

まあ あの乙女の

急しさ！

世界の端も、
知ってゐる様に、
霰降る夜も、
おぢけなく。
一寸と！
教へて下さい、
可愛い子、乙女！
明るい瞳と(あなたの)
降る雪と、
白く、眩ゆい瓦斯灯に、
寂しい霊の、
隠れ家へ、
通ふ小路も ありますか？

ユタ州オグデンにて

冬夜の一人歩き

枯木よ 凧よ、
街頭の黄(きいろ)く白い電燈よ、
更け行く冬の夜に、
一人歩く魂を見てくれ、
闇に形だけ残した、

裏山よ わしは。
お前と二人で、
今世界を見下(みおろ)して居る。
人が睡る時に、
目醒めて踊る、
幽界の妖鬼よ、出迎へ、
ここにお前の友が立つ。
我霊よ、北風に、
起きよ、霜のやうに、
冴えよ・・・ 町には、
お前一人しか夜番は無いぞ！

どの詩にも、孤独が彼の心の扉を震わせているのが読まれる。

孤独の聖域を慕うて

彼には孤独の巷の方が相応しいのだろうか。いやそうではない。彼は孤独の境を「聖域」とさえ呼んで、そこに神の霊の囁きを聞くのを喜んだ。

彼は混乱の巷に住んでも、また孤独の聖域を慕う人であった。地に這うセーチ・ブラッシュ以外、萬目一草とともない砂漠を訪れて、彼は孤独の回復を喜んだ。

孤独の回復

折々は混乱を戀ふて
喧囂(けんごう)の巷に
心霊の戦きを探し行けど、
一人砂漠に来れば、孤独の回復を悦ぶは、
ただ 我のみならんや。
わが霊も わが着物も、
嬉々として 孤独の
聖域に祝賀す。
大自然に弄れ、
飢と餓と
砂風に嘆き、
途上に斃るとも
母の膝に
からかわれつつありと、
思へばよし。
セーチ・ブラシュが
ただ一つの異種をも混えず
居並んで、私を待つを見れば、
樺色の岡も、私の跳るに狭くはなし、
一人芸の、一人自慢をすれど、
賞むるものも 咎むるものもなければ、

遠慮もなし。

折々は人間の聲

ききたさに、

「おいし」と自分に云ふを見つ、

また独言を ささやけど、

半人半馬のバツカスも出て来ず、

また孤独の失神を断んと、

はねくり廻る、

自由の天地！

西、ネバタ(州の名「山」の意)に落つる

太陽に一楫して、

「けふ」と別れ

異国の暗(やみ)に合へば、

眼を閉じざる可らざる私に(眼病の)

祈の霊が唄きぬ。

かくてわが祭壇は いつもの如く、

孤独にてありき。

1916・10・19

思われて詩もなし

アメリカ苦学時代の詩はこれで終わっている。貧民窟生活のような現実の驚異もないし、さればといって、恋愛詩の浪漫的なものもない。

彼は給仕人時代に、朋輩のオペラ歌手上がりの美しい娘から思いをおくられたが、彼には全く反応はなかった。従って浪漫的な詩も生まれなかった。(若き日の思い出に、二三篇はあってもいいのだが…)

賀川の詩約五百篇の中には、夫人との結婚を歌った(魂と魂)一篇を除いて、恋愛詩らしい詩は皆無である。

それは、彼の短歌に一首の相聞歌もないのと共に、彼の詩歌の浪漫的要素を著しく稀薄にする。しかし、それに代わる人道主義的の浪漫的要素が、補うてなお余りあるを思えば、悲しむに足りない。

いな、恋愛詩を物する作者は箕ですくうほどあるが、賀川のごとき驚異すべき体験の上に立つヒューマニズムの作は、その例が少ない。そのユニークな賀川の詩の存在は尊いといわねばならない。

第6章 日本を愛する歌

日本が敗れて嬉しいか

近ごろ「愛国心」が問題となって、これを否定し排撃する論者が多くなった。軍国主義者にあやつられ「万邦無比」などと思いがあって、他国の権利や福祉を踏みにじって顧みなかった排他的、利己中心の愛国心は勿論排撃せなければならないが、それだからといって日本の敗北を謳歌し、自分の生まれた黒土を愛する感情をさえ強いて否定しようとするのはどうだろう。

賀川豊彦は典型的世界人であり、燃ゆるが如き人類愛の行者であるが、しかしそうした行き過ぎには同意しない。

終戦直後のことだった。マッカーサー司令部に随伴して日本に上陸した、アメリカの従軍記者の或る者が、真っ先に彼を訪問し、無遠慮な質問を投げた。

「平和の使徒であり、また戦争反対論者である貴下は、日本の敗北を、多分喜ばれたと思うがどうか」と、その時、賀川は、何と答えたか。碧眼の記者の耳を驚かしたほどの大声で彼はただ一言「ノー」といった。そして「およそ世界中の国民で、自国の敗北を喜ぶような者が居るだろうか」と反問した。賀川という言葉には「てらい」もなければ偽りもなかった。外人記者は彼の率直な言葉に好感をもった。

軍国主義の敗退は喜ばしい。しかしそうだからといって、日本の敗北を自ら慶賀するというのは明らかに行きすぎだし、ましてや、日本人で居て日本を愛しないというのもどうかしている。

賀川はそうした勝利者へのおもねりや、敗戦国民としてのてらいや卑下の感情を嘲笑し、勇敢に日本賛美の詩を作り、日本を愛する歌をうたっている。

重ねていうが、世界の人・賀川豊彦は日本人である。ソ連の人民でない如く、アメリカの市民でもない。それだから、彼は日本を愛する。このことは、彼が人類愛の行者であることと少しも矛盾しない。人類を愛するがゆえに、彼は日本人を愛するのである。日本人・賀川の、日本を愛する歌を抄録して見よう。

太陽の子だ、私は

太陽の子だ 私は

日本の子だ

太平洋の産んだ子だ……

海と太陽が私を産み

海洋が私を育てた

桜は私をいたわり

富士は私を遊ばせてくれた

私は日本人だ、海洋の子だ……

太平洋に鯨を放牧し

鱧(ふか)を友とし、銀鮫を同志とする

太陽の子だ 私は

火星も 水星も

私には 住むに 狭過ぎる

天空は 私の住居(すまゐ)

万物は 私の 寝床だ

岩石は 私の 指環であり

樹木は 私の 衣の描き紋だ！

太陽の子だ 私は

光の子だ！

国土の世界は あまりに

私に狭く

東洋の天地は私のためにあまりにでぜまだ…

銀河は 私の 揺籃であり

北斗は 私の 玩具である

太陽の子だ 私は

虹の子だ！

光の産んだ 桜の子だ

紅葉だ、あやめだ！ 木蓮の花だ！

花だよ、葉だ、生命だ！

融通自在の神の子だ！

太陽の子だよ 私は

光の産んだ申し子だ

地球に生れた土の子だ！

黄ばんだ皮膚は そのためだ

私は光だ！ 愛だ！ 情熱だ！

火山だ！ 海嘯(つなみ)だ、颱風だ！

融通自在に 魅入られて

大空歩む 私だ！

蜻蛉だ！ 私は

アキツスの 水に産れて

空を行く 大和島根の

青年だ！

死を越え 生越え

無限に行く…光だ、私は

神の子だ！

逆流を

鯉につれられ

泳いで乗り切る 金太郎だ！

桜の子だ 私は

日本人だ

正成、義貞、親房の

血をうけついだ 神の子だ！

正義の為に 生(せい)に生き

赤き心を 花に生き

死ぬ身だ 君と国の為め

死は 私の芸術だ！

光の延びた終点だ！ 死は、芸術だ！ 十字架だ！

天への梯子だ、生のつなぎめだ！

太陽の子だ 私は

純だ！ 真赤だ！

日の丸だ！

一だ！ 夜明だ！

抱擁だ！

凡てを包み

凡てを赦し

仁義に 生きる 国民だ！

光は 温め

光は 延ばす

光は 照らして

自ら 亡び

生命を與へて

死に就くものだ！

わしは光だ 日本人だ！

太陽の子だ！

自ら亡びて

人をば生かす

十字架の 血の

神の子だ！

「賀川を通じて見たる日本社会史の研究」で南加大学から学位を得たクヌーテンは、賀川の血の中には忠義一圖の武士道よりも、むしろ弱きに味方し強きをくじく侠客道が流れているといったが、「大和島根の青年だ」といい「逆流を泳ぎきる金太郎だ」といい、また、「自ら亡びて人を生かす十字架の血の神の子だ」といった語に、特権階級の圧政に屈せず、庶民階級のため、自ら俎上に殺されることを敢えて異としなかった侠客的な血の流れているを感じる。

愛国の祈りの歌

日本を愛する賀川は、日本の救いのために常に祈りをたやさない。ともすれば頹廢の道をたどりがちな日本人のために、神が特別に光と浄めとを、彼等の上に注がれんことを祈り求めた。

彼は日本が、剣をもって立つ国たることなく、愛のほかに權威なき国たらしめ給えと祈るのであった。

神よ 日本全土を守り給へ

神よ 日本全土を守り給へ みめぐみの主よ

この国より 罪をけし

悲しみの淵より ひきあげ給へ みひかりの主よ

闇き 嘆きに 災厄に 救はせ給へ 萬軍の主

暴風は ここに進路を選び

地震と海嘯(つなみ)は ここを脅す

あゝ主よ 顧みさせ給へ 我国を

ここに 争鬪(あらそひ)の聲をきかず

やわらぎと 互助の賛美をきかせ

とこしなえなる 勝利に入らせ給へ

貧しきは虐げられず

富めるものは 惜しみなく 散らし

叡智もてこの国を さきはひ給へ

善の外に 何者の 支配者なく

愛の外に 權威なき 国たらしめ給へ

みめぐみの父

たとひ 太平洋の波

この岸を洗ふとも

みめぐみの波 ここを洗はずば 如何にかせん

黒潮(こくてう)の 進むままに

たぎりたつ 清浄の血 わかさせ給へ

この国に 一人の娼婦あることなく

酔と 頹廢を拭ひ去り給へ

乙女の頸に 貞操の玉をむすび

子供等の胸に 温順を秘め

民はとこしへに 自ら治め

栄ある発明の民たらしめ給へ

義に対して さとく

愛には 感奮し

世界の国土に 光を投げさせ給へ

この国より――

そは 物質の力によらず

内なるものの力――汝の力によることを 示させ給へ

み光の主よ 父よ

今、日本には、ソ連を祖国として日本に反逆しようとする者も多いし、日本に生まれて日本を愛しないばかりか、これを罵って快とする識者も多い。

この時、人類を愛する至情をもって日本を愛し、日本が真に内側から再興する日のために祈りをつづけている賀川豊彦の存在は、力強き限りといわねばならない。

第7章 たましいの英雄を訪ねて

ガンヂス河のなげき

人類愛に燃える預言詩人は、国の内外を旅する道すがら、たましいの英雄ともいうべき聖賢や殉国者などの遺跡や墓を訪ねては、彼らが人類のために血涙を流した昔をしのいで、万斛の涙を流しているのである。

たましいの英雄にして、はじめてたましいの英雄を知るとでもいうのであろう。

キリストの聖地を巡礼しての詩は別に記すことにして、此処には釈尊や孔子やクロンエルや日蓮の跡を訪ねた折りの詩を抄録して見る。

賀川は印度のガンヂス河の畔に立って、釈尊の嘆きを偲び、次のようにうたっている。

日は照り

水は光り

大空は地上に接吻すれど

罪に穢れたたる人の子は

ガンヂス川のほとりに嘆く

地上に故郷なく

街より街に彷徨ふ

巡礼者を見よ

千年の聖教

世界を救ふ力なく

人類は互に垣を設け

山河ために赤し

おおガンヂスよ

釈迦の涙は

おまへの中に残ってゐるか？

ガンヂスは嘆き

わが霊は泣く

ヒマラヤの雪も

ピサヤの水も

熱帯の太陽も

わが悲しみを

慰め得ず

おお ガンヂスよ

五千年の嘆きを

おまへは堪えてゐるのか？

仏陀の出家も

世界を救わず

国荒れ

飢民天をうらみ

難民街に満つ

おおガンヂスよ

遠く流れて海に入るとも

わが嘆きは更に長く深し

ヒマラヤの雪は

わが嘆きを氷結し

ガンガの水は

わが涙を呑む

嘆きよ 嘆きよ！

人類の悲しみよ！

私は仏陀の嘆きに

キリストの十字架を加へむ

嘆きよ 嘆きよ

創造者にわが胸の

嘆きを伝えよ！

ウパニシャッドに残した

世紀の憂ひを

ヴェダンダに伝えよ

嘆きよ 嘆きよ

地球の嘆きよ

印度の憂ひは

私の憂ひに比して更に小さく

東洋の憂鬱は

私の悲しみの万分の一のみ

嘆け嘆け ガンヂスよ嘆け

憂ひを東より運びし

彷徨者のため嘆け

これは、1939年1月17日、世界宣教大会に臨むためインドに旅した時、ガンヂス河畔に佇んでの作である。

また彼は、中国に屢々平和使節として使いしたが、1931年1月、泗水のほとりに孔子の廟を訪ねた時、中国の現場を顧み仁義の教えの今は遠きを嘆くのであった。

孔子の墓前にて

—大成至聖父王皇墓—

孔丘去りて

二千五百年

泗水のほとり

森さびれ

訪ふひともなし

鳥のなく。

文盲地にみち

流血つづき

孔丘の墓

苔のむす。

去る年

弾丸は

孔丘の記念堂におち

三十の霊は

此世を去りぬ。

魯の領域は

塹壕にてつづられ

乞食の群

村々にみつ。

日は照り

天は高けれど

中原に

人はなし

忠恕の道は

地を払ひ

仁義の教忘れぬ。

黄河のほとり

何人が

身を捧げて

この国を愛するものぞ。

あゝ魯の大夫

職を辞して二千年

野に叫ぶ預言者の聲は絶え

山東の荒野

隼の泣く。

あゝ仁義をして

甦らしめ

孔丘をして

再起せしめよ

山東の原

日は傾き

瞑想の日も

破られぬ。

さらば 新しき日のために

愛の道を瞑想せよ

民国のために

愛の教をひらき

檜を茂らしめ

若人をして

神に生かしめん。

青天白日旗よ

仁義をして甦らしめ

孔丘をして

泗水のほとりに

泣かしむる勿れ。

--1931・1・23

クロムエルの銅像の前にて

ウエストミンスターの

霧の中に

静かに瞑目して

クロムエルは 立つ。

大伽藍にも入れられず

風雨にうたれて 君は立つ——

王党の長袖(ちょうしう)に

一睨(ひとにらみ)もくれやまず、

剣を抜いて立ちし

その昔忍ばずや！

議事堂を背に

寝れる獅子を下に—君は立つ！

獅子一度立たば

やがては また 今日の英国に

新しき咆哮を聞かん。

うすれ行く夕闇に、

君の姿も うすれ行く！

君が信仰の名によりて

捷(か)ちし民主の力、

何処ぞや？

黄金の光 眩く

信仰の影

ほのかなり。

君よ 抜かずや、

再度 君の剣を--そはレニンに似る--

君は 産業革命を 如何に見るか

語れ 君よ！

信仰によりて如何に

経済革命を制御すべきかを--

うすれ行く ロンドンの

黄昏に、

議事堂の鐘は七時を告げぬ。

黄色に瓦斯の光ぞ照る、

語れ クロムエルよ――

街上の喧噪を

君は眼もくれず、

偶像の如く古結す、

私は 石垣にもたれて、

汝の顔を凝視す――

(1925・4・8)

賀川はまた千葉県清澄山の日蓮上人の銅像前に立って、次の如くうたった。

彼の精神界における存在が、親鸞よりはむしろ日蓮であることを思いあわせる時、一層興味深い。

永遠の思慕者

―千葉清澄山日蓮上人の銅像前にて―

東日を仰ぎ

卒士に伏し

永遠の思慕者 日蓮は

ここに一箇月の

修行を了へ

血にまみれつつ

山上にのぼる

東海 洋々

旭日かがやく

祝福せられたる 日蓮よ

無限はおまえの心に這入り

おまへは 勇猛心を興して

山を降る。

合掌入念

光明遍照

おお 黒潮の

うづまくところ

凡夫の苦悩するところ

そを救はずして

己むべき—

日蓮 ここに立正の

世界に出発す—

時既に去りて七百年

風波急なり

九十九里の難局

法難を恐るるもの

民衆を救ふ能はず

絶対の帰依者は

靈能に浸つて

国土を救はざるべからず。

我来つてまた

清澄山上

東海に面す。

聖靈いふ

法難汝をまつと

絶対の帰依者

無限の顕現者は

難を見て難に向ふ

北風梢を揺がせて

四肢凍る霜月二十八日

建長の昔を思ひ

日蓮の大猛を想起す

神は新しき時代に

新しき十字架をのこす

我、法難をおそれず

聖靈の示すがままに

難地につく

天空とざされ

妖雲低迷す

おお、聖靈よ

聖霊よ、妖雲を貫いて

我を導け。

—1931・11・28

豊公の廟に立ちて

立正の世界を望み、日本国の柱たらんとした日蓮と、大亜細亜を征服して「大日本」を打ち建て、アジアを千成瓢箪の旗印の下に指導せんとした太閤は、その雄図の大と、その度量の広さにおいて共通するところがあるが、前者の霊的なに比して後者は余り物臭紛々たるものがある。

賀川は、京都阿弥陀頭の豊公廟に立って、次の如くうたっている。

阿弥陀山頭

豊公の墓前に立ちて

阿弥陀山頭

風死して 木葉動かず、

人絶えて、

影 騒がず。

暮れやすき

冬の日、 平安の城を

光より奪ひ、

夢は永久に

結んで 醒めず。

嗚呼 墓よ、

野心と肉塊の霊は 何処ぞ？

聚落の栄 消え、

桃山の輝きも 失せぬ…

去りたくなくて、

せめてはと 思ひ懐れ、

平安城の栄華、

下に見て 汝は埋まる

あゝ

此墓石、

力と栄の名残…

されど、

冷たきを 如何にせん—

野心は生きたし、

人生は短かし、

石の命は

汝の野心なりしを。

霧は都を包んで

一つ、二つ、光は、浮べる舟の

つたなき灯し燈火と現る。

淋しき都よ！

時は移り、

人は去る。

あゝ 凡てこれ

『時』と『沈黙』の葬列ぞ！

第8章 神の衣裳の自然美

自然を通して神を

わたしが、賀川豊彦をヒロインとする映画を作るとしたら、最初の画面に、野の百合が、風に揺れている姿をクローズ・アップするであろう。

彼が神を知るに至ったのは十六歳の春、マタイ伝五章の「野の百合」の一節に感動したからだ。彼は五歳から十二歳まで、阿波の北部山脈の裾野に近い田園で、たにしを餌にエビを釣ったり、壊れたびんに、堀ですくって来たフナを飼ったり、小川の流りにメダカの行列を追ったりして過ごして、豊かな自然の恩恵と、その内容の美しさの中にいたが、この自然が何者に属し、また何者の創作であるかを知らなかった。

それが、イエスの言葉によって、初めて自然そのものの懐に神を発見した。もちろん、自然と言っても、大自然の一部分一部分の、花、鳥、風、月をばらばらに、ただ「鑑賞する」というのではない。全体としての自然の、その内側に動く一つの大きな力——宇宙の内的目的を認識するのである。

賀川は、自然の見方を、我らに次のように教える。

「野の百合は、偶然、そこにあるのではない。下等な隠花植物時代の幾世代かを経て漸く花を開くまでに進化し、さらに色も美しさを増し加えて来て、ついにこの百合にまでなったものである。

その間における、花みずからの努力もさこそながら、その背後に、宇宙の目的の動いていることを、我々は無視してはならぬ。

何万年の不断の花の努力と、宏大なる宇宙の意志があったればこそ、野の百合は、人工ソロモンの栄華などの足許にも及び難い美しさを持つのである。」

花の髓から神がのぞく

賀川のこの自然観を最もよく表現しているのは、「花？」の詩である。

花？

春が きたとて

花の 咲くのは

おかしいじゃないか！

寂しい胸には

まだ氷が張って

重い衣を まだ着てゐるに！

まあ！

花の 髓から

神様が 覗く！

私は 冬籠の

煤けた面を

とうとう神様に見付けられた。

この詩を作った時のことを、彼は次のように記している。

「春のまだ薄ら寒い頃、関西学院(注、当時は神戸の東端の丘陵原田村の森の中にあった)の構内へ行ったところ、ふと、梅の花の咲いているのを見つけた。

わたしは美しい花の前に佇んで、花の幾万年間の生命の歴史を考えた。すると、神が花卉の内側から、わたしをじつと覗いていられるような感じに打たれた。

わたしは貧民窟に住んでいて、イエスが『顔を洗へ、櫛けづれ』といわれても、実行できずに来たが今、神に、そのきたない顔を見付けられて恥ずかしくなった。

わたしはもっと美しくならねばならぬ、という要求を自ら深く心に感じた。『花の髓から神さまが覗く』というのは、この心持ちをうたったのである。

花が咲いたといって、酔眼朦朧と狂舞する曇った眼には、花の真の美しさは判らぬが、冴えきった眸には、ソロモンの栄華にもまさる美が映って来よう。

あなたが、もし、真の神のいのちに立ち帰るなら、自然そのものの裡に、花の髓の中からも、神の大きな啓示を読み、自然を通じて、神の働き給うことを如実に感知することができよう。」

彼によると、自然に対する人間の見方には幾つかの段階がある。たましいの成熟しない者には、自然は恐怖の相をもってまみえる。しかし、人間の個性が成熟して来るにつれ、自然賛美の歌が生まれた。

ところが自然を見る者のたましいが、さらに高揚して来ると、自然を人間の心の中で靈感をもって再構成し、より深く見るようになる。

こうなると、人は自然から神の言葉を聞き、自然を通じて神に近づき、自然と人間は相対立しながら、その根底では一つの生命をわかちあっているものであると考えるようになる。

そして、宇宙意思の空間芸術として自然を見るようになり、いよいよ大きな歓喜を自然から感得する。

花も鳥も風も月も、神の芸術として鑑賞の領域に入って来る。

よみがえりの春の歌

賀川は「自然は神の衣裳だ」という。春ともなれば、さんさんと降り注ぐ太陽の光に、地殻を破って若芽が伸び、百艸は甦ってやがて百花一時に咲き、目もまばゆい絢爛たる晴着の衣裳を示す。

この神の衣裳にまさる美があろうか。街頭を歩くニュールックなど、これから見れば孔雀の真似をする鵝にもひとしい。

甦りの春のうたを二編抜こう。

春陽（はるひ）

窓枠に

春の日はさし
万物は鎮まる
私は瞬もせず
春陽の反射を
凝視する 凝視する
茶褐色の敷居に
黄金色の春日
深緑のひばの葉に
クリーム色の大空に
浮き出して
けふ「太陽」を絵とする
静かに
静かに
太陽は歩をとどめて
私の顔にのぞきこむ。

1938・3・15

麦の芽萌ゆる頃

麦の芽 萌ゆる頃、
野に出でて、

生命の甦る春をみる！

青緑の若葉が

土一樺色の土を破つて、

出て来るよ 力強く！

雪の下に、

厳冬の寒気にも打勝って

いさぎよく、

青芽が吹出して来るよ。

あゝ 麦の若芽！

厳冬を越えて、

雪を越えて、

地殻を破って、

若芽が

おお 麦の若芽が、

萌えいつるよ、

彼処に 野に、

私は野路に立ち、

眼をあげて

生命の噴出するさまを見る。

私は静に野路に立ち、

麦の若芽を黙視する。

地殻を破って生命が噴出する、

噴出する土に 野に。

夏の花のかおり

神の衣裳は、ただに彩りが美しいばかりではない。惜しみなく発散する自然の香料はあまく、ゆたかで、心の浄まる思い。彼は、ハワイやインドの旅に、心の塵を拭われる思いをしたゼスミンの高い香りを思い出して、こう歌っている。

薫 香

夏日 くれば

いらだたしき

心 おさえて

ゼスミンの

香 かがまし

今日もまた――

印度 マドラスの

食卓に

主婦は わがためにゼスミンの花を

水鉢に浮べくれぬ

北米の激しき旅に

友は ガデニアの花を

わが胸に さしぬ

布哇の友は

ゼスミンの花環を

我が頸にうちかけぬ

夏日 くれば

いらだたしき

心 抑へて

神の備へ給ひし

静かなる

薫かがまし

形なく 姿見えねど

馥郁たる

その芳香

しめやかに

わが胸をおさへ

難みしげき日に

神への精進を教ゆ——

彼はまた夏の日盛りに、田草とりをする娘の姿を思い出し、幼き日に親しんだ源五郎虫をなつかしくうたう。

田草とり

足もとに

源五郎蟲が

くるくる廻る

がたろうが 大きなはさみで

指先に突進してくる

水草が

美しく浮いてゐる

あめんぼうが

スイスイと走る

大きな菅笠の下から

手拭をひらひらさせながら

若い娘が手古をはいて

田の草取って行く

日は真上に照り

田は煮えくり返る

稲は勢よく青く

のび上る

誰か太陽の光の指先の

強きを感じないものがあるか？

輝く秋のうた

秋は大空から来る。彼の詩には、秋をうたったものが割合に多い。彼は秋が好きなのかも知れない。二つの秋の詩を並べて見よう。

輝く秋

秋は戸口から

紺碧の空として覗く。

暗い胸に

背負ひ切れず

贖はんとして

贖ひ得ざる

このしびれる

わが末梢神経に

秋は来る。

すき通る冷徹の

まなざしを輝かせ

黄ばんだ早稲田を越え

かり取られた

稲株をすぎて

あゝ秋が来る

秋が来る—

秋よ！ 秋よ！

南に傾く

太陽の球面、

枯枝の鳥、百舌鳥、

秋は北海道から

鳥と共に南進し、

根室の処女林の

土産物を携えて

此処 大阪湾の

海浜までやってくる—

黒潮はやうやく

海面下に潜み

櫂は葉を震ひおとして

枝先を 天を掃くほうきのやうに揃えて

突立つ—その頃—

秋はシベリアから

渡ってくる

鳥のやうにまた、私は、

北から南に飛び

根室から大阪湾へ

秋の輝きを

唄ふために

碧空の下に立つ。

子供達は

寒さを忘れて

野道に脛を現して戯れ

父は瞑想の朝に

白日を頌ふ。

硝子戸も 台所に桶も

みな歓喜する—あゝ秋よ、

神嘗祭の今日のこの日よ—

柿の葉の落つる頃

備前の国吉井川のほとりに立ちて

演説会場を抜け出て、私は

秋日に輝く、

吉井川のほとりに立つ。

和気の手々は緑をなし、

大空はコバルトの光を放つ。

柿の葉は渚の、

石だたみの上に落ち、
大きな水車は、
苔むすわくを、
間断なく廻す。
長いリズムで歌ひつつ、
遡(のぼ)る川船の曳子(ひきこ)の姿が、
何処へか消え失せた後—
浅瀬のせせらぎの音のみ
耳朵をうつ。
三抱も、四抱もあろうと思はれる
岸に聳ゆる棕の木は、
このあたりの主である。
対対の渚には、
白馬が草を食うでゐる。
銀色の雲が 金魚のやうに、
空に浮ぶ。—
焦土の東京に疲れた、
私は—
吉井川の清流に、
云ひ知れぬ、
自然の美を感ずる。

—自然は残酷ではないのだ

—人間は間違つてゐるのだ

さう私は、

橋を渡る自転車の影が

対岸に消えるまで、

見詰めながら考へた。

柿の葉が風に揺られて、

バサバサと落ちてくる。

鍋を洗ふ一人の女房が、

流れの中で、

手を急がしく動かし、

洗ひ了(おは)つて、

石段を登つて帰つて行く。

取残された自分は、

石段に腰をおろし、

河底の、

エメラルドに彫刻したやうな、

美しい石の配置に、

眺め入る。

柿の葉が なほも

一つ、二つ、

私の頭をかすめて、

右に飛ぶ—

(1923・11)

こうして彼は自然美を歌っているが、ホイットマンが「草の葉」で歌ったと同じように、草の一片にも、なお星の万年の工に劣らぬ神のわざを読むのである。

彼は花鳥風月を詠む歌詠みと区別されねばならない。彼は自然の中に神の荘厳なる姿を見出して、これに拝跪する。彼にとって自然は、恐怖でも呪いでもなく、神の愛のいづみである。こんこんとして尽きざるいづみである。

第9章 世界を家として(アメリカ)

世界の人・カガワ

賀川は日本の賀川であると共に、いやそれ以上に世界の賀川である。リテラリー・ダイジェストは、彼こそキリスト教の理想の完全な典型だといひ、彼の生涯はアッジジのフランシスのように数奇をきわめ、聖パウロのように波瀾に富んだものだとし、アジアをよくするためには、もっとよく賀川を見る必要があると言っている。

ダイジェストの記者を待つまでもなく、世界の視聴は賀川を見、賀川に聞かんとし、彼は世界から引っ張り尻となっている。

ことにアメリカにおける人気に至ってはすばらしく、ロサンゼルス郊外には、カガワ街という街さえあって、わたしは二十年前、賀川と共にそこを訪れた。

こんな風で、世界人・賀川は、欧山米水をさながら我が家のごとく親しんで、あちらこちらと飛び歩いている。彼の旅行記に『世界を家として』というのがあるが、決して誇張ではない。

この「世界を家とする」詩人賀川のノートには、世界各国の印象やその時々感想をよんだ詩が少なくないが、屢々いうごとく、忙しい旅での即興詩で、彫琢の加わっていないものが多いので、文学としては遺憾の点も少なくないが、彼の思想と信仰が底流をなしているだけに、一読教えられるところが多い。

アメリカの詩は、大正3年のプリンストン留学以来、数次にわたって旅行しているので、詩の数も多いが、その中からホンの二三を拾って見ることにしよう。

まずニューヨークにおけるものを抄録して見る。(大正4年、はじめて彼がニューヨークを訪れた折りは「アメリカ苦学」の章で既に掲げた。)

ニューヨークの鐘

摩天楼の隙間より

聖愛の鐘が

響いてくるよ

邪道に踏み迷ふ

米国を喚びさますかの如く

礼拝の鐘が響いてくる

人為の巨大さに

建築学の誇りに

富の偉大さに

自動車の氾濫に

神を忘れて

人間の享樂の

最後の段階に

立つてみると

思つてゐる瞬間に

鐘が鳴るよ

聖堂の鐘が—

絶対者を無視する

バベルの塔が

空気にも 価せぬことを

その音律に

刻んで

鼓膜を打つよ

紺育も石塚の如く

バビロンの昔の如くに

亡ぶ可しと思へば

人為の無情と

永遠への

憧れが

新しき悲しみに

私を 誘ふ

アア 聖愛の鐘が鳴る

絶対者よ

今宵も

小さき胸に

宿り給へ

汝なくして 果して

人生に 生きるに

価値ありや

摩天楼を

築くは 易い

然し

神の生命を

把握するは難い

鉄骨とコンクリート

のみを考へて

生命の泉を汲むを

忘れし 文明を

憐み給へ

民衆は戦争におののき

為政者は

武器と強権を誇る

おお絶対者よ

永遠に

聖堂の鐘を

つき給へ

ニューヨークの凡ての民衆が

誰一人として洩なく

汝の大能を

意識するまで

アア鐘が鳴る

鐘が・・・

五月の黄昏に

疲れたる電気文明に

最後の晩禱をうながし

醜きを葬り

永遠の光明に

目醒めさせるために

おお鐘が鳴る

鐘が鳴る！

紐育もバビロンの如く亡びる時はあろう。そして永遠を思慕するあたり、ホイットマンが物質文明を罵る詩を思わせるものがある。

賀川は、このメトロポリスの文明を賛美しない。孤独を愛する彼は、却って都会を遠く離れた、広漠たる砂漠を愛する。

第一回の渡米の苦学時代にも、彼はユタ州の砂漠に心を慰められたが、二十五年を経て、日米親善使節として使いした時も、砂漠を慕うて百里、二百里を遠しとせず訪ねて行った。

砂漠

—わが隠場—

二十里

五十里

百里

二百里

走れど

走れど

水気もなく

セーチブラッシュのみ

生ひ繁る

北米の砂漠

世に背き

砂漠を愛する心を

いつの日にか 得し

人為を離れ

天界に

岩石に

雲に 野獣に

こよなき よき友を

発見する

自然人よ

ニューヨークよりも

シカゴよりも

神の作りし

砂漠こそ

わがよき友なれ

岩(1字不明) 岩石よ

砂漠の岩よ

風化に 水化に

溶触に委せて

すたれ行く

その姿に

また得も云へぬ

ながめを発見する 私の心—

自然人には

千里の砂漠も

淋しく見えず

太陽に 曝されて

赤色に 変化する 赤土も

また 自然のままに

却って なつかしく美し

夏日

暑ければ 猶よく

冬日

寒ければ 猶よし

大自然に

刃むかひもせず

自然のままに

流れ行く

その心持

いと、静かにしてよし

雲は房々として

大空に遊び

きれぎれの断層は

砂漠に

模様をおく

億年の歴史

地球の意匠

砂漠こそ

わが隠れ場なれ

—1941・7・10

詩人にとって、砂漠は大都会よりも慕わしく、人よりも懐かしい。砂漠はいつも、詩人の母のように、やさしく抱いてくれる。砂漠は詩人の隠れ場である。

彼は、日米戦争回避の祈りの聞かれぬのを悲しんで、忙しい講演旅行のみちすがら、この隠れ場へ来て、神に訴え、神に泣き、神に挑んだのであろう。

億年の歴史を語る砂漠の詩は、読者の心に力強く迫って来る。

賀川は砂漠のほか、ミシシッピの流れを中心とした大平原の美しさをあこがれて、暇あれば平原に立つことを好んだ。

平原はつづく

平原はつづく

北米の平原はつづく

北に行き

南に行き

東に西に

ミシシッピの流域を

ミズリー州に

カンサスに

イリノイに

インディアナに

オハイオに

ネブラスカに

テキサスに

テンネツシーに

アイオアに

ミネソタに

行けども 行けども

つきざるは平原

どの川も

どの谷も

みな ミシシッピ河を

さして流れ下る

どの市も どの村も

ミシシッピの支流の

水のために

生命をつづけてゐる

おお 平原よ

海のやうにうねりを続け

波のやうな小山が

のんびりと 天空と接吻する

北米の平原よ

歴史もなく

伝統もなく

氷河の跡と

去年の秋の玉蜀黍の株だけが

唯一の歴史である

平原の冬に

今年はいつにない

大雪が降って

その氷河期の跡も

玉蜀黍の切株も

みな 雪の下に

隠れた 北米の平原よ

のんびりと

暖房器の熱を高めて

南窓にジレニアムの鉢を

並べる呑気な田舎町の宿屋

平和と平原が

握手し

豚は小屋に居睡り

名も知らぬ小鳥は

口笛をふくやうな調で

軒先に歌ひ

雪かきのシャベルが

大陸を貫通する三十号の大路に

つづけさまに鳴つてゐる

静に 静に

私は考へこんで

地平線から昇る朝の太陽に

挨拶をする

日本の動揺に

抑へ切れざる不安が

私を占領するけれども

赤き太陽は
凡てを超越するかの如く
櫛の木立の向ふより
静に
今日一日の旅を
北米の平原の上に
続けるつもりか
音もたてずに
立ちのぼる

平和な農村を描いて大衆に親しまれるミレーも、地平線を愛し、好んで画面の上方に一筋の地平線を力強く引いたが、それはミレーの永遠への思慕を表現したものと受け取れる。この点、賀川の詩情とも一脈通づるものがあるのではあるまいか。

ミッション・インの基督像

こうした自然美にも増して彼を喜ばせたものは、宗教的雰囲気富んだミッション・イン(ホテル)の一夜の印象であった。

ミッション・インはカリフォルニア州のリバー・サイドにあって、スペイン風の瀟洒な建物も好ましいが、壁面をくり抜いて、基督の像を安置してある部屋の雰囲気だ。

旅人の心はこれにより浄められ、やわらげられ且つ慰められる。旅人は、母の膝に抱かれて眠るみどり児のような、あえあかなる思いで安らかな一夜の憩いを、その像の下でとるのであった。

そして彼の寝顔を、基督の像は夜もすがら眺めおろすのである。賀川の詩はその心持ちをしみじみとうたい出している。

それではイエス様 おやすみ！

—キリストの像に—

壁間の

片隅に立つ

キリストの像の

優しく立つことよ！

今宵

私の 枕辺を

守り給へ！

青石の

うつろの中に、

据えられた

小さき

キリストの像よ！

私は

室(へや)に這入った

最初から

あなたを

見上げてみます！

トガを

まくしあげた

あなたが、

今にも

そのうつろから

出て来られる

ようで、

うれしくて なりませぬ。

私も

こんな お姿が

一つ 欲しいと

思ひます。

イエス様、

私はこれから、風呂に

這入つて寝ます。

風呂に

這入る間

わかれるのが

惜しいように

思ひます！

では イエスさま、

また明日の朝

お目にかかりませう

——

風呂から出て来ました。

イエス様、

私は 鏡台の前に

立つて

また、

あなたのお姿を

顧みます。

それでは

イエス様

おやすみ！

第10章 世界を家として(欧州及び豪州)

平和の国デンマーク讃歌

賀川は昭和10年末、協同組合運動指導のため4回目の渡米をしたが、その帰途、ノルウェーのオスロで開かれた世界日曜学校大会で講演のためヨーロッパに渡った。その時の作詩数編が『永遠の乳房』に収められている。

欧州は、しかしこの詩人を憂鬱にただけであった。ただ平和の国デンマークの農村だけが彼を喜ばせた。そこには全国民の9割8分を占めるキリスト教信仰と、国際的連絡をもった農業協同組合運動とが目覚ましく活動していたからである。

彼はデンマークの雲雀に事寄せて、デンマークを礼賛し、同時にヨーロッパの墮落した文明とを対照し、欧米の憂鬱を払拭するものはイエスの愛のみだとしている。

詩に賀川らしい哀歎の熱情の読み取れる秀作である。

デンマークの雲雀に與ふ

東の窓が白む。

北緯五十五度の五月の朝は、

真青に 澄んで、

ガラス張の窓より、

天空が見える。

朝早くより、

雲雀が鳴くよ、

ほがらかに美しく、

デンマークの雲雀が鳴く。

雲雀よ、雲雀よ、

私は おまえを羨む、

私も おまえのように、

暁の来ぬ前に、

碧空を飛びたい、

アウロラの先駆者が、

未だ 目醒めざる中に、

おまへの如く 目醒めたい。

小さい羽根をふるはせて、

おまへは カーぱいに鳴いてゐる。

そんな真似を私もしたい、

誰れも きか無くとも、

誰れも邪魔するものなき碧空に上り、

カー杯に 大きな聲が出してみたい。

あゝ 砂丘打続く、

デンマーク西海岸に、

おまえは 巴里できく、

オペラ・シンガーよりも美しい聲で、

鳴くではないか—

おまへの歓喜の聲こそ、

芸術のための芸術とでも、

云ふべきなのだろう。

欧州を彷徨し—

求むる心に満されざる思ひ募り、

寂寥と胸底の喚叫に、

私の魂の喉がはりさけさうだ。

私にも雲雀の喉が欲しい。

私は私の魂の雲雀になった。

私の魂の碧空に

私は一人旅をする。

羽根はないが 私は飛ぶ。

欧州の大地に 絶望して、

私は一直線に上に逃避する。

あゝ さうだった、

欧州の大地に 私は絶望して、

私は デンマークに雲雀の聲を聞きに来た。

あゝ 凡てがいたましき輪廻だ。

日の下に 一つとして新しいものはない。

魂の噴火が休止した日に、

凡てのものは輪廻を始める。

全くの絶望だ。

これ位なら 私は欧州を、

見なかったが よかったにと思ふ。

それで 私は雲雀として碧空に鳴くのだ。

私の喚叫は絶望の喚叫だ。

救われざる人生の喚叫だ。

ナザレのイエス以来一九〇〇年を経て、

猶 相戦ふ人生の醜悪に対する

絶望の喚叫だ。

雲雀よ 雲雀よ！

私の魂の雲雀よ！

おまへの姿は 私のかすんだ眼には

見えない！

おまへは あまりに悲しい魂だ！

おまへの運命は、

一人ぼっちで 天空に鳴くにある！

私はおまへの正体を見定めようと、

焦点の結ばない眼を無理に努力する。

姿は見えないが鳴き声だけは聞こえる。

その聲は銀鈴を振るようだ。

そんなに澄み切った聲で泣かないでくれ！

東の子が悲しくなる。

私は 今度の旅で 努めて、

泣かないつもりで出たのだ。

それを 欧州と米国が

私を絶望させ、

私は魂いの中に喚叫を、

続けて来た。

私は 私自らを、

難船したハムレットのように、

デンマークの砂丘の蔭に、

身を寄せた。

そして 私の魂の雲雀をして、

心一杯に 鳴かせてゐる。

一生懸命に泣けよ、

雲雀よ—私のために鳴いてくれ、

私は 一人ぼっちの魂の彷徨者だ。

誰一人慰めてくれるものが無い。

美人も、英雄も、淫売婦も、

美術品も私を慰めない。

私は 現代の欧州に凡て慰めらる可き、

ものを発見しない。

欧州は百のキリストを殺し

萬の十字架をたて

偽ってキリスト教の仮面をかぶってゐる。

さうだ・・・慰めてくれるのは

千九百年前に生きてゐた大エイエスのみだ。

さう私の云ふのは

彼のみが愛を知つてゐたからだ。

私は外側を求めて居ない

内側を求めてゐる。

どうして人間が、

もう少し多く愛すべきかを

求めてゐる。

そして欧州に失望した。

その動かす可からざる宿命に

私は泣く。

私は雲雀として天空に戦く。

デンマークの雲雀よ、

心一杯に泣け。

東の子はおまへの下で

泣きつづけてゐる。

雲雀よ 叫べ！

喉のはりさけた時に

落ちて来い。

私も 人類の—その愛し得ざる

悲しき宿命に就て

泣くだけ泣かう。

そして泣き疲れた日に

天空から落ちよう。

あゝ 曙の白まざる光に

デンマークの雲雀は

碧空を横切つて鳴く——

曙の遅きを泣いてゐるのか？

孤独の寂寥に泣いてゐるのか？

東の子は 愛し得ぬ

人類の宿命に泣いてゐる——

聖地巡礼の歌

賀川はヨーロッパの旅を了えて聖地巡礼の途に上った。二千年の昔、イエス・キリストの足跡を辿って行く巡礼で、賀川のうちならず心の鐘がいくつかの詩になった。その中から「シロアムの池に 眼を洗ふもの」の一編を掲げる。

シロアムの池に 眼を洗ふもの

シロアムの池に

眼を洗ふものは

誰だ？

そは 旧きユダヤの盲(めくら)ではなく

東の国から来た、

五尺二寸の小男ではないか？

彼こそ 光を欲してゐたのだ。

長年の眼病に、

彼は 癒されんことを待つてゐた。

そして 今、シロアムに来て、

主が古き昔 宣ひし如く、

眼を洗つてゐるのだ。

二三十の階段を降りて、

小川のようになった流れに屈み、

彼は イエスの昔を思ひ出して、

理屈もなく

湧き出づる泉に、眼を浸す。

見たいのは肉眼ばかりではない。

宇宙の奥底まで見たい、

地殻の中側(うちがわ)に何があるか？

物質の不滅は何を意味するか？

光が欲しい——光が——

靈魂につき 生命につき、

価値と実在の關係に就いて光が欲しい。

男女の關係に就いて光が欲しい。

愛したい、愛せない。

それに就いて光が欲しい。

何故 神は人間の生命を

五十年に限つたか

それに就いても光が欲しい。

我等は実に見えなんことを願ふ。

今日の凡ての人間の努力は

無ではないか？

それに就いても光が欲しい。

何故に我等は食ひ、

何故に我等は恋し、

我等は嫉妬するか？

我等はいと小さく

宇宙はそんなに奥深い。

我等は 永遠の解かざる謎の前に座る。

願くは神 我等に 光を与え給へ。

このほかに「あゝエルサレムよ」と題し「魂を干物として扱う」エルサレムを罵り、「神よエルサレムを興し給へ」と題し、エルサレムをユダヤ人に帰し、ユダヤ人のために興し給えと祈り、「カペナウムにて」ではガリラヤの海に顔を浸してイエスの昔を偲ぶ詩がある。

ヒリッピンと印度にて

欧州に旅した前年の昭和9年2月、賀川はヒリッピン伝道の旅に上った。そして此処では蘭の花とのかげに這う蛇ととかげをうたっている。

蘭の咲く庭

ここ熱帯の小蔭

蘭の花は咲き乱る

静視して六弁の花を

見守れば

たえてくすしき

花の魅力ぞ感ぜらるる

蛇と蜥蜴(とかげ)と毒虫の上に

美しき蘭は木蔭よりのぞく

何を見入るか

小さきものよ——

何を狙ふか？

美しきものよ——静かに、静かに

——1934・2・14 フィリッピン国バキオにて

また昭和十三年十一月には、世界宣教大会に出席のため印度に使いしたが、その時の作には、別項「愛国者の歌」の中に掲げた「ガンジスのほとり」に釈尊を偲んだ詩のほか、ラヴキ河のほとりでの、短いが深沈な愛韻のこもる一篇がある。

天空と黒土を縫合せて

——印度ラヴキ河のほとりにて——

ラヴキは天より

河は——天より——

地平線の彼方より

海潮の如く流れてくるよ

ヒマラヤより

砂漠を越えて

神よ 印度を祝福し給へ

この広漠たる印度を

冬枯れに

減水し居れど

水浴する行者あり

五河の水

枯れたれど

靈魂の泉枯れず

おお 大能者よ 印度を

祝福し給へ

故国を愛するが故に

罵られるれど

キリストの為に

凡てを忍ぶ

放浪者には

自然のみ

最愛の友たり

水よ 水よ

ラヴキの水よ

地上を浄めよ！

アレキサンデルの血と

モグル王朝の血と イギリスの血・・・

そして罪と穢れに そむ

地上の凡ての輩らの罪を

きよめよ——

ラヴキは天より

地上線の彼處より

ヒマラヤより

砂漠を越えて

天空と黒土を

縫ひ合せて

流れてくるよ

おおラヴキよ

私の靈魂にも

流れ込めよ

——1939・1・28

豪州とニュージーランド

また、欧州及び聖地巡礼を試みる半年前、すなわち昭和十年二月には、講演のため豪州に使いし、ニュージーランドにも立ち寄ったが、ここでも数編の詩がよまれた。

豪州よ 豪州よ

広いな 広いな

アウストラリアの土地は一

海のやうに

地平線は

真直に 拡がり

大空は板のやうに

大地に接吻する

山も 波の如くうねり

平原の一部を形成する

山は海だ

平原は 山の連続だ

いや山の連続が平原だ

凡てが地平線にまとまる

アウストリアは

土地の海だ

羊はその浮遊動物(プランクトン)だ

おおアウストリア!

おおアウストリア!

帰伏する山を波だとし、その山の連続を平原だとする。そしてアウストリアの大地の海の上に羊が浮遊しているという。イザヤ書かヨブ記を読むような思いがする。スケールの大きな詩だ。

メルボルンにて

八階の南向の室に

私は静かに

瞑想する

宇宙の可能性につき

光線の心持よさにと

靈魂のすがすがしさに就いて

豪州は太陽の前に瞬きし

天壤の小動物は

背伸びする

香と——色彩と——

線と運動の凡てを以て

絶対者を讃美せよ

小さき人間さへ

望を捨てざるものを——

私が豪州にても

私の神を讃美する

異国の空に

私の神の領域を発見する

ニュージーランドでは十九人の酋長たちから、珍石で作った石刀を贈られて、彼は心から喜んだ。なぜなら、彼の岩石に関しては特に関心を持っていたからである。

彼は後段で記すように、此処で珍しい、岩石に関した幾首かの短歌を作ったが、この石刀を贈られた夕暮れの感激を次のように、短く歌っている。

タポ(Tapau)の夕暮

—十九人の酋長より珍石で作った石刀を私が贈呈せられた日—

湖面は光つてゐた

Pa(社)は見詰めてゐた
群衆の叫びは鎮まつた
灰色の室は動かなかつた
太平洋を横切つて
ニュージーランドに来た
ポリネシアンは
美しい聲をあげて歌つた
夕暮に群衆は
一人去り二人去り
私は湖面をながめて
静に立ちすくんだ
ニュージーランドの
秋の夕暮
もやの多い晩であつた
私は宇宙の不思議を
感じながら
冬でも枯れぬ
常緑樹の森に視線をうつした

アメリカで見た支那婦人の横顔

静であったよ

颱風の中心の 其の如く

肉食者の顔の中に

何といふ落付いた

顔だらう

それは

東洋の

落付いた

競はざる

顔であつた――

平面的ではあつたが

表情の多い

心理的なものであつた

美は

一つの標準で

律し得ない

東洋の美には

東洋の美があり

西洋の美には

西洋のそれがある

然し

神を知る者の

顔には

神の輝きがある

神が

顔を通して輝き給ふのだ

神の輝きのない娼婦の顔に何の美があろうぞ。それはただ美の祭壇のけがれでしかない。

第11章 美の祭壇に歌う

祭壇の扉を開くもの

美しいものを美しいと見るのは、肉眼ではなくて心眼の力である。美とは心眼の網膜に映じ、そこで再構成されたものである。

芭蕉が「見るところ花に非ずということなく、思うところ月にあらずということなし」といったのも、この心の網膜の再構成力を指していったものだ。

美を美とする心眼の網膜を所有する人にして、はじめて見る處みな花となり、思うものみな月となるのである。しかも、世上には、見れども花たることを解せず、思うても月たることを識別できない、美の色盲症患者の何と多いことよ。

賀川は「美は祭壇で、これに精進する者のみにその祭壇の扉は開かれる」といい、また「美は神の至聖所に捧げられた最後の燈だ」ともいっている。

つまり、美は神からの賜物に外ならない。この神の賜物は決して意味なくして与えられるものではない。そしてその意味は、これを発見する者のみの上に輝くのである。

神の賜う美にはむだはない。「美は、必需品である」——賀川はそういっている。

美はみな神の深き聖旨に出て、何かしらの必要に出ていないものはないのだ。

彼の「美よ、必要なる美よ」と題する詩は、その神より出ずる美を、こう歌っている。

美よ 必要なる美よ

赤ん坊の皮膚を

絹より美しくしたのは

何の為めぞ

そは必要の為めでは無かったか？

乙女を花の如く飾つたのは

何の為めぞ

そは 人類保存の

必要の為めではなかったか？

生活を美しくするのは

何の為めぞ

そは生命を尊重する

為めでは無いか？

全能者は 自然を

美しく創造した

これも亦

宇宙を住み心地よくする

為めでは無かったか？

美の為めの美を

私に語るな

美はそんな浮調子なものではない

美は必要の為め産れ

美は生活の原則として与えられたのだ

必要ならざる美は

美の粕だ！

労働は美だ！

労働する女ほど美しいものは無い

青ざめたる娼婦に

何の美があらう？

美は宮殿より逃げ去り

農夫の庭に佇む

美は本然より生れ

本然の世界に

逃避する

岩に 雑草に

星に 山脈に

原子に 光に

美が宇宙の本然の

姿を以つて示顯するは何の故か！

必要なる世界に

美は自らを顯現し

遊墮なる有閑階級より美は

逃げ去る

お白粉(しろい)より皮膚は美しく

口紅より唇は更に美しい

爪の血色は

爪紅より幾層倍も

美しい

邪淫なる女に醜き

立黻現れ

美しき心の持主は

醜婦と云へども 美はしき

永遠の微笑を持つ

美は必要なる

日用必需品である

腐敗に美なく

不道德と美は両立しない

自由ある處に美現れ

良心ある處に美は必ず

姿を現す

簡素は美であり

贅沢は美を殺す

美は能率を増し

衛生を保ち

無秩序を排除する

秩序無き處に美は出現しない

美は前進を要求し

発明を挑発する

美は選択し

美は保有を促す

美は修繕を要求し

美は全能者に我等を繋ぐ

必要なるために

美を友とすれば

芋畑にも美は待ち受け

工場の動力室にも

美は隠れてゐる

美を探ねて

真を発見し

美しき結晶体を探つて

宇宙の本質に触れよ

真理にして美ならざるなく

善にして美を伴はざる者はない

美を求めて

善を離れる者は

信号を見ずして

自動車を走らすに等しい

美は衝動ではあるが

善なる信号を無視して

運転すべきでない

善を離れた美は

必ず顛覆する

それは必然的に

醜き結果に導く

不道徳に決して

平和なる美はない

狡猾なる蛇に

醜き体軀の不調和あり

柔和なる鳩に

天与の美備はる

必要の為に美に生きよ

必要の中に美を守れ

簡素は美であり

節約は美の母である

力学なき處に美は無く

老衰と共に

美は去る

永遠に若かれ

然らば

永遠の美は

汝を祝福しよう

心の若さに

美は平行し

美は生活力の

力量に正比例する

必要の為に美に生きよ

美の行動に真理を守れ

1941・8・7

美の黄金律

美は厳粛なる戒律を要求する。美の黄金律にはづれたものは、如何に粉飾を施しても、真の美よりは遥かに遠い。

自然の美は、厳粛な黄金律に従った美である。寒さに耐え抜く努力なくしては、どの花も美しく開花することはない。この努力を経過して、はじめて新しき美の創造が許される。

街頭を練り歩く娼婦の美は、黄金律にはづれているから真の美から遠い。しかし、田園に菅笠をかぶって田の草を取る娘は、脂粉のかげさえなくとも、黄金律に叶うた美がある。

賀川は娘たちに、この事を力強くうたっている。

あゝ娘等は歌ふ

あゝ 娘等は歌ふ！

我は 歌もなく、

焦土に さまよひつつあるひまに、

都の娘は 歌ひつつあり！

彼女は綺羅を飾り

頬に紅をぬり、

その若き日を歌ふ！

喉を自慢するものあり、

生命の感激もなく、

ただ 美しき聲を誇る鶯よ 小鳥よ——

われ等の歌は 今少し大きく、

今少し 悲痛なり。

そは張り上げられたる聲を

ひくめ能わざる感激の聲ぞ——

ああ 低くおちた、

あの梅毒の聲を持つ女の聲をとめてくれ！

それは私の耳のけがれよ、

管弦樂の凡てを止めよ、

生命の神聖は

彼等の為めに けがさる！

沈黙は更に 彼等の叫びより、

音樂的なり——

沈黙をして わが音樂ならしめよ！

日本に

涙ある日に——嘆きの日に。

われは歌ひ得ず

楽しみ得ず——

われは万斛の涙もて、

ただ わが国の、

低められし日に もださん——

娘よ わがために

魂の歌を唱え——

救のために

黎明を呼びさませ——

あゝ 彼女は媚びを民衆に賣る！

日本の闇は深し——明るき日に。

彼等は白日の闇に、

迷ふ！

黎明は何時ぞ——わが魂の為に？

われは わが国土の

前途を憂ふ——友よ——

梅毒の女の聲！ 況や梅毒の女の、あくどき扮装に何の美があり得よう。東洋人でありながら、西洋人を真似る女の愚をたしなめて、彼は東洋人の美しさをこう歌っている。

第12章 都市風物詩

都会の中の自然美

賀川はまた、高度に文化の発達した都市の人間美に強く反発して、ニューヨークの摩天楼を墓石の羅列にすぎぬと評し、さらに「土くれに等しきニューヨーク」といい、「狂人の都」「毒薬と天の使いの錯綜せる街」といつている。

しかし、そうだからといって、彼が都市に美がないといっているのではない。

彼は都市の人工美を讃美することを拒むが、都市に見出される自然美は、決して忌避しているのではない。彼は瓦の砂漠の大阪に、小さき町に立ち並ぶ店に、夏の日盛りをカタコトと音させて行く定済屋に、いいや、街のぬかるみにさえ、いい知れぬ愛着を覚えて、彼の感情は動くのであった。

彼の都市風物詩には、詩人の強い切ないものが見出される。

瓦の砂漠大阪

大阪の朝(あした)

瓦屋根に！

美しく光る

朝(あした)の光——

電線を通して

黒ずんだ空、

静かに

明け行く・・・

大阪の朝！

近所の

小学校に、

子供の

わめきの聲が

きこえる。

町に行く

下駄の音は、

寒空に冴えて

カラン カラン と鳴る。

高見から見ると、

瓦の砂漠のやうに見える。

大阪に

私は、マホメット教徒のやうに、

朝の礼拝を

神に捧げよう、

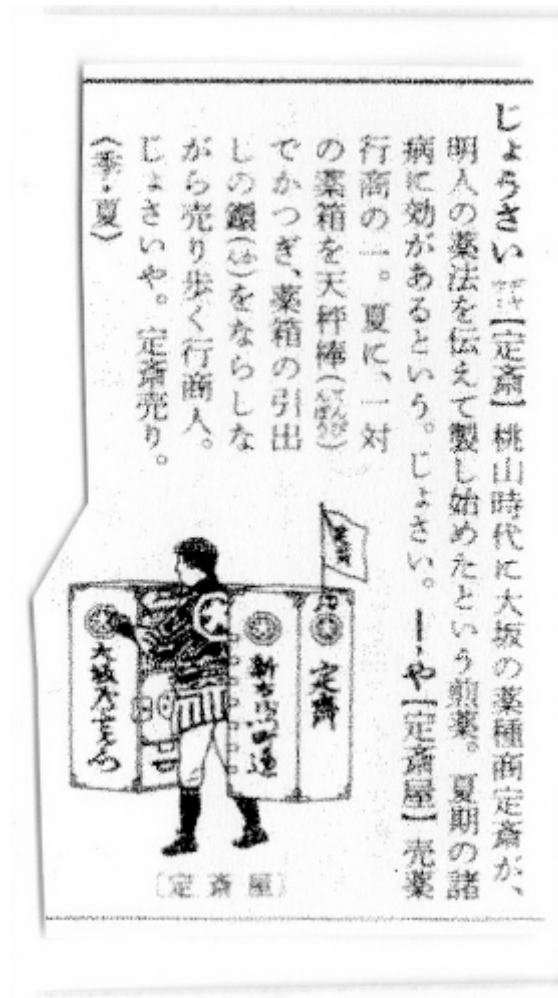
あゝ、瓦の砂漠！

瓦の砂漠！

瓦の砂漠の上に

太陽が昇る・・・。

補記 上の文章の中に「定濟屋」という言葉が登場します。「広辞苑」で探しましたら、次のような絵入りの説明がありました。この章で、このタイトルの歌が出てきますので、ご参考までに。



賀川の最初の散文詩集『地殻を破って』をひもとくなら、そこには大阪をはじめ、神戸、名古屋等の都市美をうたった幾つかの彼の秀れた散文詩が、読者の心に、在りし日の、これ等の都市の姿を再現してくれるであろう。

都市の街頭風景のスナップは、貧民窟の詩の中にも出ていたが、さらにその後の小品の二三を拾って見よう。

小さい町の小さい店屋

なつかしきは

小さき町の

雑貨屋

くすりや

せとものや

凡てを越えて

うれしきは

なんでも賣つてゐる

荒物屋に八百屋——

ひばしにざるに

弁当箱——

私の好きな

もちやく金網

箸箱、下駄箱

玉すだれ

かさに提灯

バケツに手桶

人類福祉の源は

器具と道具の

発明にある

その結晶はわが町の

わが荒物屋に

集つてゐる

八百屋は

野原の結晶体

天と大地の両腕が

街路にニュツと出るところ

茄子の紫

トマトの真紅

白瓜、青豌豆

なんきんかぼちや

乙女のキスを偲ばせる

桜ん坊の出る頃は

夏もそろそろ近づくよ——

あゝ恋しい

恋しい

小さい町の

小さい小さい

店々のぞき

人間社会の

運命しのび

流るゝ小川の

小橋に立ちて

古き町をば

偲ぶ日よ

——8・10 御殿場にて——

定濟屋の筆筒

コトカタ、コトカタ

バタバタ、バタバタ、

ほがらかな 秋の空に、

彼の歩みを彫り行く

定濟屋の筆筒の

街を行く！

再び病む日の 長いだけ、

細り行く自分を眺め、

他愛もなく ひとり泣く 再び病む日。

一年余日 働いた、

その報償に 病を得た！

コトカタ コトカタ、

バタバタ バタバタ、

弾力性ある 竿が、
担はれ歩む度毎に振動し
鉄のひきてが箆筒のひき出しに、
はねかえる音！
コトカタ バタバタ、
バラックの病床に
枕を低くして 寝てみると
裏筋より 響きくる
定濟屋の
箆筒のひびき！
急ぎも得ず、
遅れも得ず、
かけることも出来ず 飛び上がりも得ず、
重ければ踊らず 軽ければ打たず、
弾力ある竿のしわる儘に、
はね上る鉄のひきての
鳴りをどる儘に、
歩けば 踊り、
踊れば鳴る、
その箆筒のひびきに、
せきたてられて、

定濟屋は重荷を担ふ！

ほがらかなる秋の朝に、

定濟屋の箏箏はなるよ！

そを ほこりがに、

彼は単調なるリズムを立てて、

路地を出て行く！

コトカタ コトカタ、

バタバタ バタバタ、

目をとちて忍べば、

担へる人の 汗に泌む姿の見ゆ、

呼びたくも、

聲は出ず、

灼熱の暑き日に、

彼の叫ぶべき喉笛の代りに、

箏箏のひきては、

重荷の上に踊りつづけて、

コトカタ カトカタ、

バタバタ バタバタと、

拍子面白く 跳れば、

彼もその拍子につれられて、

大名の如く、

悠然として 大道に、

鐵片の踊の歩をきざむ！

コトカタ コトカタ、

バタバタ バタバタ、

秋の朝 定濟屋の筆筒ぞ、

街を歩く！

人生の重荷を背負はせられ、

鐵引手の踊る儘に。

(本所松倉町のバラックに病む日)

定濟屋の、足どりが目に見え、カタコトという引出しの音が耳にひびく思いがする。

泥濘(ぬかるみ)

むかるい町を

とぼとぼ

私は 歩く。

先皮のない

くりくりする

高下駄で。

足もとに

自然、

注意する。

土の色、

雨の跡、

ぬかるみの色！

轍(わだち)の跡

靴跡、蜜柑の皮、

赤い広告の紙、すべった跡。

また、その上を

小僧、女

口をあけた男が通る。

辻のぬかるみに

巡査が・・・その脇を

人力車が走る。

水溜に

家影が

うつる。

また、

下駄が、

くりくりする。

労働者、生活詩

嘗て煽動詩人、労働詩人といわれた賀川の詩の中には、労働をたたえた詩が多いが、その中でも、最も詩情の豊かに出ているのは、彼が製鉄所で有名な労働都市九州若松で、全市響を聞きつつうんだ次の詩であろう。

これは、直接労働をよんだものではないが、労働者の生活の雰囲気をつたったもので、都市風物詩の詩というよりは、労働者生活詩といたい佳作である。

全市響

膳の上に

箸をおいて

私はきく

若松市の 全市響を。

渡しを越えて

戸畑の笛もなる、

低い ベース

高い アルト

鳴るよ！

北九州の全市響が、

生活の旋歌に、

空を震はして 鳴る！

『午後六時の 全市響』が

障子をひびらせて鳴る。

『あれを聞くと

私は 身が踊る』と

口の中に呟く。

職工は 工場から

飛び出してくるであろう！

妻子は 身体(からだ)ををどらせて

夫と親の家に 帰ってくるのを

待つて居よう。

労働を終へた そのうれしさに、

人間の体は震へ上るよ、

働くことの うれしさに

空も 地も 彼を

乗せて震ひ上るよ！

争闘も、憎しみも、悲哀も、

何にもかも凡てを忘れて

労働者は

働きの うれしさを感謝する！

雨のふりつづける

その中に

ビショリビショリと

彼等は ぬかるみの中を

家路に 急ぐ、

全市響よ！ 全市響よ！

今日も 労働者は

祝福された そのうれしさに、

烟筒(えんとつ)も、

煉瓦塀も、

コークスの山も、

灰色の土も、

凡てが、交響楽の中に

溶け入るかの如く

全市響が ひびく

あれは 笛が鳴って居るのぢやないのだ！

烟筒と

工場と、

全市の屋根と、

いや都会全部が

生の歓喜に 溶け入る

讚美歌だ！

歓喜の聲をあげよ

都会よ、市よ！

実在することのよろこびと、

走ることのよろこびと、
急行列車と自動車と、
スチーム・タアヴキンとデーゼルの
よろこびを歌え！
大八車と、馬力車と、
汽船の笛と、屋根の上に落つる
雨の音と、
凡てが溶け合って、
都の音を作る
そして
その上に
全市の生が
全市響として
爆発する！
全市に住む、
労働者が叫ぶ代りに
全市の工場の笛が
今 夕の讚美歌に和する。
アレ！
全市響がまだ——
続いて居る——

アルト・テナ・ベース、

大洋の響のやうな

聲もある！

まだ、全市響がひびく！

全市響！

全市響！

(1922・2・7 若松市にて)

第13章 熱涙哀歌

少年の日の涙

賀川豊彦は悲しみの子として成長した。五歳の時、父母と死別して、義母—父の正妻—のもとに引きとられ、さびしい少年の日を過ごした。その上、病身で、十幾歳にして早くも結核病の萌しがあり、多感の少年の心は閉ざされがちであった。

こんなこともあった。或る日、宣教師マヤスのもとに勉強に来ているうち、賀川は急にさびしくなって、ひとり泣きぬれていた。それを見て、マヤスは、黙って彼を戸外へ連れ出した。外は黄昏で、夕日が西の空をあかね色に染めていた。マヤスはやさしく彼の肩をたたいて、そして言った。「賀川さん、夕日で涙をかわしましょう」と。マヤスはこの涙の少年を心底から愛していたのである。そしてその愛は終生変わらなかった。

人間苦と社会苦の涙

マヤスのやさしい愛情によって、しかし、彼が年長じて、神と人にとに仕えるため、貧民窟や社会運動の渦巻の中に身を挺するようになって後の涙は、夕日もこれを蒸発せしめる力をもたなかった。

「…たじろぐ足に 貧民窟の隅で泣かねばならぬ実在として 私は造られた。

私は何度社会苦に煩悶して自殺しやうとしたか知れぬ。神がもし 私を感受性の人間に作ら無かったなら こんな苦悩は無いであろうが、眼を涙壺のやうにして、貧民窟の路地を嘆きつつ歩ますやうに捕へ給ふた神は、自殺したつもりで 私を泥溝の中へ 叩き込みなさるのである。

私はひこづられて行かう。ただもう贖罪者イエスの十字架を負せられて 世界の嘲罵と怒号の中を 沈黙のまま 静かにカルヴァアリーまで歩まう。

神が 私を見放すまで 私はこの貧民窟に仕へやう。私の涙を笑ってくれるな、人よ。私の捧ぐ可き祈りは 私が人に見せない涙にあるのだ。」(『涙の二等分』序)

賀川の涙は決してセンチなものではなく、人間苦と社会苦とに流す涙なのである。ハンカチで拭えるピンク色の涙ではなく、神以外の誰も、拭うすべを知らぬ真紅の涙なのである。

エレミヤ哀歌

賀川は迷える子羊のために涙をこぼした。エレミヤの哀歌にもまさる数多くの哀歌がこの預言者の口から珠玉のようにうたわれる。

哀歌

迷ひ行く、

子羊を見て下さい！

跛(ちんば)の

牧者(ひつじかひ)を見て下さい！

帰りも出来ず、

追付も得せず、

獅子の住む

荒野に行悩んで居る。

雨——風

秋の空に

涙を貯へた革袋を肩に打掛け

嘆きに飽いて

杖がしら 抱く 悲しみの人

髪かきむしり、

聲なき小石にかぢりつき

あゝ主よと呼ぶ——あてもなき祈り

胸の 哀歌に

空は震ひ、

しとしと

雨は降る

あとも、さきも、

なにもわからぬ 盲人(めくら)の、

跛(ちんば)の牧者(ひつじかひ)の上に！

流すのか 漂はすのか、

それもわからないで 降りしきる細雨。

小さき胸のゲッセマネ！

神よ 子羊はどうなるのですか？

賀川は人情の冷たさを「氷玉のよう」と評し、「たましいの旱魃」と嘆いているが、ただに一般人のみならず、世の宗教家までが、キリストの贖罪愛を忘れて、ただドグマにのみ時を移しているのを見て、愛の結氷が教会内にまで及んでいると嘆いているのである。

心の底の結氷

云ひ知れぬ 悲哀よ

心の底の

凡てを神に押しついで

苦しめる者の
指一つだに
持ちあげようもしない
多くの宗教家に
あいさうがつきたよ
民衆は嘆き
飢民は飢えてゐるのに
ただドグマにのみ
時をつひやす
熱帯の年の暮よ
師走に蛍とび
蝉はなく
あゝ 心の底の
結氷に
私の魂は戦慄するよ

これは昭和十四年之暮れ、協同組合指導のため、アメリカ各地を巡回した時の作であるが、民衆の嘆きをよそに、ドグマのみを説く心の結氷した宗教家は、アメリカのみに限ったことはないであろう。寸鉄胸を刺す思いがする。

涙にうつる希望の虹

しかし、賀川は望みを失っては居ない。絶望の淵にこそ、生命の芽生えがあるからである。

絶望の淵より

悲しみの井戸には 汲んでも底がない。

狂ひ死にするものの嘆きを思ふと、

天を呪ひたくなる。

が、起ち上りも得ないで、

打倒れたる絶望の淵にこそ、

新しき生命の 芽生もあれ！

立ち上がれよ、絶望の魂よ！

生命のある間、

燃え尽すが善い！

涙にも虹ぞ映る。

困苦の中にも聖劇はある。

いざ立て、絶望の魂よ！

一步前へね、一步前へ！

賀川の詩はみな、彼の涙で書かれたといつてよかろう。涙の詩といつても、センチメンタルな少女詩や、ラジオがどなり立てる亡国調の湯の町エレジーのたぐいとは趣きを異にし、それは預言者の涙の詩である。

彼は神に向かって、何故自分を涙の壺として造り給いしやと、神になじっているのである。

第14章 祈りの歌

涙の人・賀川は同時に祈りの人である。彼は朝祈り、夕に祈り、月夜に祈る。いいや、白昼の急行列車の中でも、目を見開いたまま祈るのである。

月夜の祈り

月の美しい晩であつたよ

フィラデルフィアの近郊

チエスターの神学校で

私は窓によつて祈つた

AAAの破壊された次の日

北米の民衆のために

新しき神の力が加はるために

北米民衆の霊化のために

一月の暗夜に月の照る如く

神の光の

暗き世に照り出づるやうに

森はまだ眼ざめず

鶏はまだ時を知らない

その真夜中に

窓によつて

神と私と二人で

私は祈つたよ

あゝ 人類の迷いの深いことよ

——1936・1・8

急行列車の祈

慌ただしき 駛行(しかう)の中(うち)にも

祈はある。

暴風の歩みの中に——

機械の轟きの中に——

電線の響きに——

車輪の廻転に、

神は在す。

——私の祈は そこにある——

車は走る——

野を越え 谷を渡り、

疾風の如く。

私の祈はそこにある。

私は静かに 帽子を取つて

駛行の中に在す、

神に祈る——

何人も私が祈つてゐることを知るまい。

私は目を閉ぢてもゐない、

首を垂れてもゐない、

ただ 暗黙の中に、

わが神に祈る。

颯風よりも怖ろしく、

地震よりも物凄き、

そのよろめきの中に、

わが神は 私に充ち給ふ——

僅かばかりの軌道の上に、

思ひもつかない、

不思議な力をかりて。

私の急行列車は行く——

三十哩、六十哩——

私の電車は暴風の速さを以て走る、

殆ど夢の中を走るかのやうに、

私の車は空間と距離を無視して走る、

私の電車は旋風の中を駆け廻はつてゐる……

旋風は私の頭脳の中にする

私の脳底の旋風に

私の電車は巻き上げられた。

車は私の脳底を駆け廻る

それほど たよりない

わが生存に、なほ

わが神への祈がある。

急行電車よ、行けよ、

血の色に塗られた鉄橋を越え、

青田に映る美しき空の下を行け、

松林も 雑木林も、

凡てが急行電車の

駛走に巻き込まれる。

眩(め)まぐるしい駛走に、

山も、木も、青空も凡て踊る——

——電車が止まった！

之が 私の神への祈りである——

彼はまた異国の旅の途上、アンゼラスの鐘を聞いて、巷にあふれた失業者のために祈った。

アンゼラスの鐘

鐘は 祈へと

我等を呼ぶ

たそがれに

異郷の空を貫いて

鐘は鳴る

六時の鐘が——

黄昏を前にして

一日の聖恩を

感謝すべく

鐘は鳴る 鐘は鳴る

凡てのなやみ

凡ての悲しみ

海をへだてて

起り行く 凡ての波濤

あゝ それらを越えて

祈へと

鐘は誘う

自動車、ラジオ、鐵軌

女の裾ずれ——錢を数へる音

あゝ それを越えて

たそがれの鐘が鳴る

金門湾のこなた

大学の塔の上に

ほがらかなる 鐘が鳴る

金門湾を越え

太平洋のかなたにまでも

響けよとばかり

鐘は鳴る

祈へと 祈へと

私を誘う鐘が鳴る

私は 静かに膝をかがめて

聖前に跪く……

「主よ、失業者をめぐみ給へ

神の国を地上に近づけ給へ」……

あゝ もう鐘の音がきえた

それでもまだ 魂の中に

余韻が残つてゐる

祈れ！ 祈れと ひびきつつ。

——1931・9・5、バアクレーにて

金門湾ひとつ隔てたサンフランシスコの対岸、パークレーの丘の上に建てられたカルフォルニア大学、その校庭の中央に佇立する時計店が、今もし金門湾の彼方へ沈もうとする夕陽を浴びて、細長き影を地上に落としつつ、夕べを告げるアンゼラスの鐘を響かせる。賀川は静かに頭を垂れて祈る——。ミレーの「晩鐘」を彷彿せしめる講論で深沈なる詩である。

ゲッセマネの祈り

賀川は聖地巡礼の旅に、橄欖山のほとり、ゲッセマネの園を訪うて二千年前、基督が流し給うたと同じ涙を流しつつ、世の救いを祈った。

ゲッセマネ

樹老いて

昔を告げず。

美しの門は

のぞけど、

既に閉ざされて 幾歳。

ただ 変わらざる月蔭、

シオンの山を越えて

斜に落つ。

園の主は何処ぞや？

悲しみの主は何処ぞや？

月は過ぎ、

日は急げど、

急がざる人心、
城壁のかなた、
人の子等は騒げど、
救はれざる その倦みし心—
メシヤの胸に
何事のうつりけん、
弟子を捨てて 幾十歩、
石の届くところ、
彼は跪き、
受く可き 苦き杯に就て 祈る。
『み心ならば—
父よ—この苦き杯を、
取り去り給へ—されど—
わが心の儘を、
なさんとするに非ず
み心の儘になさせ給へ』
かく 祈りし君の心、
今偲はずや、
橄欖は枯れ、
土は乾き、
園の姿変れど、

変らざる人間の醜悪の為に、

キリストの嘆き、

今もきこゆ。

此処に落ちし、

その涙 今もかはらず。

わが足元の土湿(うるお)ふ。

石の叫び 土の聲、

今猶 我はさく。

天地の主、

人の子の為に悶ゆ。

橄欖山のほとり、

ゲッセマネの園は 失せ行くとも、

いつの日か メシヤの涙の、

消ゆ可き。

悲しみの子よ 嘆け！

その聲天地に満つ。

死海のほとり、

凡てのもの 憂ひに沈む、

人の子の甦も、

人の魂に徹せざりき。

シオンに鐘は鳴れども、

人の子 未だ 救はれず。

あゝ 十字架の主よ、

君は 今も猶

此園に跪かずや

その姿 魂に見ゆ――

ユダヤの国、ゲッセマネにて(1925・6・8)

世界の平和への祈り

賀川の祈りはキリストの愛が、この混乱した現代に、もっと切実に人々の中に甦ることであった。そして、人類が国境を越え、皮膚の色の相違を忘れて、神が人類を愛した如き、人類相互に愛することであった。彼はただ泣いて祈るのであった。

悲しみの途

――ヴキア・ドドロサ――

憂ひを 含みつつ

まだ 贖ひ得る たのしみのために

十字架へ 歩みよらせ給ふキリストよ

それは あなたに 据ゑられた膳であるにしても

地上に住む 最微者をすら いつくしむ

神の如き 愛なくして 想像もし得ない

貴き出来事でした

星はうつり 日は輝きを失ふとも

増大し行く み神の愛は

キリストにのみ 吐け口を見付けたかの

感じがします

然しキリストよ

あなたが 死なれてから もう千九百年

人間はまだ 喘ぎつつ 悶えてゐます

あなたの 愛を もう少し

現実に 我等に感じ得るやうにして下さい

あゝ その日に

我等は国境と皮膚の色を忘れて

あなたの愛を讃美し得ませう

あゝ 十字架の上に

したたる あなたの愛の血潮を

もう少し 現実に感じさせて下さい。

第15章 平和の歌

大いなる思想は詩人の天職

詩は美しい言葉で表現される。しかし、美しい思想の裏付けのない詩は、どんなに美しく飾られていても、ついに「馬子の衣装」にすぎない。

韻律に乏しく、散文そのままのような詩を作ったホイットマンは、スインバーンから「どぶの中にくろんだ酔っ払いの女のように」と罵られたが、ホイットマンは「大いなる思想こそ、詩人の天職だ」と反駁して、敢えて詩法を変えようとはしなかった。

戦時中に作られた詩は、その調べも高く、駅頭でわめくに適し、人の心をいやが上にも扇動するに役立ったが、ホイットマンのいう「大いなる思想」は片てさえ見られなかった。そのため、戦争終幕と共に、黎明を迎えた魑魅魍魎のように、姿をかき消してしまった。

もちろん、戦争中も、良心を失わなかった詩人が日本に居なかったというのではない。

ただ軍部の弾圧下にあつては、時局も戦争に関する限り、いわゆる「国論」に合致しないことは一切口に出来なかったため、心ある者はこれに触れざるを賢明なりとし、平和の詩のごときは、厳たるタブーとなっていたのであった。

でも、戦争に反対し、世界平和を欣求する詩人は、ゲーテの言葉のように、「ひそかに詩神のひっそりとした森の中で」やむにやまれぬ激情を歌った。いや歌わずには居られなかった。それは詩といわんよりは熱涙にぬれた密室での祈りであった。

たとえ、ひそかな祈り、懺悔でも、自由のない戦時下においては冒険であった。虎視眈々たる検非違使らは蟻の這い出でる隙をさえ与えなかったからである。果然、彼らの異常な臭覚によって嗅ぎだされ朱房の十手を向けられた詩人があった。

世界平和運動五十年

賀川豊彦は十数才の中学生から、トルストイに私淑して、既に平和論者であった。基督教信仰に入つていよいよ拍車が増えられ、折り柄、日露両国は千才を交えたが、勇敢にも学校内で非戦論を唱え、「非国民」呼ばわりされた。

次いで神学校に進むや、そこでも非戦論を力説して、銃剣制裁をうけたこともあった。彼はまた長文の「世界平和論」を郷里の新聞に寄稿して、郷党驚かせたこともあった。いづれも日露戦争直後のことである。

賀川が社会運動と精神運動に挺身してからも、この信念は上昇するばかりで、大正十年、フランス第三教団に倣って、祈りと奉仕の団体「イエスの友会」を結成した時も、その綱領の中に「世界平和のために努力すること」の一項をはさむことを忘れなかった。

大正十四年、渡欧の際、ロンドンで、タゴール、ガンジー、アインSTEIN、ロマン・ロランらと肩を並べ、唯一人の日本人として、徴兵制度反対の宣言書に署名し、国際連盟に提出した。軍閥の目の光だしたことは当然である。

昭和六年九月、満州事変が勃発するや、賀川を委員長とする「基督者平和連盟」なるものが組織され、平和請願書を犬養首相に迫り、彼の同志高橋元一郎は荒木大将に面会を求め、また支那公使館や中国YMCAを訪問して、満州侵略の詫びを述べた。

賀川は心から世界平和を祈った。が、大勢は彼の祈りと反対の方向に進んでいった。

昭和十年十二月、彼は協同組合指導のため渡米したが、折り柄、五大海軍国のロンドン会議が開催中で、日本では会議の脱会を宣言し、軍国主義の台頭が感ぜられた。彼は平和の春のまだ遠きを知り、悲しみに閉ざされた。

春はまだ来ぬか

北米の雪に

ネブラスカの吹雪に

私の血は渴れた

腎臓は膨れ上り

喉は破れた

あゝ まだ

春は来ぬか

ミシシッピー河畔に

中西部の大平原に

瘦せ行く姿に

ほそり行く腕に

戦のつらさが感ぜられ

真夜中なの祈に

神への溜息が洩らされるよ

あゝ 春はまだ来ぬか

北米の天地に

戦はつづき

剣戟のひびき高まる

おお 勇者よ

十字架のために

骨を雪中に埋むとも

退くな 猛者よ

やがて 太陽が

黄道に帰り

水はぬるみ

たんぽぽは野路に首を出し

お前の衣の裾のほとりで

のぞくであろう

おお 雪におぢるなよ

雪橇(ゆきそり)を引き出し

飛びはねてゐる子供の如くに

お前も飛び出して行くがよい

おお 自然の子よ

太陽がお前の額に接吻し

燕がお前に南の通信を

もたらす日も近いであらう

おお 悲の子よ

吹雪に 雪崩れに

涙は結晶しても

雪どけの日に

涙もまた蒸発しよう

さらば さらば

道傍のエレムにならひて

吹雪の中に強く

立ち上る工夫を考へるがよい

おお東方の子よ

日本の若者よ--

春はそこまで来てゐる

軒先まで

ただ 解けないのは

魂の結氷だ

あゝ 北米の靈魂の結氷は

何時とけるか？

それを駒鳥に聞いて見よう

おお 待たるは

北米の魂の解氷期よ！！

北米の冬はあまりに長い！！

--1936・2・20

北米の旅に春を待つ詩人の心は、世界平和の黎明を待ち望む心と通うのだった。

地球の春はあまりに遠い彼方にあった。

賀川はアメリカからヨーロッパに渡った。その時、ヒトラーは侵略戦争の用意おさおさ怠らなく、妖雲は全ヨーロッパを覆っていた。

しかし、彼が訪れた平和の国スイスは毅然としていて、モンブランの秀峰は、平和な、やさしい視線をもって彼を迎えてくれた。

おお モン・ブラン

太陽は アルプスに照り

モン・ブランは輝く

直立一萬五千尺

白雪に包まれ

大空を抱く

おお モン・ブラン

大地のぬしよ

欧州の至高者よ

東亜の人の子は 汝にきく

何時の日に平和はくるか

欧州に

シーザーは

おまへの裾を横切り

ナポレオンは

お前の肩を越え

千年の歴史は

お前の前に開展した

そして人類は

未だ流血をつづけてゐる

白雪のモン・ブラン

永遠の山よ

大能者の名によって

おまえに語る

大空より伊太利に

独逸に、フランスに、アウストラリアに

叫べ――

争鬪の歴史は

氷河の流れにも

価ひしないと

あゝ 東亜の子は

人類の流血にうめきを高め

欧州の確執に気をにやしてゐる

不滅の山よ

大地の襞(ひだ)よ

大地の為に

我等に「神」を教へよ

碧空に輝く

モン・ブランよ、ドライの山々よ

欧州の為に

我は此山に祈る

賀川の祈りに、モン・ブランは何と答えたか。山は語らず、ただ悲しげに、おもてを雲で覆うたことであらう。

賀川はうなだれて、戦争前夜の欧州から故国へ帰って来たが、其処もまた同じ妖雲が全アジアの空を包んでいるのを知った。

賀川の帰朝後半年ならずして、盧溝橋事件が起こり、日支間に火蓋は切られた。これは、肉身相喰むにひとしい悲劇であった。彼はこの悲報を耳にして泣いた。涙で泣いたというのではない。全生、全霊で泣きぬれたのである。

賀川は泣きながら机の上にあった紙片に詩を書いていた。書いたというよりは、おのづと、湧いて出たのである。あとで、春子夫人が行って見ると、ペンのあとが、彼の涙でにじんで見られた。

涙と語る

涙よ 涙よ

幼き日よりの親しき涙よ

しばらく別れていた涙よ

またお前と同居するときにきたね

真夜中に、夜明けに

真昼に 午後に

お前はしばしば私を訪ねてくるね

お前は私の弟支那の

ほろびゆくニュースをつたえてくれては

私を罵って帰ってゆくね

私はお前に罵りをいくらでもうける

私は卑怯者ではない

ただ日本を愛し、支那をも愛している

この二人の愛するものに

喧嘩をさせたくない
そのために私は毎日苦しんでいるのだ
私は失神者のような
また幽霊のような存在をつづけている
人の罪を負って十字架にかかった
イエスの弟子の私は
国の罪をも負わねばならず
背負いきれない国の罪に
私の頸はしずみ
頭はうなだる
おお 涙よ 涙よ
しばらく別れていた涙よ
また同居する日が来たね

1937・9

この詩は、牧師小川清澄の手からトラウト嬢の手にわたり、同嬢が翻訳してクリスチャン・センチュリーに掲載された。

敵国にこの人あり

日支戦争は拡大して行った。アメリカの識者は眉をひそめていたが、センチュリー誌上に掲載された賀川の詩により、日本人全体が戦争を望んでいるのではないことが判って対日感情が幾分やわらげられた。

この詩は中国にも翻訳され「敵国日本になお賀川豊彦あり」と支那の識者を喜ばせ、蒋介石氏夫人のごとき、「日本に賀川が居る限り、日本人を憎むことができぬ」とさえいったという。しかし、日支親善を望む者や、世界平和を希望する者に喜ばれただけ、この詩は、日本の軍閥の激怒を買った。そしてこれが後述するような事件を招来する一因ともなった。

昭和十三年十一月、日本軍が広東や武漢三鎮に進撃した頃、賀川は印度マドラスに開かれる世界宣教大会に出席のため渡印した。その途中シンガポールの集会で行った演説が、日本軍閥を攻撃し、反戦思想を鼓吹するものとして、出先軍部の睨むところとなり、またその帰途、上海の或る宴会で、「日本人として私は中華民国に陳謝する」と侵略戦争を詫びたことが、さらに彼等の怒りを買った。

憲兵隊に拘置せらる

こうした報告と、彼の非戦論的字句の掲げられている北米賀川後援会のカレンダーなどの資料と、その右翼団体からの情報など、彼の反戦的行動の証拠資料が一通り揃うと共に、憲兵隊は昭和十五年八月二十五日、賀川と秘書役の小川清澄を渋谷憲兵隊に拘引した。そして十八日間、同隊に留置取調べた後、巣鴨拘置所へ移し、そこでも三日間拘置して九月十三日に至って漸く釈放した。

彼が釈放されてから二週間して日独伊三国同盟が成立し、英米との関係は俄に陰悪の度を加えた。軍閥の決意は牢固抜くべからざるものがあつた。そして最後の切り札として、アメリカの有識者層に多くの知友を持つ賀川が、基督教親善使節団と共に渡米し、各地の教会関係者と戦争回避について懇談することとなった。賀川は昭和十六年四月五日アメリカに向けて旅立った。

賀川は腎臓の病も忘れ、喉の破れるまで、戦争の回避を叫ぶこと三百余回、平和を祈りつつ旅すること百五十日におよんだ。

祈りの旅

祈りては旅する米大陸

今日もまた神の御前に

鳩のごとくわが喘ぎを訴う

平和を地上に 光を民衆の心にと

声もなく祈る 今宵！

ひとり居の 淋しき旅舎に

大能者の嘆きを耳にしつつ

十字架の基督のもだえを思いつつ

ひたすら天主にすがる

シカゴは塵埃にしづみ

街灯はガスにかすめど

わが心は晴れて煙らざる

神の国をぞ待つ！

あゝ 悩ましき罪の世よ

あすもまた祈りの旅をつづけむ

しかし、彼の力が弱いではなかったが、敵、軍国主義の魔手はあまりにも強大であった。賀川の一
百日に余る力戦も甲斐なく、日本軍閥の強引な戦争誘導に、七月二十五日、金曜日の午後、大統領
は日本資金の凍結令を発し、最早戦いは避け難いところまで追い詰められ、賀川は八月十八日、最後
の引き揚げ船龍田丸で空しく帰朝するの已むなきに至った。涙多き詩人の心中はどうであったであらう
か。彼は船中でしみじみと、神と人生について考えた。

かげろふの人生

一百日の宣伝に

漸く 日米親善を

捷(か)ち得しと思ひしは

束の間

七月廿五日(金)午後四時

大統領ルーズベルトは

日本資金の凍結令を

発した

さびしき

かげろふよ

五十年の生命

生れては 亡び

亡びてはまた 産む

小さき昆虫のわびしさ

噫、人生

定かならず

空中に浮遊する雲にも

似たる その悲しさに

尚も罪悪を犯す

霧の生命よ

とは云え

その瞬間の連続に

尚 神の光明を仰ぎ

大自然の驚異に

打ちのめされ

無限に呼吸する

光栄こそ

幸福の極なれ

かげろふ

悲しかなず

瞬間の生命

をしからず

その一瞬に

絶対者に

抱きつく

その歓喜だに

あらば

五十年の生命

また短しとせず

生命よ

ゆけ

齢も加はれ

齒も抜け

皺もよれ

小さきかげろふは

既に絶対者の太陽を

抱擁し

無限の蜜月(ハネムーン)に

出発したよ

悲哀も 流血も

爆弾も 地雷火も

その無限との

抱擁を引離し得無いよ

あゝ

私はキリストによりて

悲哀を

もう忘れて了つたよ

あゝ 人生苦悩の

救済者は

大自然の蜜月(ハネムーン)に

私を運び入れた

戦争も 死も

飢饉も 疫病も

私を脅迫し得ない

宇宙修繕の法則は

赤き血として

この小さき かげろふにも

経廻れば

朽ち行く身は

栄光の体と化し

毛虫の体にも

天使の羽根が與へられ

私は

栄光を見んために

天界に

飛び立つことを許された

あゝ かげろふも

飛び立てば

無限への飛躍に

蜜月の歓喜に

酔ふよ

飢餓も 窮迫も

既に 私を 慣らせた――

私は暗殺の手に

倒ることありとも

絶対者との

繋がりに

身体の死を

敢えて厭ひはせぬ

地上の家

破れなば

私は寧ろ

天上に憩はむ

さらば

かげろふの生命よ

地上の繋がりよ

絶つべきものは

絶て！

無限と結婚したる者に

悲哀は無い

さらば

瞬間よ

私は その中にも

絶対を呼吸するよ

最終章 永遠の乳房

四十年間の作詩三百篇

大正八年に刊行を見た賀川豊彦の第一詩集『涙の二等分』は貧民窟の詩を主としたもので、そのために特に「貧民窟詩集」とサブタイトルが付いている。

その後、散文詩は、彼の論文と一緒に収録されて『地殻を破って』『星より星への通路』『雷鳥の目醒むる前』『地球を墳墓として』等の如何にも詩人らしい標題の下に刊行されたが、独立した詩集は出なかった。

そして『涙の二等分』から六年を経て、大正十四年十二月、福永書店から『永遠の乳房』が出版された。収められた詩は約百四十篇。これは彼の名声が波紋が拡がるように四方に響きわたり始めた頃――労働運動や東都の震災の救護事業に挺身し、また海の内外にわたって、往時のパウロやウエスレーのように、キリストの福音を宣べ伝えるため、席あたたまる暇もなかった大正後半期の約七年間の収穫である。

編者はこの詩集の中に収められた詩の重なるものを「労働運動の歌」「こども愛の歌」および「世界を家として」に分けて既に抄録した。

ついで『永遠の乳房』に遅ること十七年、昭和十八年五月、日独書院から第三詩集『天空と黒土を縫合せて』が出た。この中に収められたアメリカを始め豪州、ニュージーランド、印度等に使いし際の作品六十八篇、この中の佳品はこれまた「世界を家として」と題して本稿に既に掲載した。

なお独立した詩集ではないが、昭和八年に出版された『彷徨と巡礼』（春秋社）の中には、日本内地やアジアその他を旅した際の詩が四十五篇収められているがこれも既に適宜収録した。

以上、賀川の詩は『涙の二等分』の約七十篇、『永遠の乳房』の百四十篇、『天空と黒土を縫合せて』の六十八篇、『彷徨と巡礼』の四十五篇とを併せて合計三百篇を越える。一般の詩人としても、寡作とはいえないであろう。

私の生活は私の詩

しかし賀川は記している。

「私の詩は私の生活である。私の生活は私の詩である。言葉は私の、いと小さい一部分にしか過ぎない」

賀川は尋常の言葉の詩人ではない。生活詩人である。そして同時に信仰詩人である。これをふっくらめて預言詩人といっているであろう。

この預言詩人としての賀川の面目を最もよく表現しているのが『永遠の乳房』である。この詩集の中には、貧民窟時代の終わり頃から戦時へかけての約七八年間における彼の宗教詩、生活詩が多量に収められているが、また海の内外にわたる伝道旅行の先々での自然詩も少なくない。しかし、直接信仰をうたってはなくても、彼がうたう時、岩石からさえ神の聲が聞こえて来る。

賀川自らもこういっている。

「私は詩の外に書けない男であるかも知れぬ。私はそれが上手、下手と云うことを離れて、私の胸の渦巻に、さうした旋律の外、感ずることが出来ないのである。私に取っては、科学も、哲学も、宗教も、経験も、生活も、凡てが、詩になる。内なるものは内なるものの生命の詩となり、外なるものは、表象の詩となる。」

一切を神に賭けた「神の賭博者」賀川にとって、神を離れて彼の生活はない。彼は神によって活かされ、生きているのである。彼を養うために、神は天の一角から永遠の乳房を下し給うて、その乳房から滾々として流れ出る天の乳によって、彼の肉体とたましいは飢ゆることがないのである。

詩集『永遠の乳房』の名は、詩集巻末に収められた長詩の題名をとってつけたものであるが、その長詩は堂々十頁を越えた雄渾なる宗教詩であって、嘗てルーテルがいった「詩は懺悔である」との言葉を思わせる深沈なる詩である。その一部を左に抄題しよう。

永遠の乳房

アブラハムは 砂漠の飢えを知った

飢えの後に 彼はめぐみを知った

しぐれが降って 青葉が出て

山羊の乳がふくれて来た

アブラハムは 山羊の乳で養われた

天から 大きな乳房が下がっている

エル・シャダイの神は 天の乳房の神であった

彼の至るところに 天から乳房が下がっている

荒野のアラムにも 砂漠に近いベルシバにも

マモレの 壇の側にも カンナは砂地でも

乳の蜜が流れた

生まれたばかりで 眼も見えぬ仔犬が

母犬の乳房にぶら下がりて呑むように

アブラハムは 神の乳房に吸い付いた

果てもなく 乳は出るよ！

悲しみに 憂いに さすらいに

天の乳房は 唯一の慰めであった

父が永逝した日 甥が虜になった日

最愛の妻が ひとり児を残して 地上を去った時

ただ一つの望み

愛子イサクを捧げよとの み聲を聞いた瞬間

大きな眼に涙を一杯ためて

ただ天の乳房に唇をよせることだけが残されていた

そして天の乳房は

嘗て彼を失望させたことはなかった

アブラハムの吸った乳房は 私の吸う乳房である

私の上に 天の乳房は無数に下がっている

貧乏に 困苦に 讒誣(ざんぷ)に 迫害に

エル・シャダイの神は 今も私に乳房を吸わせて下さる

私の住むところは

川の向こうのヘブル 荒野に近いペリシテ人の住むところ

たとえ 熱風が 私のテントを巻き上げても

天の乳房は姿を隠したことがない

それは 滾々として尽きざる泉である

永遠の乳房よ！ 永遠の乳房よ！

神のふところから 溢れ出る永遠の乳房よ！

それは むづかる孤児にも

ひねくれた私の魂にも 最上の糧である

乳が流れる一天の乳が！

天の銀河にも 乳が湧く！

さらば 私の魂は飢えることがない

永遠の乳房が 私を待っていてくれる

あゝ 永遠の乳房！ 永遠の乳房！

大空と共に歩む者

こうして自らの魂を顧み、恩寵を感謝する賀川は、生死を越え、ただまっしぐらに神の備え給うた道を進む。道途の毀誉褒貶などは敢えて意に介するところではない。彼はただ大空と共に歩むのだ。

大空を歩む

戦争の噂

宣伝の憎しみ

凡てを越えて

天を愛する

その心

そのために

なやみぬれば

金銭、毀譽

生死一

あらゆる者を越えて

静かに

静かに

天と共に

坐る

その心

彷徨の旅

さびしからず

運命の世界

狭からず

ただ

天と共に

その日を行く

大空の一日

今日も

太陽と共に

大空を歩む

聖書にいうところの「天に坐する者」こそ、たましいの賀川の姿である。彼は国境を越え、生死病老を越えて、太陽と共に大空を歩むものである。

既に生死を超越し、苦悩や悲しみを忘れた彼は、あだかもヨブのような固い信仰に立って、凡ては魂の装飾にすぎぬ--と、いみじくも歌い放つのである。

凡ては私の魂の装飾よ

誤解さるとき

静かに 立ち

責めらるる とき

勇敢に忍び

貧しけれども

多くの人を富まし

何にも持たざる日も

凡てのものを持つ

悲しみ 悲しmitらず

苦痛(くるしみ)、苦痛ならず

生死を越え

祈の中に

ただ

帰り行く

父のみ胸

槇(まき)の生垣

小川よ 池よ 農村よ

凡ては 私の魂の為めの

装飾よ--

--安房北條の孤児のテントにて

宮沢賢治の「雨ニモ負ケズ」を思わせる素朴な格律が、読む者の心を打つ。

たましいの坑夫

賀川は、道を求めて、日々、真理の坑道を掘り進んで行く「たましいの坑夫」である。そしてこの求道の心こそ、神は住み給う—とうたうのである。

真理の坑道

真理の坑道の試索に—

けさも 午前四時に 起き上つたよ

無理をして 無理が通らず

十年の 克己 なくして

真理の鉱脈を掘り当てることは出来ない

あゝ真理は 自制するもののみに

組する

急いで 追いつかず

求めずして 得られざる 真理は

娼婦の如く 求めざるに

来訪するものではない

五十年の努力

尚足らず 尋ねて止まざる

その求道の心—

その求むる心にこそ 神は生き給ふ

心の坑道

深く降(くだ)り

撓まざる 真理の鉱脈を尋ね

神のひめし

意匠の 世界さがせば

真理の曙は かなたの

雲間より

物質の形なす幕を破って

私のために 明けて行く

真理は安佚(あんいつ)を

貪るものには

姿を現さない

闇に 迷宮に

気力を失はないで

掘り下げて 行くものにのみ

その秘密を 打明ける

私は こつこつ 朝早くから起きて

また、真理の坑道を

掘り下げて行くのだ！

たましい凱歌

賀川は、神に支えられ。人類の救いのために重荷を負うて行く真理の旅人である。神の支えがなければ、一步も進めないことも知っている彼は、ひたすらに、神が彼のためにくびきをわかち給うことを祈るのだった。

支え給へ主よ

負へる荷を

支え給へ 主よ

重荷にたえ兼ね

わが足はゆらぐ

かわらざる

みてもて ひかせ給へ。

主よ

重荷に わが腕は

わななく。

みささえなくば

歩みがたし

ただみめぐみを

たよりに 今日の日を

すすむ 主よ 主よ。

わがために

かくは祈らず、

わが負へる

悲しみの国のため

かくは祈る。

くびきを

別ち給へ主よ

支へ給へ

主よ 主よー

1923・9

掘り下げて行く真理の坑道は、神が支えて、くびきを別ち給うても、決して安易な道ではなかった。それは茨の道であった。

全世界を家とする賀川は、キリストの道を伝えるため、おいづるを肩に、東に西に、南に北にさまようたましいの巡礼者である。このたましいの巡礼者は今もつづけられている。そして、彼は天国に凱旋するその日までつづけられるのだ。

だが彼の巡礼行は、四国八十八ヶ所の巡礼のように安易ではなかった。神より給う「報酬」はゆたかであったが、しかし世の人の目は冷たく、どんどろ大師のお弓のように、「野に寝たり、山に寝たり」の日がつづいた。

巡礼者賀川は、巡礼自身を「世にもいとしいもの」としていたわり、励ましている。彼が昭和四年末からほとんど独力を以て開始し、今なおつづけている神の国運動--キリスト全国伝道を自ら顧みてこう歌っている。

巡礼者の姿

子らの 樂園を捨て

梅毒と酒乱と

白痴と狂暴の

地獄へ投げ出され

定りたる住家なく

旅より旅に

十字架を背負ひ歩く、

巡礼者の姿こそ

世にもいとしく姿である。

書齋を捨てて

四年六ヶ月、

旅にねる日の重なるにつけ

思ひ出さるは

若き日、四年八ヶ月の

貧民窟の生活であった。

定められたる 神の指図に従ひ

歩き出したとはついへ

日本の移り変る姿の

予想せられたるが

悲しくもまたさびし

とにかく 十字架の戦士として

四年六ヶ月の戦闘に

不思議な摂理で守られた。

戦闘は必ずしも有利ではなかった、
然し それは奇跡的のそれではあった。
祈って町に近づけば
曇りは忽ち晴れ行き
凡ての戦ひは想像以上に
祝福を受けた。
それはあまりにも 恵まれた戦であった
喉ははかれ 舌のただれる
日はあっても
翌日の戦に余力の残って
ゐないやうなことはなかった。
おお血肉の戦に出るに
凱旋の聲をあげてくれる群はあっても、
霊の見えざる悪の力と戦ふ戦士に
凱歌 あげてくれる人はない、
然しうなだるな 魂よ
勝利に近いぞ！
十字架は それ自身勝利ではないが！

若山牧水は「けふもまた心の鉦(かね)をうち鳴らし」と人生の旅路を歌ったが、わが預言詩人賀川豊彦は、人類の救いのため、福音の鐘を心に鳴らしつつ、十字架のおいづるを肩に、津々浦々の札所に、迷えるたましいを訪ねて行くのだ。

そして、この神の子の巡礼のために、エル・シャダイの神は、永遠の乳房を天から下し、尽くるところを知らぬ乳をもって彼を支え給うのである。 (完)

* * *

付記

村島帰之氏の隠れていた名作『預言詩人・賀川豊彦』を、今回このブログで94回にわたって連載することができました。第1回は本年(2011年)9月14日でしたから、ほぼ毎日3ヶ月以上に及びました。

この名作に注目するに至った経緯については、第1回の冒頭に記した通りですが、最初に本年5月の段階でA4版92頁の私家版を仕上げ、神戸の記念館、東京と鳴門の記念館にそれぞれ配信していましたが、今回は大幅に分量も増える結果となりました。

それは、はじめにも書きましたように、新聞連載という制約もあって、肝心の賀川豊彦の詩作品そのものの引用が不完全であったためですが、今回の連載では、すべての作品の原書にあたりながら、可能な限り完全を期したための大幅増頁です。

今回のこの作業は、賀川豊彦の詩作品を書き写すことと、村島帰之の世界をより身近に学ぶことが重なって、私にとって毎日がとても楽しいものとなりました。とりわけ、村島帰之という人物に、あらためて強く魅かれるものを覚えました。

連載の途中でも書きましたが、村島が最晩年の闘病中に書き残した14回に及ぶ労作「労働運動昔ばなし」を入手・通読する機会もありました。賀川と村島の生きた時代の理解にいっそうの興味をもつことができました。いずれこれも、同時進行の別のブログで紹介する機会もつくれると思います。

